



神奈川県
統計センター

平成28年(2016)年度
神奈川県景気動向指数年度報

平成29年11月

は し が き

神奈川県では、平成10年2月から、県内景気の現状把握や将来予測に資する指標である景気動向指数を毎月公表しています。

平成18年度分からは、この指数の推移を1年度分とりまとめ、景気や経済を知る上で基礎知識や資料を加えた年度報を発行しており、このたび「平成28(2016)年度神奈川県景気動向指数年度報」を作成いたしました。

具体的には、平成28年度における神奈川県景気動向指数の動き、県生産指数などの採用指標の寄与度や変化の方向のほか、用語の解説や、日銀短観（企業短期経済観測調査結果）神奈川県分など、県内景気を把握する上で重要な情報等を掲載しています。

我が国の経済は、アベノミクスの取組の下、平成24年末から緩やかな回復基調が続いています。28年後半からは、海外経済の緩やかな回復を背景に、輸出や生産が持ち直すなど企業部門を起点にした好循環が進展しており、雇用情勢が一段と改善する中で人手不足感はバブル期並みに高まっています。

一方、本県の神奈川C I一致指数の動きをみますと、平成28年9月までは緩やかな下降傾向が続きましたが、28年10月から上昇傾向を示しています。採用系列のうち、特に、県雇用保険初回受給者数や県投資財出荷指数、県生産指数が上昇に寄与しました。

神奈川の景気を把握する資料として、この年度報が各方面で幅広く御利用いただければ幸いです。

最後になりましたが、情報を提供していただきました各機関の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成29年11月

神奈川県統計センター 所長

濱野 潔

【 目 次 】

I 平成28年度の特徴

1	神奈川県景気動向指数の概要	
	神奈川県C I一致指数の動き	1
	神奈川県C I一致系列の寄与度（累積）	1
	神奈川県C I一致指数の長期的な動き	2
	KD I累積一致指数の動き	2
2	系列ごとの動き（神奈川県C I）	
	神奈川県C Iと全国C Iの比較	3
	神奈川県C I寄与度	4
3	系列ごとの動き（KD I）	
	KD Iと全国D Iの比較	5
	KD I変化方向表	6

II 景気動向指数でみる景気の動き

4	景気動向指数の見方	
	景気動向指数の概要	7
	景気循環と景気動向指数	7
	C IとD I	7
	指数の作成方法	8
	3つの指数（先行・一致・遅行）	8
	季節調整	8
	（参考）逆サイクルについて	8
	指数の見方	9
	C IとD Iの違い	9
	神奈川県C IとKD Iの比較	10
	景気基準日付（景気転換点）	11
	神奈川県景気動向指数の公表	11
	遡及改訂について	11
	（参考）後方移動平均について	11
5	景気動向をみる手がかり	
	全国の景気動向指数	12
	景気判断	12
	経済主体の分類	12
6	景気基準日付	13
7	KD I累積指数グラフ	14
8	長期時系列データ	
	先行指数	15
	一致指数	17
	遅行指数	19
9	採用系列	
	採用系列一覧	21
	採用系列の選定方法について	22
	（参考）X-12-ARIMAについて	22

10	個別系列の推移をみるために	
	個別系列の変動要素	23
	長期的な推移をみる	23
	経済分野別個別系列の分類	24
	具体的なグラフの見方	25
	12か月移動平均	25
	グラフでみる景気の動き	26
11	個別系列の推移（一致系列）	27
	（参考）神奈川県の実況規模	34
12	個別系列の推移（先行系列）	35
13	個別系列の推移（遅行系列）	39
14	個別系列の数値	43
15	ヒストリカルD I	
	ヒストリカルD I	45
	ブライ・ボッシュン法	45
	景気基準日付の設定	45
	ヒストリカルD Iの推移	46
16	神奈川県景気動向指数検討委員会と採用系列の見直し	
	神奈川県景気動向指数検討委員会	47
	委員会開催状況	47
	採用系列の見直しの状況	48

Ⅲ 景気動向指数と他の経済指標

17	神奈川県景気動向指数と県内景気指標	49
18	主な経済関連レポート（景気判断）	51

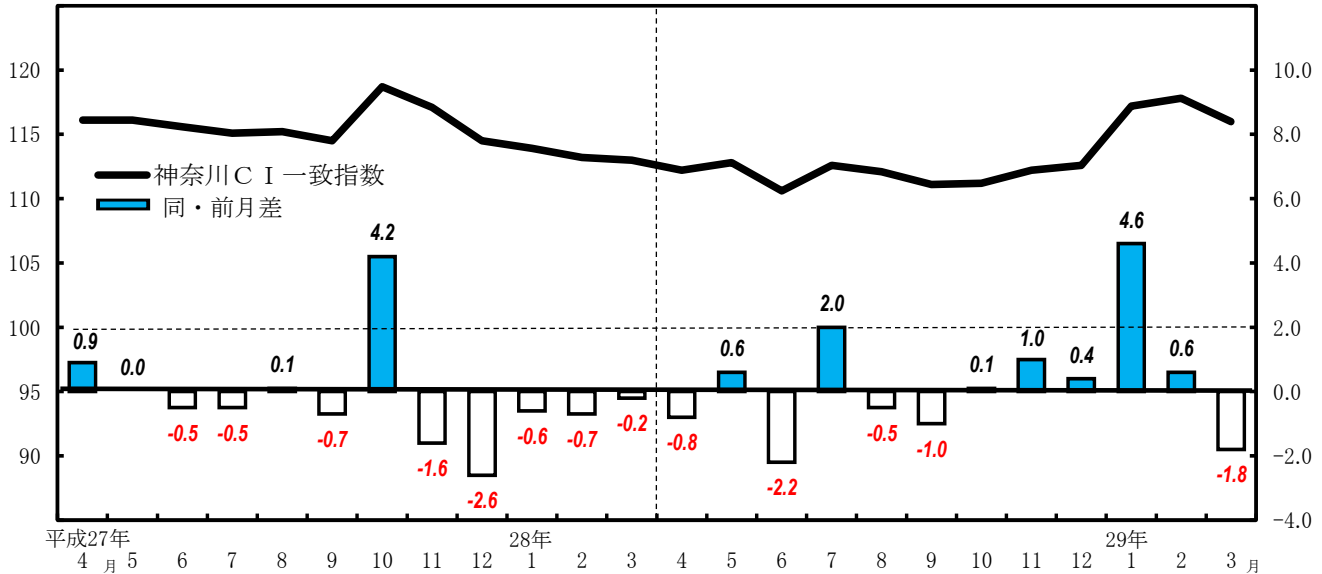
<利用上の注意>

- (1) 景気動向指数とは、生産、雇用など様々な経済活動での重要かつ景気に敏感に反応する指標の動きを統合することにより、景気の現状把握及び将来予測に資するために作成された指標です。
- (2) 内閣府経済社会総合研究所において全国の景気動向指数であるC I（コンポジット・インデックス）とD I（ディフュージョン・インデックス）を作成しており、神奈川県では県版C Iとして「神奈川C I」を、県版D Iとして「KD I」を作成しています。
- (3) 本書では、内閣府が作成し公表する景気動向指数を「全国の景気動向指数」、全国のC Iを「全国C I」、全国のD Iを「全国D I」として掲載しています。
- (4) 採用している基礎統計が確報値を公表するなどした場合、過去にさかのぼって改訂します。
- (5) 平成28年9月に採用系列を変更しています。
- (6) 本書に掲載の数値は、原則として平成29年7月31日現在のものを使用しており、過去に公表した数値とは異なることがあります。

神奈川県C I一致指数の動き

一致指数(平成22年=100)

前月差(ポイント)

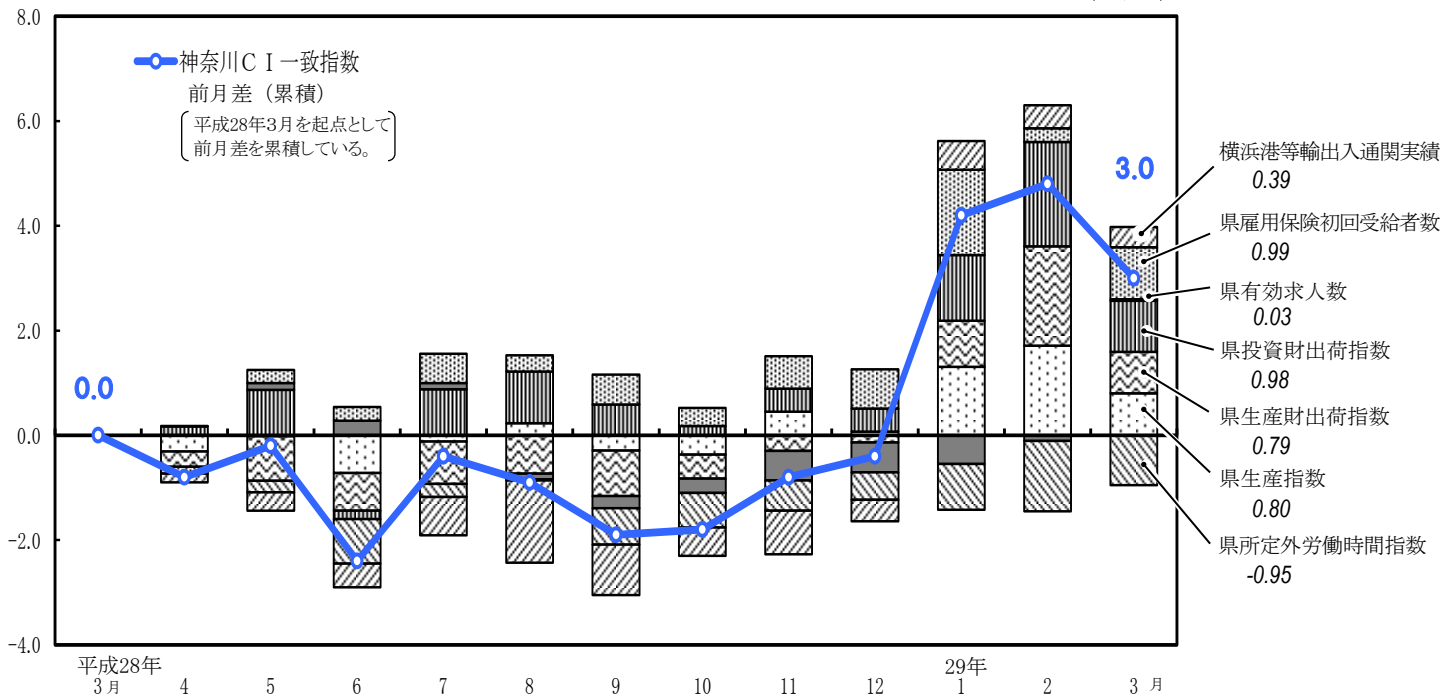


- 平成27年度は10月に大きく上昇したものの、28年9月まで緩やかな下降傾向が続きました。28年10月からは上昇傾向を示しており、特に、29年1月は県生産指数、県生産財出荷指数など採用系列7系列のうち6系列が上昇したことから、大きく上昇しています。

注：グラフ中の「前月差の白抜き部分」は、マイナスを表している。

神奈川県C I一致系列の寄与度（累積）

(ポイント)

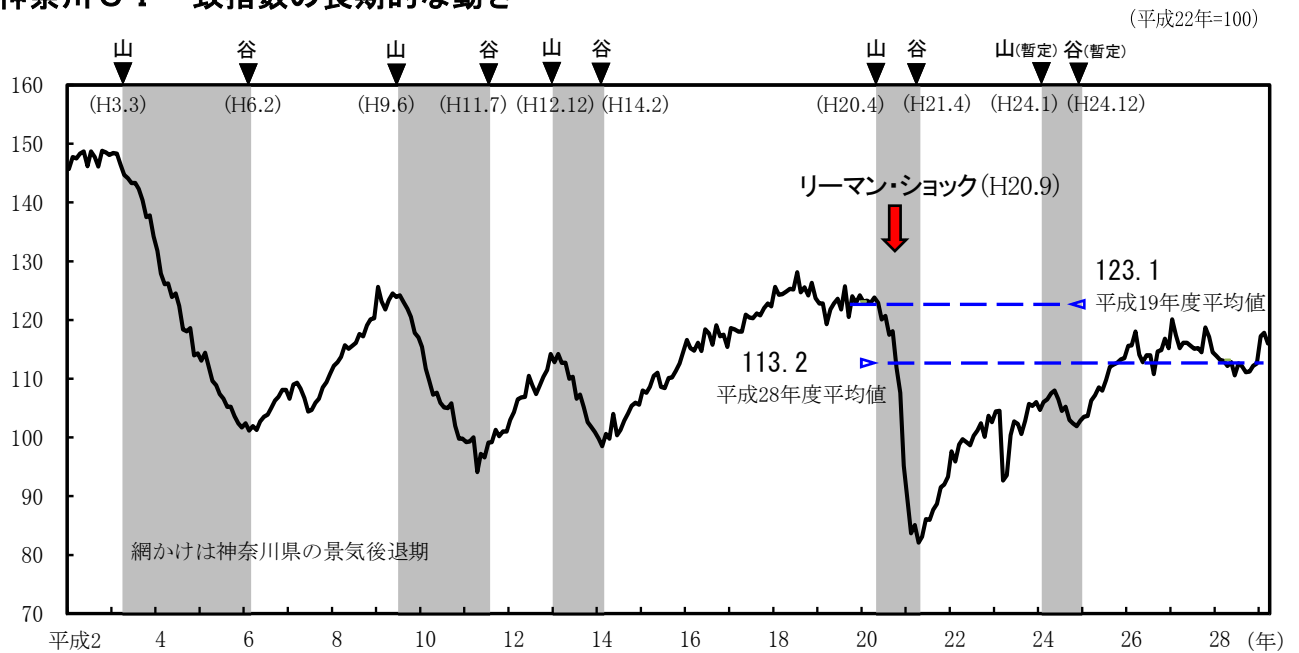


- 平成28年度の神奈川県C I一致指数は、28年3月から29年3月までで、累積して3.0ポイント上昇しました。採用系列のうち、特に、県雇用保険初回受給者数や県投資財出荷指数、県生産指数が上昇に寄与しました。

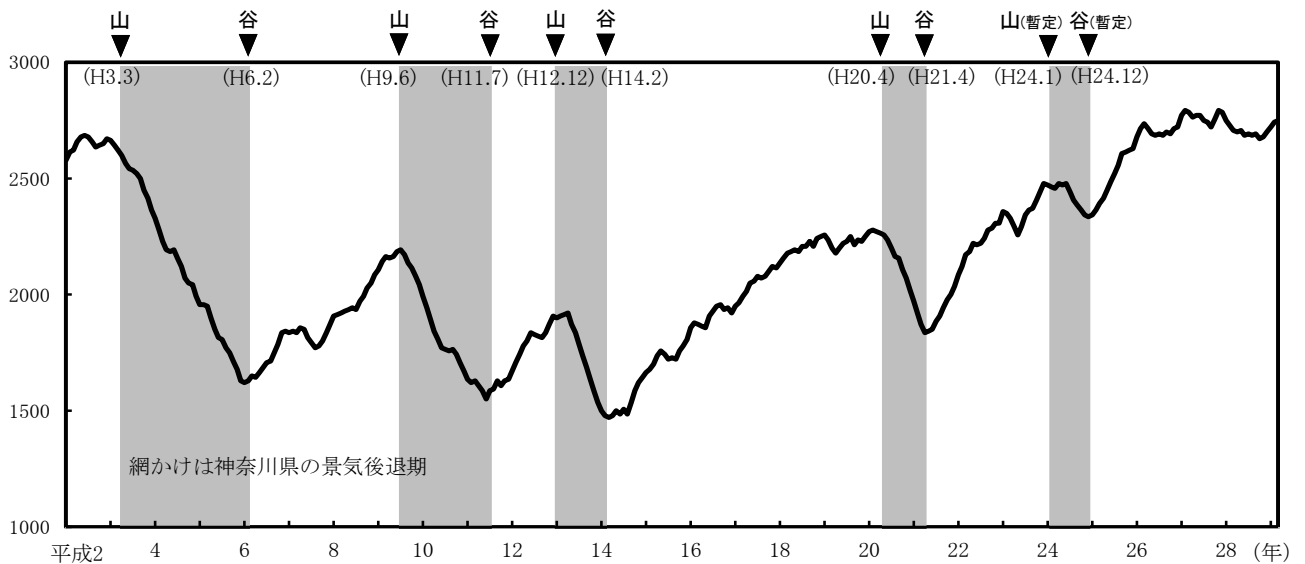
・寄与度は⇒p. 4参照

・構成指標（採用系列）は⇒p. 21参照

神奈川C I 一致指数の長期的な動き



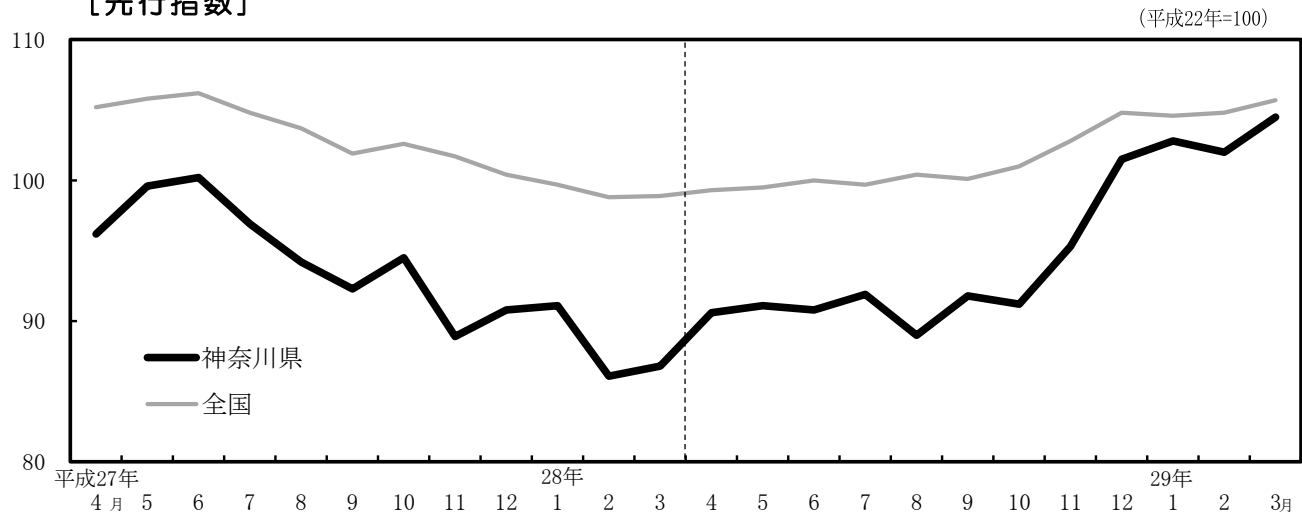
K D I 累積一致指数の長期的な動き



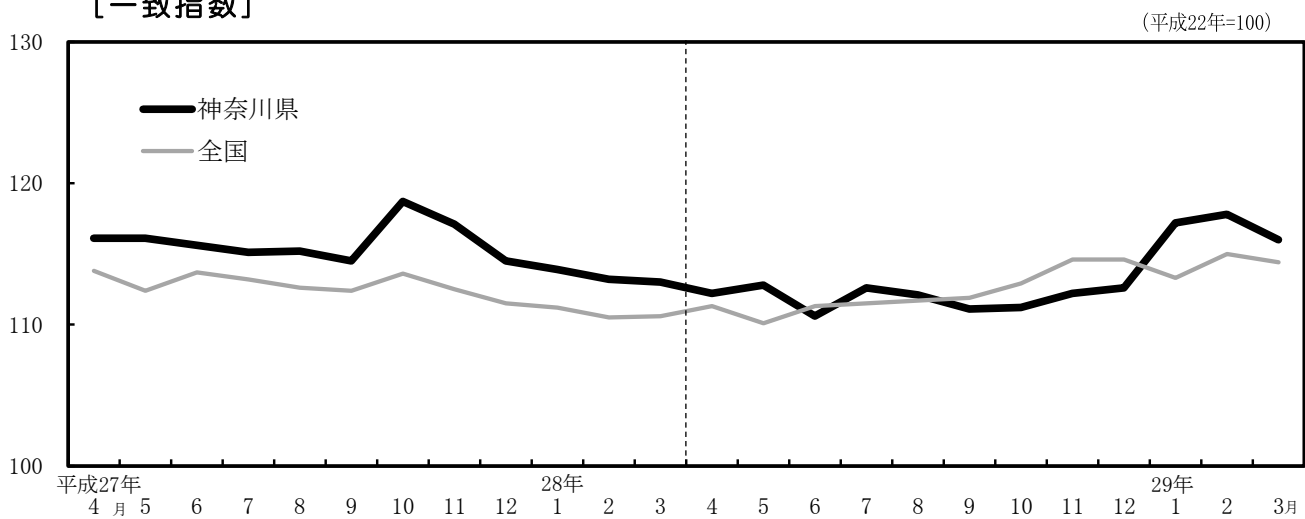
神奈川CIと全国CIの比較

- 先行、一致、遅行の系列ごとに、神奈川県と全国の平成27年度から28年度の値をグラフにしました。
- 神奈川県と全国の指数は、先行指数については、いずれも平成27年7月から下降した後、28年3月からは上昇傾向となっていますが、特に、神奈川県の方が28年11月から大きく上昇しています。一致指数については、いずれも緩やかに下降した後、全国は28年6月から、神奈川県は28年10月から上昇傾向を示しています。遅行指数については、いずれもほぼ横ばいですが、28年11月以降、全国は上昇傾向にある一方で、神奈川県は下降傾向にあります。

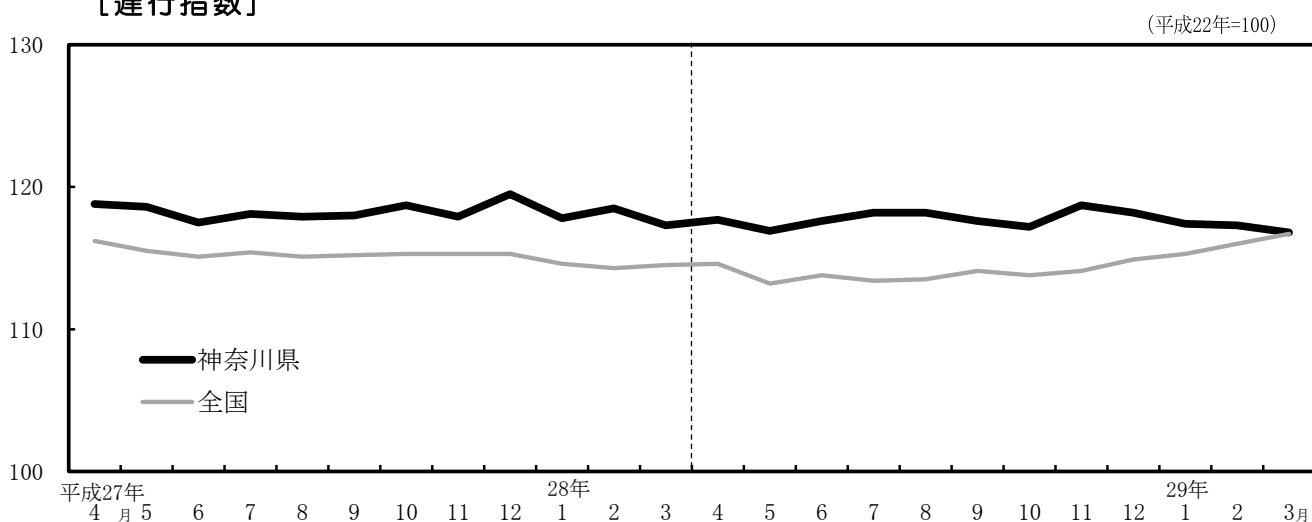
【先行指数】



【一致指数】



【遅行指数】



2 系列ごとの動き（神奈川県 C I）

神奈川県 C I 寄与度

- 寄与度とは、C I の前月からの変化（前月差）が、各採用系列からどの程度もたらされたのかを示した数値です。表の網かけは、数値がマイナスであることを表しています。

【先行指数】	平成28年									平成29年			累積
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
指数 (H22年=100)	90.6	91.1	90.8	91.9	89.0	91.8	91.2	95.3	101.5	102.8	102.0	104.5	—
前月差 (ポイント)	3.8	0.5	-0.3	1.1	-2.9	2.8	-0.6	4.1	6.2	1.3	-0.8	2.5	17.7
L1 県最終需要財在庫率指数(逆)	2.01	-1.71	0.50	0.78	-2.21	2.14	0.30	1.64	-1.09	-0.24	-1.66	2.43	2.89
L2 県生産財在庫率指数(逆)	0.11	0.25	-0.31	0.43	-0.07	-0.04	-1.28	2.23	0.27	0.93	-0.19	0.24	2.57
L3 県新規求人数(除く学卒)	0.87	0.27	-0.20	-0.27	-0.57	0.18	0.10	-1.16	1.17	-1.01	1.14	-0.63	-0.11
L4 県乗用車新車新規登録・届出台数	1.05	-0.40	-0.10	0.15	-0.21	-0.79	1.74	0.15	0.54	0.02	0.21	-0.42	1.94
L5 消費者態度指数(関東)	-0.47	0.78	0.79	-1.03	1.42	0.20	-1.14	-1.69	2.45	0.70	-0.46	1.76	3.31
L6 県企業倒産件数(逆)	-0.83	0.84	-0.42	0.47	-1.08	0.88	-1.16	0.68	1.08	-0.43	-0.11	-1.54	-1.62
L7 日経商品指数(42種)	0.89	0.28	-0.64	0.43	-0.27	0.09	0.77	2.22	1.68	1.12	0.19	0.54	7.30
一致指数トレンド成分	0.23	0.16	0.08	0.12	0.14	0.10	0.05	0.07	0.08	0.17	0.16	0.13	1.49
3か月後方移動平均 (前月差)	87.8	89.5	90.8	91.3	90.6	90.9	90.7	92.8	96.0	99.9	102.1	103.1	—
	-0.17	1.67	1.33	0.44	-0.70	0.33	-0.23	2.10	3.23	3.87	2.23	1.00	15.10
7か月後方移動平均 (前月差)	89.8	89.3	89.6	89.8	89.5	90.3	90.9	91.6	93.1	94.8	96.2	98.4	—
	-0.24	-0.49	0.27	0.16	-0.30	0.82	0.62	0.68	1.48	1.72	1.44	2.21	8.37

【一致指数】	平成28年									平成29年			累積
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
指数 (H22年=100)	112.2	112.8	110.6	112.6	112.1	111.1	111.2	112.2	112.6	117.2	117.8	116.0	—
前月差 (ポイント)	-0.8	0.6	-2.2	2.0	-0.5	-1.0	0.1	1.0	0.4	4.6	0.6	-1.8	3.0
C1 県生産指数(製造工業)	-0.31	0.29	-0.70	0.60	0.35	-0.52	-0.08	0.82	-0.38	1.24	0.40	-0.91	0.80
C2 県生産財出荷指数	-0.29	-0.56	0.13	-0.09	0.08	-0.14	0.41	0.16	0.16	1.02	1.02	-1.11	0.79
C3 県投資財出荷指数	0.17	0.70	-1.03	1.04	0.11	-0.40	-0.41	0.26	0.00	0.81	0.74	-1.01	0.98
C4 県有効求人数(除く学卒)	0.01	0.12	0.15	-0.16	-0.23	-0.12	-0.04	-0.29	-0.01	0.02	0.44	0.14	0.03
C5 県雇用保険初回受給者数(逆)	-0.13	0.38	0.01	0.30	-0.25	0.26	-0.23	0.28	0.13	0.88	-1.37	0.73	0.99
C6 県所定外労働時間指数(計)	0.00	-0.22	-0.63	0.60	0.23	-0.68	0.04	0.08	0.06	-0.35	-0.47	0.39	-0.95
C7 横浜港等輸出入通関実績	-0.17	-0.18	-0.10	-0.28	-0.84	0.61	0.42	-0.29	0.42	0.96	-0.11	-0.05	0.39
3か月後方移動平均 (前月差)	112.8	112.7	111.9	112.0	111.8	111.9	111.5	111.5	112.0	114.0	115.9	117.0	—
	-0.57	-0.13	-0.80	0.13	-0.23	0.16	-0.46	0.03	0.50	2.00	1.87	1.13	3.63
7か月後方移動平均 (前月差)	114.7	113.8	112.9	112.6	112.4	112.1	111.8	111.8	111.8	112.7	113.5	114.0	—
	-0.33	-0.85	-0.92	-0.28	-0.25	-0.30	-0.26	0.00	-0.03	0.94	0.75	0.55	-0.98

【遅行指数】	平成28年									平成29年			累積
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
指数 (H22年=100)	117.7	116.9	117.6	118.2	118.2	117.6	117.2	118.7	118.2	117.4	117.3	116.8	—
前月差 (ポイント)	0.4	-0.8	0.7	0.6	0.0	-0.6	-0.4	1.5	-0.5	-0.8	-0.1	-0.5	-0.5
Lg1 県在庫指数(製造工業)	-0.06	-0.26	0.32	-0.10	0.30	-0.47	-0.15	0.32	-0.08	0.08	0.16	-0.70	-0.64
Lg2 県普通営業倉庫保管残高	-0.33	0.14	0.19	0.05	0.04	-0.06	-0.61	0.11	-0.16	-0.12	-0.40	0.46	-0.69
Lg3 県常用雇用指数(計)	0.05	-0.01	0.25	0.12	-0.14	0.18	-0.02	0.69	-0.82	-0.03	-0.15	-0.22	-0.10
Lg4 県有効求職者数(除く学卒)(逆)	0.18	0.08	-0.06	-0.06	-0.08	-0.06	0.01	0.02	-0.16	-0.81	-0.07	0.02	-0.99
Lg5 家計消費支出	0.06	-0.35	-0.04	0.24	-0.03	-0.14	0.16	0.11	0.15	-0.11	0.26	-0.33	-0.02
Lg6 消費者物価指数(横浜市・除く生鮮食品)	0.19	-0.39	0.00	0.20	-0.19	0.01	0.19	0.19	0.39	-0.01	-0.19	-0.19	0.20
Lg7 県内銀行貸出約定平均金利	-0.02	-0.16	-0.13	0.01	-0.10	-0.10	-0.07	-0.04	0.04	0.01	0.07	0.32	-0.17
一致指数トレンド成分	0.31	0.20	0.10	0.16	0.18	0.13	0.07	0.09	0.10	0.20	0.19	0.14	1.87
3か月後方移動平均 (前月差)	117.8	117.3	117.4	117.6	118.0	118.0	117.7	117.8	118.0	118.1	117.6	117.2	—
	-0.04	-0.53	0.10	0.17	0.43	0.00	-0.33	0.16	0.20	0.07	-0.47	-0.46	-0.70
7か月後方移動平均 (前月差)	118.2	117.9	117.9	117.7	117.8	117.6	117.6	117.8	118.0	117.9	117.8	117.6	—
	-0.04	-0.26	-0.04	-0.19	0.06	-0.13	-0.01	0.14	0.19	-0.03	-0.13	-0.20	-0.64

L4: 普通車、小型車及び軽自動車の合計 C7: 横浜港・川崎港・横須賀港の貿易額(輸出入額)合計、円ベース Lg5: 勤労者世帯・関東大都市圏

(逆) : 逆サイクル (計) : 調査産業計 累積 : 平成28年3月を起点として前月差を累積

一致指数トレンド成分 : 先行指数と遅行指数は、作成する際に一致指数の採用系列の過去のデータから算出した長期的傾向(トレンド)を用いるため、一致指数トレンド成分の寄与度を表示している。

・後方移動平均は⇒p. 9【指数の見方(C I)】、p. 11【参考】参照 ・逆サイクルは⇒p. 8【参考】参照

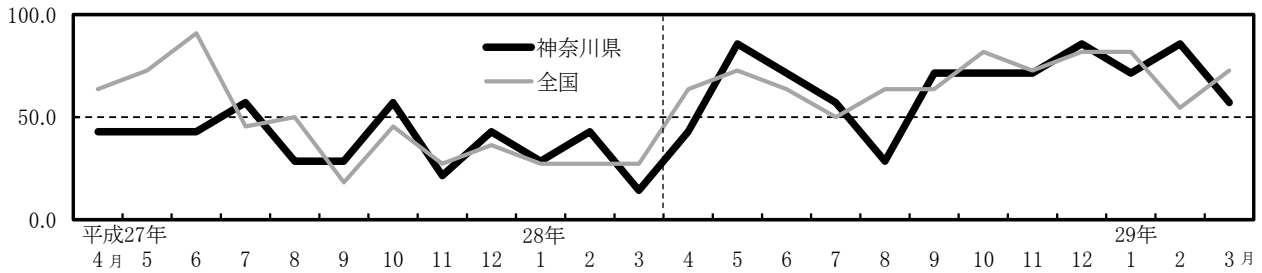
KDIと全国DIの比較

- 先行、一致、遅行の各系列ごとに、神奈川県 (KDI) と全国の平成27年度から28年度の値を表とグラフにしました。表の網かけは指数が50%未満の月です。
- 神奈川県と全国の指数は、先行指数が概ね同じ傾向で推移し、一致指数及び遅行指数については、動きに差が見られました。特に、一致指数は平成28年6月以降、逆の動きを示すことが多く、遅行指数は平成28年10月以降、全国には上昇傾向が、神奈川県には下降傾向が見られます。

[先行指数]

(単位:%)

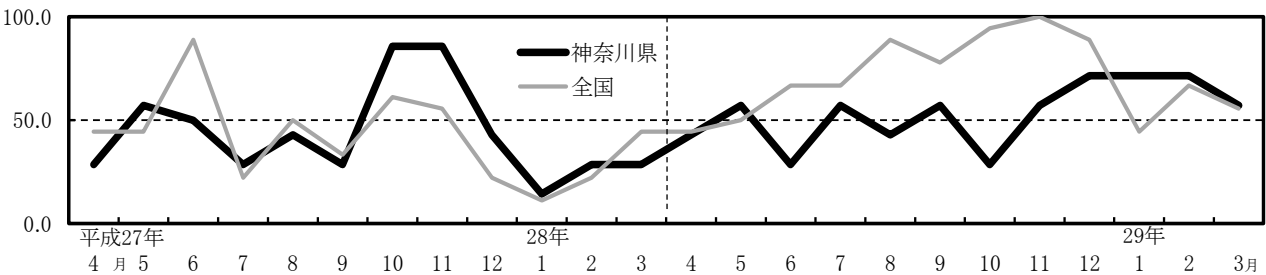
	平成27年度												平成28年度											
	平成27年												28年											
	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
神奈川県	42.9	42.9	42.9	57.1	28.6	28.6	57.1	21.4	42.9	28.6	42.9	14.3	42.9	85.7	71.4	57.1	28.6	71.4	71.4	71.4	85.7	71.4	85.7	57.1
全国	63.6	72.7	90.9	45.5	50.0	18.2	45.5	27.3	36.4	27.3	27.3	27.3	63.6	72.7	63.6	50.0	63.6	63.6	81.8	72.7	81.8	81.8	54.5	72.7



[一致指数]

(単位:%)

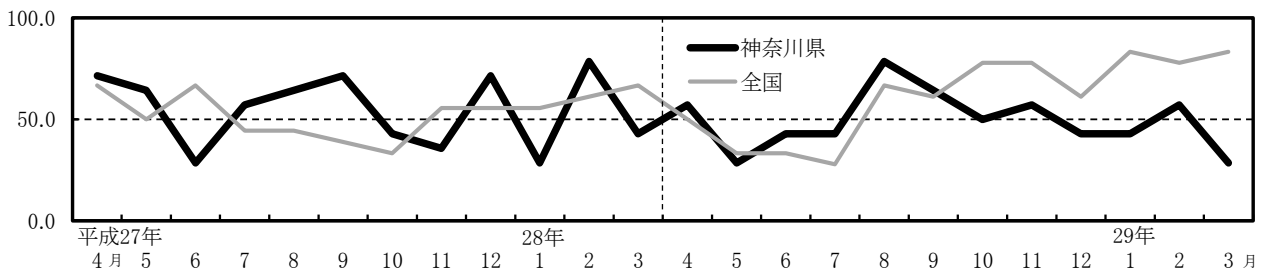
	平成27年度												平成28年度											
	平成27年												28年											
	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
神奈川県	28.6	57.1	50.0	28.6	42.9	28.6	85.7	85.7	42.9	14.3	28.6	28.6	42.9	57.1	28.6	57.1	42.9	57.1	28.6	57.1	71.4	71.4	71.4	57.1
全国	44.4	44.4	88.9	22.2	50.0	33.3	61.1	55.6	22.2	11.1	22.2	44.4	44.4	50.0	66.7	66.7	88.9	77.8	94.4	100.0	88.9	44.4	66.7	55.6



[遅行指数]

(単位:%)

	平成27年度												平成28年度											
	平成27年												28年											
	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
神奈川県	71.4	64.3	28.6	57.1	64.3	71.4	42.9	35.7	71.4	28.6	78.6	42.9	57.1	28.6	42.9	42.9	78.6	64.3	50.0	57.1	42.9	42.9	57.1	28.6
全国	66.7	50.0	66.7	44.4	44.4	38.9	33.3	55.6	55.6	55.6	61.1	66.7	50.0	33.3	33.3	27.8	66.7	61.1	77.8	77.8	61.1	83.3	77.8	83.3



3 系列ごとの動き (KDI)

KDI 変化方向表

- DI では、採用系列それぞれ3か月前の数値との比較で、改善していれば+（プラス）、悪化していれば-（マイナス）、変化がない保合い（もちあい）の時には0と変化方向を評価し、採用系列数に対するプラス（拡張系列）の数の割合を求めています。マイナス評価は網かけ表示としています。

注：保合いの場合は0.5としてカウント

[先行指数]	平成28年												平成29年			変化方向の集計		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	プラス (+)	保合い (0)	マイナス (-)			
L1 県最終需要財在庫率指数(逆)	+	+	+	-	-	+	+	+	+	-	-	+	8	0	4			
L2 県生産財在庫率指数(逆)	-	+	-	+	-	+	-	+	+	+	+	+	8	0	4			
L3 県新規求人数(除く学卒)	-	+	+	+	-	-	+	-	+	-	+	-	6	0	6			
L4 県乗用車新車新規登録・届出台数	+	+	+	-	+	-	+	+	+	+	+	-	9	0	3			
L5 消費者態度指数(関東)	-	+	+	+	+	+	+	-	-	+	+	+	9	0	3			
L6 県企業倒産件数(逆)	-	-	-	+	-	+	-	+	+	+	+	-	6	0	6			
L7 日経商品指数(42種)	+	+	+	-	-	+	+	+	+	+	+	+	10	0	2			
拡張系列数	3	6	5	4	2	5	5	5	6	5	6	4						
採用系列数	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7						
先行指数(%)	42.9	85.7	71.4	57.1	28.6	71.4	71.4	71.4	85.7	71.4	85.7	57.1						

[一致指数]	平成28年												平成29年			変化方向の集計		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	プラス (+)	保合い (0)	マイナス (-)			
C1 県生産指数(製造工業)	-	+	-	+	+	+	-	+	+	+	+	+	9	0	3			
C2 県生産財出荷指数	-	-	-	-	+	-	+	+	+	+	+	+	7	0	5			
C3 県投資財出荷指数	-	+	-	+	-	+	-	-	-	+	+	-	5	0	7			
C4 県有効求人数(除く学卒)	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+	+	6	0	6			
C5 県雇用保険初回受給者数(逆)	+	+	+	+	-	+	-	+	+	+	-	-	8	0	4			
C6 県所定外労働時間指数(計)	+	-	-	-	+	+	-	-	+	-	-	-	4	0	8			
C7 横浜港等輸出入通関実績	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	6	0	6			
拡張系列数	3	4	2	4	3	4	2	4	5	5	5	4						
採用系列数	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7						
一致指数(%)	42.9	57.1	28.6	57.1	42.9	57.1	28.6	57.1	71.4	71.4	71.4	57.1						

[遅行指数]	平成28年												平成29年			変化方向の集計		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	プラス (+)	保合い (0)	マイナス (-)			
Lg1 県在庫指数(製造工業)	+	-	-	-	+	-	-	-	-	+	+	-	4	0	8			
Lg2 県普通営業倉庫保管残高	-	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	+	6	0	6			
Lg3 県常用雇用指数(計)	-	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	6	0	6			
Lg4 県有効求職者数(除く学卒)(逆)	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	9	0	3			
Lg5 家計消費支出	+	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-	8	0	4			
Lg6 消費者物価指数(横浜市・除く生鮮食品)	+	-	-	-	0	0	0	+	+	+	+	-	5	3	4			
Lg7 県内銀行貸出約定平均金利	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	2	0	10			
拡張系列数	4	2	3	3	5.5	4.5	3.5	4	3	3	4	2						
採用系列数	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7						
遅行指数(%)	57.1	28.6	42.9	42.9	78.6	64.3	50.0	57.1	42.9	42.9	57.1	28.6						

L4: 普通車、小型車及び軽自動車の合計 C7: 横浜港・川崎港・横須賀港の貿易額(輸出入額)合計、円ベース Lg5: 勤労者世帯・関東大都市圏

(逆) : 逆サイクル (計) : 調査産業計

・逆サイクルは⇒p. 8 [参考]参照

景気動向指数の概要

景気の変動は、私たちが暮らす経済社会の中に、意図したわけでもないのに自然に存在する経済の動向の一つといえます。

多くの研究者や実務家が景気循環や経済予測を探究していますが、経済の秩序を解明し、景気の先行きをつかむことは、株価を予測することと同じほど困難ともいわれています。このような中で景気動向指数は、景気の現状把握や将来予測に資するために作成されています。

景気動向指数とは、**生産、雇用など様々な経済活動での重要かつ景気に敏感に反応する指標の動きを統合し、単一の指標によって景気を把握しようとするものです。**作成の簡便さや速報性に優れることが特徴ですが、GDP（国内総生産）のように、非常に多くの経済指標を用い経済活動を総合的に把握する中で景気を捉えようとするものではないことに留意する必要があります。

景気動向指数は、景気の山、景気の谷といった景気転換点（景気基準日付といいます）を判定するためにも用いられています。なお、景気基準日付の設定には長期の移動平均をとる必要があるため、その年月から少なくとも1年以上遅れて設定しています。

- ・景気基準日付は⇒[p. 11](#), [p. 13](#)参照

景気循環と景気動向指数

経済活動には、右図のように活発なときと停滞するときがあり、景気が良いときと景気が悪いときが繰り返されています。このことを景気循環や景気変動と呼びます。

景気の転換点である、景気の谷から次の景気の谷までを、景気の1循環といいます。この1循環の間に景気の拡張局面と後退局面があります。

拡張局面を回復期と拡張期に分け、後退局面を後退期と不況期に分ける4局面の見方がありますが、景気動向指数では**景気循環を拡張と後退の2局面で分類**しています。

なお、景気転換点となった年月を景気基準日付といいます。

CIとDI

景気動向指数には、CI（コンジット・インデックス）とDI（ディフュージョン・インデックス）の2種類があります。

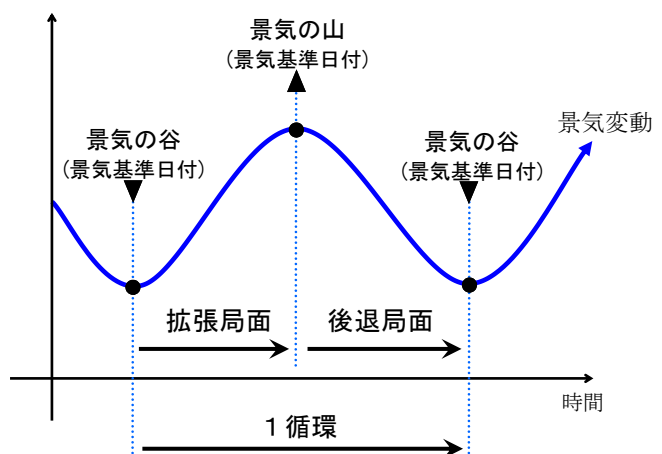
CIは採用系列の動き（変化量）を合成することで過去と比較した相対的な景気変動の大きさや勢いを測定することを目的としています。DIは採用系列のうち改善した系列の割合を算出することで景気各経済部門への波及の度合いを測定することを目的としており、景気が拡張局面なのか後退局面なのかといった景気方向性を示します。

	作成方法	目的
CI	採用系列の動き(変化量)を合成	景気変動の大きさや勢いを測定
DI	採用系列のうち改善した指標の割合算出	景気各経済部門への波及度を測定

全国の景気動向指数のCIとDIは、内閣府において公表しています。神奈川県では、県版CIを神奈川CIとし、県版DIをKDIとして公表しており、内閣府の作成方法に準拠しながら、その採用系列を独自に選定して作成しています。神奈川県景気動向指数の採用系列は、先行指数が7系列、一致指数が7系列、遅行指数が7系列の合計21系列としています。

- ・神奈川県景気動向指数の採用系列は⇒[p. 21](#)参照
- ・先行指数、一致指数、遅行指数は次項を参照

[景気循環図]



4 景気動向指数の見方

指数の作成方法

景気動向指数は、①景気と対応性のある統計を選定し、②季節的変動を除去したうえで、③C IとD Iそれぞれ次の方法により算出します。

C I（コンポジット・インデックス）

採用系列それぞれの前月からの変動を、過去の平均的な変動と比較することによって基準化し、それらの平均を求めて合成し、指数化します。

詳しい計算方法は内閣府のホームページで確認することができます。

D I（ディフュージョン・インデックス）

各採用系列の数値を、3か月前の数値と比較して、増加したときは+（プラス）、減少したときは-（マイナス）、変化がない保合い（もちあい）の時には0とし、先行、一致、遅行の系列ごとに、採用系列数に占めるプラス（拡張系列）の数の割合を求めます。この割合がD Iになります。

$$D I = \text{拡張系列数} / \text{採用系列数} \times 100 (\%)$$

（保合いの場合は0.5としてカウント）

統計指標の多くは毎月不規則に増減を繰り返しながら、基調としては増加、もしくは減少といった動きを示します。

そのため、このような不規則変動の影響を緩和させるため、D Iでは、前月の数値との比較ではなく、3か月前の数値と比較しています。

詳しくは⇒p. 9 [指数の見方(C I)]参照

参考：逆サイクルについて

企業倒産件数など、景気が良ければ減少し、悪ければ増加する性質のある指標を逆サイクルと呼んでいます。

逆サイクルの指標については、景気動向指数を算出する際、符号を逆転させます。これにより、景気と同方向に動く指標として扱うことができます。

3つの指数（先行・一致・遅行）

景気動向指数にはC IとD Iの2種類がありますが、それぞれ景気に対し先行して動く先行指数、ほぼ一致して動く一致指数、遅れて動く遅行指数の3本の指数があります。

景気の現状把握に一致指数を利用し、先行指数は、一般的に、一致指数に数か月先行することから、景気の動きを予測する目的で利用します。遅行指数は、一般的に、一致指数に数か月から半年程度遅行することから、事後的な確認に用います。

そのため、一般的には一致指数と先行指数が注目されます。

先行指数	景気に先行して動く ＜動きを予測＞
一致指数	景気に一致して動く ＜現状把握＞
遅行指数	景気に遅れて動く ＜事後的な確認＞

季節調整

統計調査等によって集計された値は、そのままでは毎年季節的に繰り返される規則的な増減を含んでいます。例えば、天候や気温などの自然要因や、ボーナス、決算月、夏休みなどの社会的制度・慣習による要因です。これらを季節変動と呼びます。

景気変動をよりの確に把握するためには、季節変動を除去することが必要です。これを季節調整と呼んでいます。

季節調整の手法は種々存在しますが、日本の官公庁の統計ではアメリカ商務省センサス局が開発した「X-12-ARIMA」が多くの場合用いられています。

内閣府の景気動向指数と同様に、神奈川県景気動向指数では、統計の作成元が季節調整値を公表していない場合には、原則として「X-12-ARIMA」により、独自に季節調整を行い利用しています。ただし、指標によっては、季節的な要因による変動が少ないと考えられるものや、前年同月比のほうが景気変動を捉えやすいものもあるため、個々の指標ごとに最適と考えられる方法を選んでいきます。

- ・個別の指標の季節調整方法は⇒p. 21参照
- ・X-12-ARIMAについては⇒p. 22[参考]参照

指数の見方

CI（コンジット・インデックス）

CIは、一般的に、CI一致指数が上昇している時は景気の拡張局面で、低下している時は後退局面であり、CI一致指数の動きと景気の転換点（景気の高・谷）は概ね一致します。

また、CI一致指数の変化の大きさを過去のものと比較して、景気の拡張又は後退の変動の大きさや勢いを読み取ります。

ただし、例えば景気の拡張局面においても、CI一致指数が単月で低下するなど、不規則な動きも含まれていることから、移動平均値をとることにより、ある程度の期間の月々の動きをならして、その基調的な動きを読み取る必要があります。毎月公表している速報の統計表には、足元の基調の変化をつかみやすい3か月後方移動平均と、足元の基調の変化が定着しつつあることを確認する7か月後方移動平均をあわせて掲載しています。

景気の基調をみるうえでは、経済活動の拡張（又は後退）がある程度の期間、持続しているか、またある程度の大きさで変化しているかが重要です。したがって、CI一致指数が続けて上昇（又は下降）していても、その期間が極めて短い場合は、拡張（又は後退）と見なすことは適当ではありません。また、CI一致指数がこれまでの基調と逆方向に十分に振れてから、その基調が変化したと見なします。

- ・ 後方移動平均は⇒p. 4, p. 11[参考]参照
- ・ CI一致指数から読み取る景気局面⇒p. 11参照

DI（ディフュージョン・インデックス）

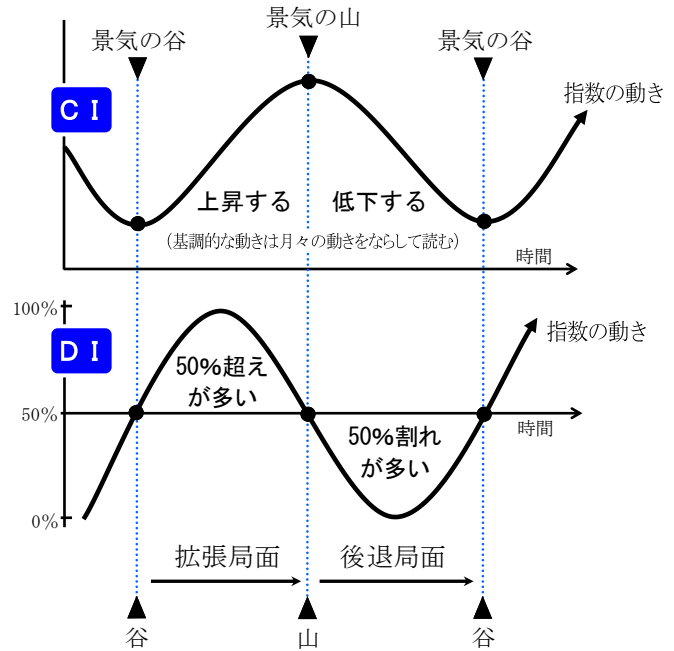
DIは採用系列のうち改善している系列の割合を算出することで、景気各経済部門への波及の度合いを表します。

月々の振れがあるものの、一般的には、景気の拡張期にはDI一致指数が50%を上回る期間が多くなり、50%を下回る期間が連続すると後退期の可能性があります。

なお、DIは、景気の拡張がどれだけ多くの経済活動の分野に波及したかを示す指標であり、景気変動の強さや景気水準を表すものではありません。このため、現実の経済活動の中で感じられる実感とは異なることがあります。

【CIとDIの動き】

※ それぞれの一致指数の動きをイメージ化しています。



CIとDIの違い

DIは景気各経済部門への波及の度合いを表す指標ですので、各採用系列が大幅に拡張しても、小幅に拡張しても、拡張した系列の割合が同じならば同じDIが計測されます。CIは景気の強弱を定量的に計測する指標ですので、DIが同じ数値で計測されたとしても、各採用系列が大幅に拡張していればCIは大幅に上昇し、各採用系列が小幅に拡張しているならばCIは小幅に上昇します。

このように、CIは、DIでは計測できない景気の高さや谷の深さ、拡張や後退の勢いといった景気の「量感」を計測することができます。

一方、DIが異なる数値で計測されたとしても、多くの採用系列で小幅に拡張した時と、一部の系列が大幅に上昇した時とで、同じCIの上昇幅が得られる場合があります。このように、CIの変化幅そのものからは経済部門の相違を把握することが難しいため、CIの変化幅に対する各採用系列の寄与度やDIをあわせて利用します。

この「CIとDIの違い」について、次項において、神奈川CIとKDIとの比較を行い、具体的に説明しています。

- ・ 寄与度は⇒p. 4参照

神奈川C IとKDIとの比較

下の2つのグラフは、平成20年1月から21年12月の期間を例として、KDI一致指数と神奈川C I一致指数前月差の推移を表しています。

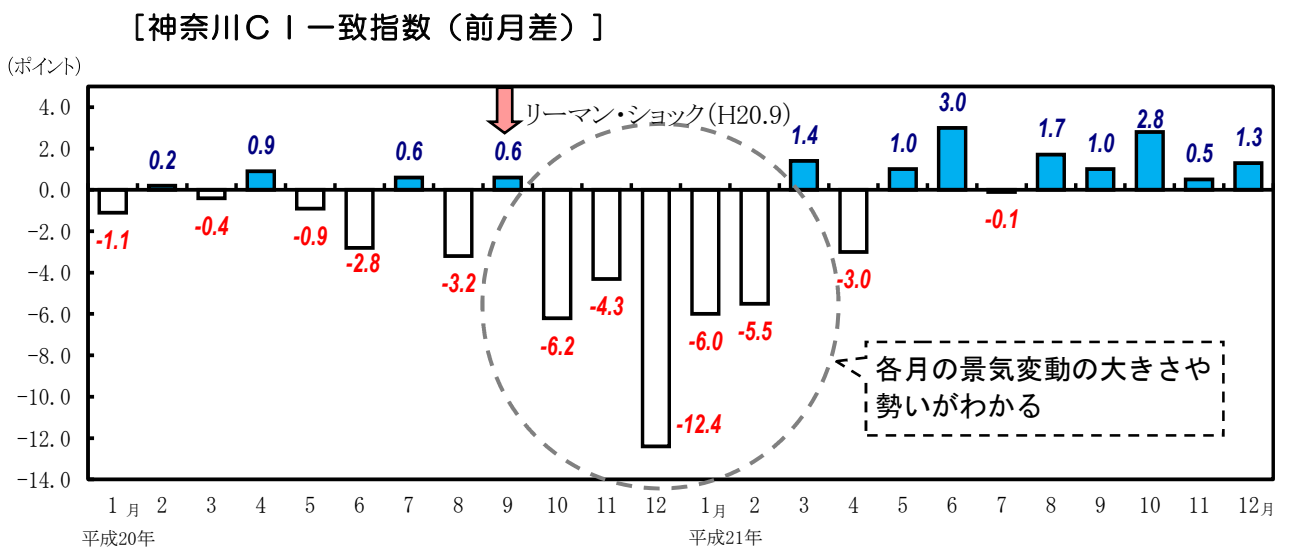
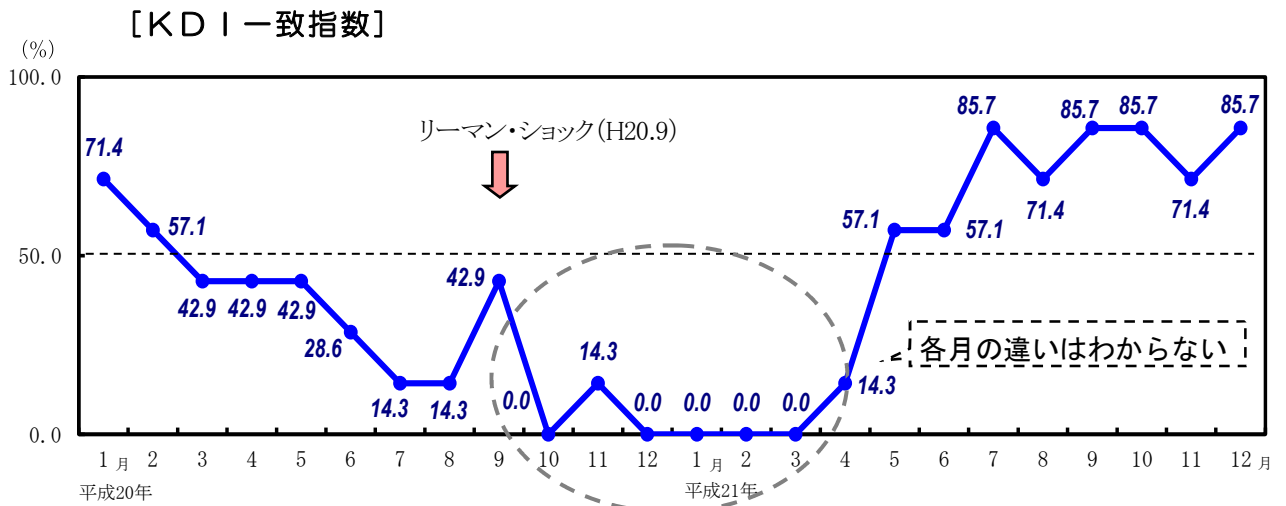
平成20年9月はリーマン・ショック[※]が起きた月です。KDI一致指数では、20年10月から景気の谷である21年4月まで、すべての月で「0.0%」、「14.3%」と同じような指数が並んでいます。

D I一致指数が、50%を大きく下回り続けていますので、景気が後退していることはわかりますが、各月の違いについてはわかりません。

一方、神奈川C I一致指数では、20年10月から12月にかけて落ち込みのテンポが厳しくなり、21年1月、2月で下落のテンポが少し緩やかになり、3月では単月ですが上昇に転じ、4月もこれまでに比べると下落のテンポは非常に小さくなっています。

このように、神奈川C Iからは景気変動の大きさやそのテンポ（勢い）がわかり、景気の方角を示すKDIとあわせて利用することにより、県内景気の動向をより把握しやすくなります。

<比較例>



注：リーマン・ショック

アメリカの大手証券会社リーマン・ブラザーズが、平成20年9月15日に連邦破産法第11条の適用を裁判所に申請。アメリカ史上最大の倒産とされ、世界的な金融危機の引き金となった。

景気基準日付（景気転換点）

景気基準日付とはいわゆる景気の山、谷のことで、景気の転換点とされます。

景気転換点は、主要経済活動の中心的な転換点と位置づけられ、景気が拡張から後退に転ずる転換点が景気の山で、景気が後退から拡張へ転ずる転換点が景気の谷です。神奈川県では、内閣府が設定している景気基準日付と同様に、神奈川県における景気循環の局面判断や各循環における経済活動の比較などのため神奈川県景気基準日付を設定しています。

景気基準日付の設定

景気基準日付の設定にあたっては、一致指数の個別系列のうち過半がピーク（ボトム）をつけたことを景気の山（谷）の判定の根拠とします。具体的には、一致指数の各系列からヒストリカルD Iを作成します。その際、個別系列の山（ピーク）や谷（ボトム）の設定は、米国の全米経済研究所(NBER)で開発されたブライ・ボッシュン法により行います。

さらに、景気基準日付は、景気動向指数以外の経済指標も利用し、学識者などから構成される神奈川県景気動向指数検討委員会にて検証したうえで設定しています。

なお、ヒストリカルD Iは一致指数の各指標の長期移動平均をもとに作成するため、実際には山や谷を過ぎてから1年以上後に景気基準日付の設定をすることになります。

- ・ヒストリカルD I、ブライ・ボッシュン法については⇒p. 45参照

C I一致指数から読み取る景気局面

毎月公表しているC I一致指数の動きからでも、ある程度は景気局面を読み取ることができます。

C I一致指数の3か月後方移動平均が上昇している局面から、低下へ切り替わってくると、景気が足踏み状態になっている可能性があり、さらに、7か月後方移動平均が低下へ切り替わってくると、すでに景気が拡張期から後退期に転換したのではないかと想定されます。

また逆に、C I一致指数の3か月後方移動平均が低下している局面から、上昇へ切り替わってくると、景気が下げ止まり状態になっている可能性があり、さらに、7か月後方移動平均が上昇へ切り替わってくると、すでに景気が後退期から拡張期に転換したのではないかと想定されます。

神奈川県景気動向指数の公表

神奈川県景気動向指数は、月報として当月分を翌々月の月末に公表しています。公表は、記者発表するほか、神奈川県のホームページ（URLは巻末参照）への公開などによって行っています。

K D Iの公表を開始したのは平成10年2月（平成9年11月分）で、以降、毎月公表しています。

神奈川C Iは、20年6月内閣府においてD IからC I中心の公表形態へ移行したことを契機に、K D Iを補完する参考指標として、23年1月（22年11月分）より一致指数のみで公表を開始しました。

その後、25年3月に実施した採用系列の改定（入替え）により神奈川C Iのパフォーマンスが向上したことから、神奈川県もK D Iから神奈川C I中心の公表形態へ移行するとともに、C I先行指数及びC I遅行指数の公表を25年3月（25年1月分）より開始しました。なお、K D Iも景気の波及度を把握するための重要な指標ですので、引き続き公表しています。

遡及改訂について

神奈川県景気動向指数で公表した値は、数値の連続性を保つため、採用系列の基準改定や年間補正、また季節調整値の再計算などに応じて、過去にさかのぼって改訂しています。

例えば、工業生産指数は、毎年6月頃に前年1月～12月までの数値を補正しています。また、毎月勤労統計調査では、対象事業所の抽出替えの際に指数のギャップ修正をします。これらに応じて神奈川県景気動向指数も遡及改訂を行っています。

- ・季節調整値の再計算は⇒p. 22[参考]参照

参考：後方移動平均について

後方移動平均とは、今月値を含み過去（後方）へ向かって平均値を算出することを指します。

例えば、3か月後方移動平均とは、前々月値から今月値までの計3か月分の平均値です。

$$\begin{aligned} \text{3か月後方移動平均値} = \\ (\text{前々月値} + \text{前月値} + \text{今月値}) \div 3 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{7か月後方移動平均値} = \\ (\text{当月より前の6か月分の値の合計} \\ + \text{今月値}) \div 7 \end{aligned}$$

5 景気動向をみる手がかり

全国の景気動向指数

全国の景気動向指数は、内閣府経済社会総合研究所の景気統計部が作成しています。

公表は月次で、翌々月の上旬に速報を、中旬頃に改訂状況を公表しています。

全国の景気動向指数には、神奈川県景気動向指数と同様に、C I と D I があり、先行系列11系列、一致系列9系列、遅行系列9系列の合計29系列からなります。

- ・全国の個別系列については⇒p. 24参照

神奈川県景気動向指数の採用系列との関係

景気動向指数に採用している個別系列の数は、全国が29系列であるのに対して神奈川県景気動向指数は21系列と少なくなっていますが、これは県域や地域単位で得られる月次の長期的な統計資料が全国のものに比べて少ないためです。

このため神奈川県景気動向指数は全国のように各経済分野を代表する指標を網羅する構成とはなっていませんが、より景気動向を敏感に反映すると考えられる指標を採用しています。

景気判断

景気が良い悪いといったコメントを景気判断と呼んでいます。官公庁による景気判断のある代表的な報告書は次のとおりです。

神奈川県内分	
神奈川県金融経済概況（日本銀行横浜支店）	
神奈川県の経済情勢報告 （関東財務局横浜財務事務所）	
全国分	
月例経済報告（内閣府）	
経済・物価情勢の展望（日本銀行）	

いずれもホームページで公開されています。

経済主体の分類

財・サービスの取引による実体経済を捉えようとする場合、次のような分類とそれらの関係が手がかりになります。

分類

- 財・サービスを需要する主体の分類
 - ・家計（消費者）による日用品ほか最終消費
 - ・企業による設備投資、建設投資など
 - ・政府による公共投資、最終消費
 - ・輸出＝諸外国からの需要（外需）
 - 財・サービスを供給する主体の分類
 - ・企業による生産活動
 - ・諸外国からの輸入
 - 生産活動を通じた所得分配の分類
 - ・労働者の所得
 - ・配当や利子などの財産所得
 - ・企業の所得
 - ・再生産のための減価償却
 - 雇用・労働の分類
 - ・企業による求人＝労働需要
 - ・家計（消費者）による労働＝労働供給
- ・神奈川県の経済規模については⇒p. 34[参考]参照

上記の分類による経済主体は相互に影響しあいます^{注1}。その中で一つの方向性をみるならば、需要の大きさが生産水準を決定し、生産が労働需要を生み出し、あわせて所得を形成します。その所得が分配され新たな消費や投資などの需要を生み出し、再び生産活動へとつながります。

神奈川県景気動向指数との関係

一般的には、景気の実感は家計の消費や雇用の状況に依存します。一方、雇用や(消費を支える)所得は生産活動から大きな影響を受けるため、神奈川県景気動向指数の一致系列には生産関連の指標を複数採用しています。雇用者数^{注2}や家計消費支出は、遅行系列に採用しています。

- ・個別系列の経済分野別分類は⇒p. 24参照

注1：参考資料[日本銀行経済統計研究会編「経済指標の見方・使い方」東洋経済新報社]

注2：遅行系列に採用している県常用雇用指数を指す。

〔神奈川県景気基準日付〕

景気基準日付（年月）			期 間			参考 国の循環と の対応	参考 国の全循環 との差
谷	山	谷	拡張	後退	全循環		
	S55. 6	S58. 2		32か月			
S58. 2	S60. 6	S61. 12	28か月	18か月	46か月	第10循環	1か月長い
S61. 12	H 3. 3	H 6. 2	51か月	35か月	86か月	第11循環	3か月長い
H 6. 2	H 9. 6	H11. 7	40か月	25か月	65か月	第12循環	2か月長い
H11. 7	H12. 12	H14. 2	17か月	14か月	31か月	第13循環	5か月短い
H14. 2	H20. 4	H21. 4	74か月	12か月	86か月	第14循環	0か月(同じ)
H21. 4	H24. 1 暫定	H24. 12 暫定	33か月	11か月	44か月	第15循環	0か月(同じ)
第10～15各循環の平均月数			40.5か月	19.2か月	59.7か月		

〔全国の景気基準日付（内閣府）〕

	景気基準日付（年月）			期 間			通称（俗称）	
	谷	山	谷	拡張	後退	全循環	拡張期	後退期
第1循環		S26. 6	S26. 10		4か月		特需景気	
第2循環	S26. 10	S29. 1	S29. 11	27か月	10か月	37か月		
第3循環	S29. 11	S32. 6	S33. 6	31か月	12か月	43か月	神武景気	なべ底不況
第4循環	S33. 6	S36. 12	S37. 10	42か月	10か月	52か月	岩戸景気	転換型不況
第5循環	S37. 10	S39. 10	S40. 10	24か月	12か月	36か月	オリンピック景気	構造不況
第6循環	S40. 10	S45. 7	S46. 12	57か月	17か月	74か月	いざなぎ景気	
第7循環	S46. 12	S48. 11	S50. 3	23か月	16か月	39か月	列島改造景気	第1次石油危機不況
第8循環	S50. 3	S52. 1	S52. 10	22か月	9か月	31か月		ミニ不況
第9循環	S52. 10	S55. 2	S58. 2	28か月	36か月	64か月		第2次石油危機不況
第10循環	S58. 2	S60. 6	S61. 11	28か月	17か月	45か月		円高不況
第11循環	S61. 11	H 3. 2	H 5. 10	51か月	32か月	83か月	バブル景気	
第12循環	H 5. 10	H 9. 5	H11. 1	43か月	20か月	63か月		
第13循環	H11. 1	H12. 11	H14. 1	22か月	14か月	36か月	IT景気	
第14循環	H14. 1	H20. 2	H21. 3	73か月	13か月	86か月		
第15循環	H21. 3	H24. 3	H24. 11	36か月	8か月	44か月		
第2～15循環の平均月数				36.2か月	16.1か月	52.4か月		

・通称(俗称)は、年次経済報告(内閣府)などによる

神奈川県景気基準日付について

- 県の景気基準日付は、昭和55年以降について設定しています。昭和58年2月から始まる循環は、全国の第10循環以降と対応しています。
- 平成21年4月を景気の谷とするの景気循環の拡張期間は、24年1月を暫定の景気の山とする33か月となり、後退期間は、24年12月を暫定の景気の谷とする11か月となっています。全循環では44か月となり、その期間は国と同じです。
- 平成24年1月及び24年12月の景気の山谷は、今後、採用指標の年間補正等により、その年月が変更することがあるため、暫定設定としています。その確定は、景気が一循環する時点で行う予定です。
- 県の拡張期間の平均月数は40.5か月で、後退期間の平均は19.2か月です。拡張期間に比べて後退期間が短くなっています。

⇒p. 45[景気基準日付の設定]参照

全国の景気基準日付について

- 全国の景気動向指数D Iは昭和35年8月から公表が開始され、その際、昭和26年6月の山から同年10月の谷までを第1循環としました。
- 平成21年3月を谷とする第15循環は、24年3月を景気の山、24年11月を景気の谷とし、拡張期間38か月、後退期間は8か月となっています。
- 第1循環以降、最長の拡張期は、第14循環の73か月です。
- 第1循環以降、最長の後退期は第9循環(第2次石油危機不況)の36か月です。
- 一循環の平均月数は52.4か月となっています。

景気基準日付（全国）関連

平成29年6月15日に内閣府にて開催された景気動向指数研究会の議事要旨を引用すると、次のとおりです。
「研究会としては、第15循環の景気の谷以降、景気の山はつかなかったとの結論について全委員の意見が一致した。これを踏まえて、経済社会総合研究所長が、第15循環の景気の谷以降、景気の山は設定されない旨、発言した。」

D I 累積指数グラフ

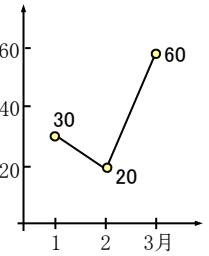
- 累積指数グラフは、景気の局面や山・谷を視覚的に捉えることができます。
- ただしグラフ上の山の大きさや高さは、景気の強弱や水準とは無関係です。
- 累積指数グラフは、各月の指数を右の算式で加算したものです。

$$\text{累積指数} = \text{前月までの累積指数} + (\text{当月の指数} - 50)$$

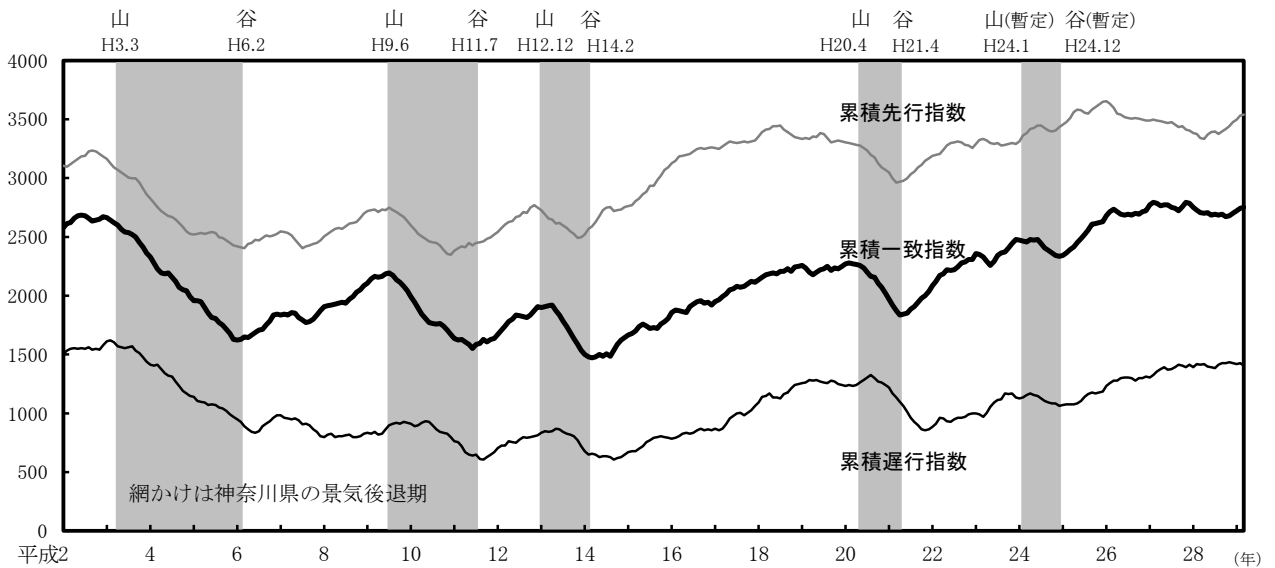
指数が50を上回ると右上がりの線、50を下回ると右下がりの線が描かれます。

《計算例》

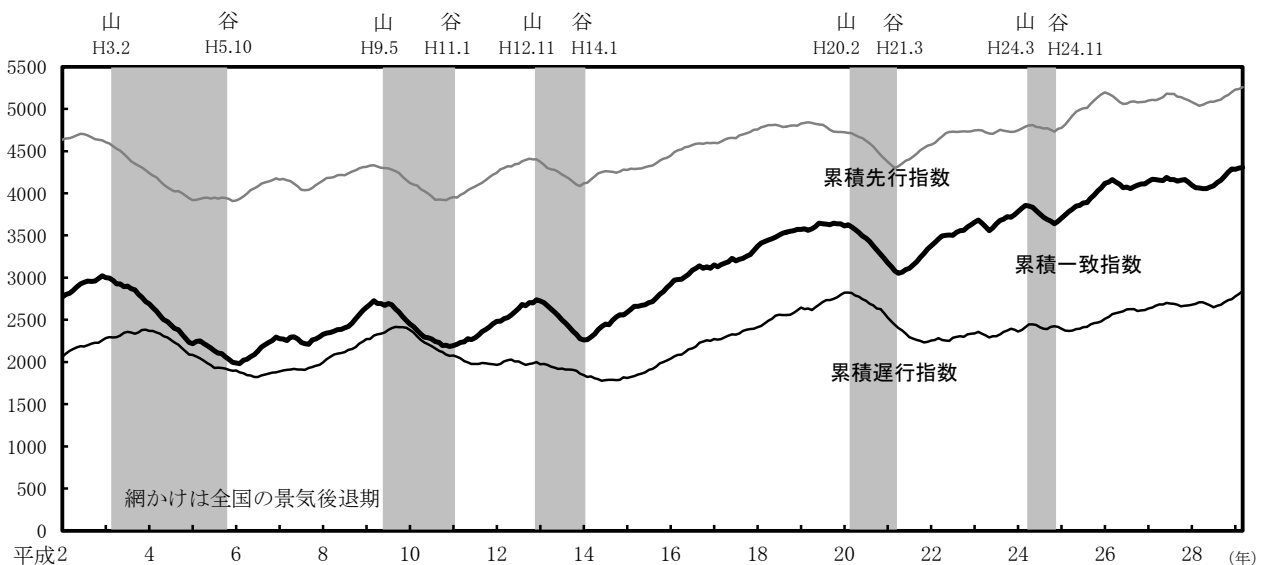
	1月	2月	3月
当月の指数	80	40	90
(当月の指数-50)	30	-10	40
累積指数	30	20	60



[KDI]



[全国DI]



注：グラフを見やすくするために、KDIは先行指数に2800、一致指数に1700、遅行指数に800を加算しており、全国DIは内閣府公表値の先行指数に4000、一致指数に1500、遅行指数に500を加算しています。

神奈川県CI先行指数

[指数表]

(平成22年=100)

西暦	和暦	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
1990	H2	133.8	137.3	135.4	141.2	138.6	139.8	142.5	142.2	139.9	140.6	139.1	135.5	138.8
1991	H3	136.3	131.9	125.0	121.7	121.3	119.0	118.0	119.8	115.2	109.4	105.3	103.2	118.8
1992	H4	101.1	97.6	99.0	94.0	95.8	96.5	96.5	89.9	91.3	87.5	83.9	87.8	93.4
1993	H5	88.8	86.4	87.6	86.8	89.1	89.8	88.3	84.7	84.3	81.9	79.7	79.0	85.5
1994	H6	80.0	81.3	82.0	87.7	87.5	89.2	90.8	94.0	93.1	91.2	96.0	96.8	89.1
1995	H7	97.4	97.9	94.7	93.4	91.1	90.1	88.4	92.3	91.7	93.2	95.0	97.2	93.5
1996	H8	99.1	101.4	102.0	100.6	101.9	102.7	104.9	103.6	105.0	107.1	109.1	107.3	103.7
1997	H9	106.0	105.4	105.3	101.6	108.4	106.9	107.8	105.9	107.4	100.2	94.7	92.6	103.5
1998	H10	89.7	88.8	87.9	84.1	84.0	83.4	83.7	81.4	81.2	76.4	76.9	78.5	83.0
1999	H11	80.1	80.7	84.3	80.3	82.4	84.7	83.9	86.1	88.3	86.9	88.4	90.0	84.7
2000	H12	94.5	94.6	94.9	99.3	98.3	101.9	98.6	101.8	102.7	103.2	103.0	102.2	99.6
2001	H13	99.9	96.6	92.8	92.7	89.5	93.1	88.1	85.6	81.9	81.7	79.6	82.6	88.7
2002	H14	84.7	86.6	90.1	94.5	98.3	100.1	96.6	97.8	94.6	97.8	95.9	94.2	94.3
2003	H15	95.9	96.9	99.3	97.8	100.5	99.9	103.0	101.5	107.4	107.2	106.3	107.9	102.0
2004	H16	112.7	115.7	120.6	118.3	120.5	120.8	124.2	125.2	123.4	123.3	125.0	119.1	120.7
2005	H17	122.5	123.0	124.3	127.0	125.2	123.7	124.6	124.8	125.7	123.5	125.8	127.8	124.8
2006	H18	131.8	132.3	132.4	133.6	135.2	131.8	132.2	126.9	123.7	122.7	121.9	122.4	128.9
2007	H19	117.6	122.4	118.4	121.4	125.7	123.5	118.2	118.3	115.5	116.5	112.3	109.6	118.3
2008	H20	111.2	109.5	108.4	111.0	108.5	105.9	104.5	94.6	96.8	86.5	81.6	75.7	99.5
2009	H21	71.1	64.0	64.7	71.6	74.1	80.9	85.9	83.0	87.5	92.5	90.7	88.0	79.5
2010	H22	92.6	93.0	97.6	103.8	104.2	101.0	101.9	105.8	101.5	96.9	100.1	101.5	100.0
2011	H23	106.4	110.6	99.5	94.4	101.7	106.0	104.1	102.8	106.3	106.0	104.1	105.5	104.0
2012	H24	112.2	113.6	116.3	116.3	116.4	112.6	112.4	111.3	107.3	107.5	108.2	110.2	112.0
2013	H25	115.3	120.2	123.6	127.9	125.7	122.7	121.5	121.5	127.6	124.4	126.6	127.7	123.7
2014	H26	127.0	116.8	116.2	111.6	111.3	111.8	111.3	109.1	108.7	104.6	104.6	104.2	111.4
2015	H27	100.0	101.3	100.3	96.2	99.6	100.2	96.9	94.2	92.3	94.5	88.9	90.8	96.3
2016	H28	91.1	86.1	86.8	90.6	91.1	90.8	91.9	89.0	91.8	91.2	95.3	101.5	91.4
2017	H29	102.8	102.0	104.5										

[前月差表]

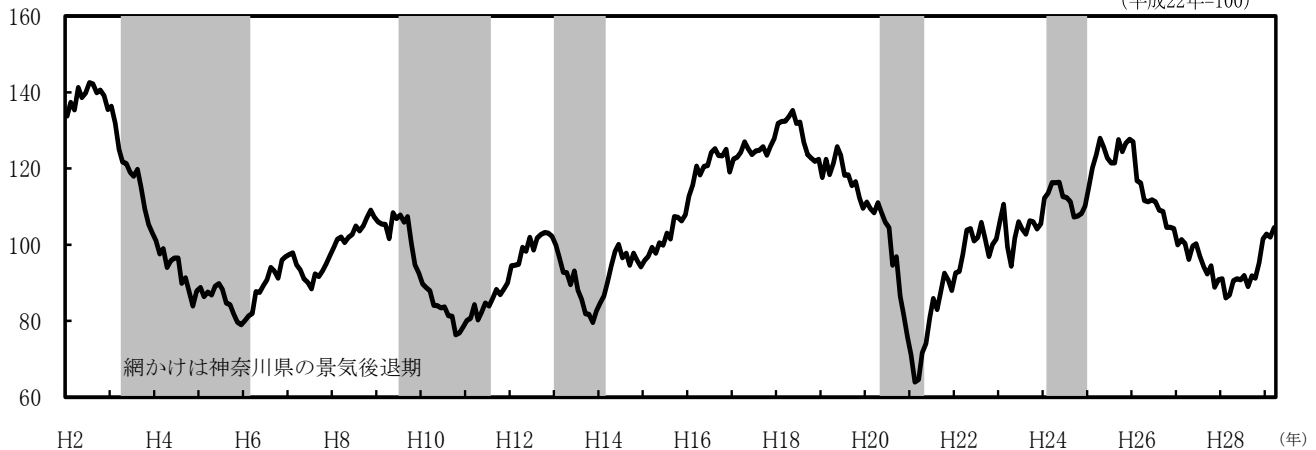
(ポイント)

西暦	和暦	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	累計
1990	H2	0.4	3.5	-1.9	5.8	-2.6	1.2	2.7	-0.3	-2.3	0.7	-1.5	-3.6	2.1
1991	H3	0.8	-4.4	-6.9	-3.3	-0.4	-2.3	-1.0	1.8	-4.6	-5.8	-4.1	-2.1	-32.3
1992	H4	-2.1	-3.5	1.4	-5.0	1.8	0.7	0.0	-6.6	1.4	-3.8	-3.6	3.9	-15.4
1993	H5	1.0	-2.4	1.2	-0.8	2.3	0.7	-1.5	-3.6	-0.4	-2.4	-2.2	-0.7	-8.8
1994	H6	1.0	1.3	0.7	5.7	-0.2	1.7	1.6	3.2	-0.9	-1.9	4.8	0.8	17.8
1995	H7	0.6	0.5	-3.2	-1.3	-2.3	-1.0	-1.7	3.9	-0.6	1.5	1.8	2.2	0.4
1996	H8	1.9	2.3	0.6	-1.4	1.3	0.8	2.2	-1.3	1.4	2.1	2.0	-1.8	10.1
1997	H9	-1.3	-0.6	-0.1	-3.7	6.8	-1.5	0.9	-1.9	1.5	-7.2	-5.5	-2.1	-14.7
1998	H10	-2.9	-0.9	-0.9	-3.8	-0.1	-0.6	0.3	-2.3	-0.2	-4.8	0.5	1.6	-14.1
1999	H11	1.6	0.6	3.6	-4.0	2.1	2.3	-0.8	2.2	2.2	-1.4	1.5	1.6	11.5
2000	H12	4.5	0.1	0.3	4.4	-1.0	3.6	-3.3	3.2	0.9	0.5	-0.2	-0.8	12.2
2001	H13	-2.3	-3.3	-3.8	-0.1	-3.2	3.6	-5.0	-2.5	-3.7	-0.2	-2.1	3.0	-19.6
2002	H14	2.1	1.9	3.5	4.4	3.8	1.8	-3.5	1.2	-3.2	3.2	-1.9	-1.7	11.6
2003	H15	1.7	1.0	2.4	-1.5	2.7	-0.6	3.1	-1.5	5.9	-0.2	-0.9	1.6	13.7
2004	H16	4.8	3.0	4.9	-2.3	2.2	0.3	3.4	1.0	-1.8	-0.1	1.7	-5.9	11.2
2005	H17	3.4	0.5	1.3	2.7	-1.8	-1.5	0.9	0.2	0.9	-2.2	2.3	2.0	8.7
2006	H18	4.0	0.5	0.1	1.2	1.6	-3.4	0.4	-5.3	-3.2	-1.0	-0.8	0.5	-5.4
2007	H19	-4.8	4.8	-4.0	3.0	4.3	-2.2	-5.3	0.1	-2.8	1.0	-4.2	-2.7	-12.8
2008	H20	1.6	-1.7	-1.1	2.6	-2.5	-2.6	-1.4	-9.9	2.2	-10.3	-4.9	-5.9	-33.9
2009	H21	-4.6	-7.1	0.7	6.9	2.5	6.8	5.0	-2.9	4.5	5.0	-1.8	-2.7	12.3
2010	H22	4.6	0.4	4.6	6.2	0.4	-3.2	0.9	3.9	-4.3	-4.6	3.2	1.4	13.5
2011	H23	4.9	4.2	-11.1	-5.1	7.3	4.3	-1.9	-1.3	3.5	-0.3	-1.9	1.4	4.0
2012	H24	6.7	1.4	2.7	0.0	0.1	-3.8	-0.2	-1.1	-4.0	0.2	0.7	2.0	4.7
2013	H25	5.1	4.9	3.4	4.3	-2.2	-3.0	-1.2	0.0	6.1	-3.2	2.2	1.1	17.5
2014	H26	-0.7	-10.2	-0.6	-4.6	-0.3	0.5	-0.5	-2.2	-0.4	-4.1	0.0	-0.4	-23.5
2015	H27	-4.2	1.3	-1.0	-4.1	3.4	0.6	-3.3	-2.7	-1.9	2.2	-5.6	1.9	-13.4
2016	H28	0.3	-5.0	0.7	3.8	0.5	-0.3	1.1	-2.9	2.8	-0.6	4.1	6.2	10.7
2017	H29	12.0	-0.8	2.5										

注：マイナスの数値を網かけ表示としている。

[指数グラフ]

(平成22年=100)



KDI 先行指数

[指数表]

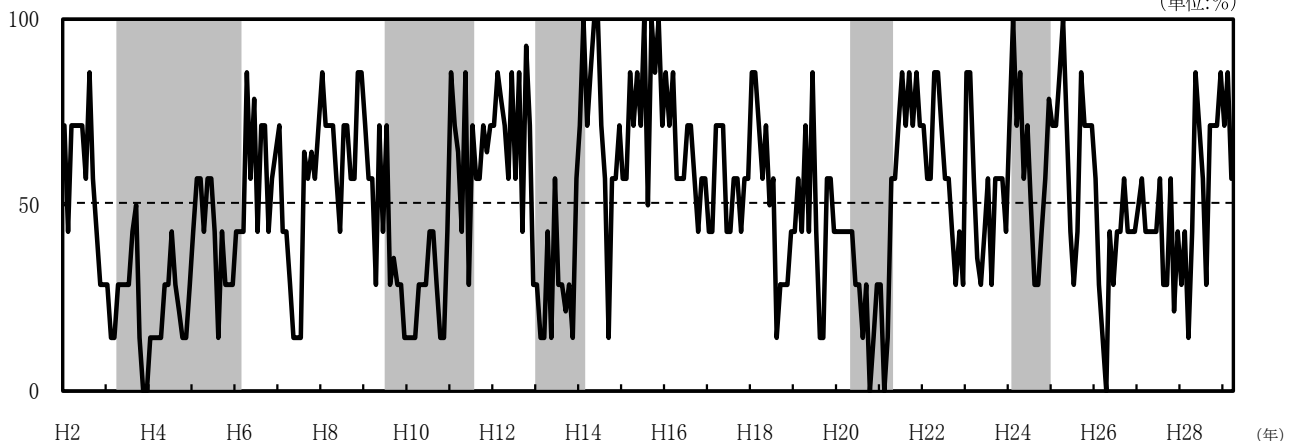
(単位:%)

西暦	和暦	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1980	S55	100.0	90.0	100.0	100.0	20.0	20.0	10.0	20.0	20.0	20.0	20.0	0.0
1981	S56	20.0	40.0	10.0	0.0	40.0	60.0	100.0	100.0	80.0	40.0	40.0	40.0
1982	S57	20.0	20.0	0.0	20.0	0.0	33.3	16.7	66.7	33.3	41.7	33.3	33.3
1983	S58	41.7	66.7	50.0	66.7	83.3	83.3	100.0	83.3	66.7	66.7	83.3	83.3
1984	S59	71.4	71.4	57.1	57.1	42.9	57.1	42.9	28.6	28.6	28.6	35.7	28.6
1985	S60	42.9	57.1	42.9	57.1	21.4	14.3	28.6	57.1	57.1	50.0	42.9	42.9
1986	S61	57.1	42.9	42.9	42.9	28.6	28.6	42.9	0.0	42.9	85.7	71.4	57.1
1987	S62	57.1	57.1	42.9	42.9	100.0	92.9	100.0	100.0	100.0	85.7	85.7	57.1
1988	S63	85.7	85.7	57.1	71.4	85.7	85.7	57.1	57.1	57.1	42.9	57.1	71.4
1989	H1	71.4	57.1	57.1	57.1	57.1	42.9	42.9	57.1	57.1	57.1	57.1	42.9
1990	H2	71.4	42.9	71.4	71.4	71.4	71.4	57.1	85.7	57.1	42.9	28.6	28.6
1991	H3	28.6	14.3	14.3	28.6	28.6	28.6	28.6	42.9	50.0	14.3	0.0	0.0
1992	H4	14.3	14.3	14.3	14.3	28.6	28.6	42.9	28.6	21.4	14.3	14.3	28.6
1993	H5	42.9	57.1	57.1	42.9	57.1	57.1	42.9	14.3	42.9	28.6	28.6	28.6
1994	H6	42.9	42.9	42.9	85.7	57.1	78.6	42.9	71.4	71.4	42.9	57.1	64.3
1995	H7	71.4	42.9	42.9	28.6	14.3	14.3	14.3	64.3	57.1	64.3	57.1	71.4
1996	H8	85.7	71.4	71.4	71.4	57.1	42.9	71.4	71.4	57.1	57.1	85.7	85.7
1997	H9	71.4	57.1	57.1	28.6	71.4	42.9	71.4	28.6	35.7	28.6	28.6	14.3
1998	H10	14.3	14.3	14.3	28.6	28.6	28.6	42.9	42.9	28.6	14.3	14.3	42.9
1999	H11	85.7	71.4	64.3	42.9	85.7	28.6	71.4	57.1	57.1	71.4	64.3	71.4
2000	H12	71.4	85.7	78.6	71.4	57.1	85.7	57.1	85.7	42.9	92.9	71.4	28.6
2001	H13	28.6	14.3	14.3	42.9	14.3	57.1	28.6	28.6	21.4	28.6	14.3	57.1
2002	H14	71.4	100.0	71.4	85.7	100.0	100.0	71.4	57.1	14.3	57.1	57.1	71.4
2003	H15	57.1	57.1	85.7	71.4	85.7	71.4	100.0	50.0	100.0	85.7	100.0	71.4
2004	H16	85.7	71.4	85.7	57.1	57.1	57.1	71.4	71.4	57.1	42.9	57.1	57.1
2005	H17	42.9	42.9	71.4	71.4	71.4	42.9	42.9	57.1	57.1	42.9	57.1	57.1
2006	H18	85.7	85.7	71.4	57.1	71.4	50.0	57.1	14.3	28.6	28.6	28.6	42.9
2007	H19	42.9	57.1	42.9	71.4	42.9	85.7	42.9	14.3	14.3	57.1	57.1	42.9
2008	H20	42.9	42.9	42.9	42.9	42.9	28.6	28.6	14.3	28.6	0.0	14.3	28.6
2009	H21	28.6	0.0	14.3	57.1	57.1	71.4	85.7	71.4	85.7	71.4	85.7	71.4
2010	H22	71.4	57.1	57.1	85.7	85.7	71.4	57.1	57.1	42.9	28.6	42.9	28.6
2011	H23	85.7	85.7	57.1	35.7	28.6	42.9	57.1	28.6	57.1	57.1	57.1	42.9
2012	H24	71.4	100.0	71.4	85.7	57.1	71.4	50.0	28.6	28.6	42.9	57.1	78.6
2013	H25	71.4	71.4	85.7	100.0	71.4	42.9	28.6	42.9	85.7	71.4	71.4	71.4
2014	H26	57.1	28.6	14.3	0.0	42.9	28.6	42.9	42.9	57.1	42.9	42.9	42.9
2015	H27	50.0	57.1	42.9	42.9	42.9	42.9	57.1	28.6	28.6	57.1	21.4	42.9
2016	H28	28.6	42.9	14.3	42.9	85.7	71.4	57.1	28.6	71.4	71.4	71.4	85.7
2017	H29	71.4	85.7	57.1									

注：表中の網かけは50%未満を示している。

[指数グラフ]

(単位:%)



注：グラフ中の網かけは神奈川県景気後退期を示している。

神奈川C I一致指数

[指数表]

(平成22年=100)

西暦	和暦	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
1990	H2	145.7	147.7	147.5	148.3	148.7	146.2	148.7	147.7	146.1	148.8	148.5	148.1	147.7
1991	H3	148.4	148.3	146.5	144.7	144.1	143.3	143.3	142.3	140.4	137.5	137.8	134.2	142.6
1992	H4	131.8	127.9	126.1	126.2	123.9	124.5	122.4	118.4	118.1	118.6	114.0	114.3	122.2
1993	H5	113.1	114.4	112.1	109.6	108.9	107.4	106.6	105.2	105.2	103.6	102.4	101.7	107.5
1994	H6	102.4	101.2	101.9	101.3	102.7	103.5	103.9	105.0	106.3	106.9	108.1	108.1	104.3
1995	H7	106.6	109.0	109.3	108.3	106.7	104.4	104.7	105.9	106.6	108.5	109.4	110.8	107.5
1996	H8	112.2	112.8	113.7	115.7	115.1	115.6	116.1	117.6	117.2	119.1	120.1	120.3	116.3
1997	H9	125.6	123.2	121.8	123.4	124.5	123.9	124.2	123.0	121.9	120.5	117.8	117.0	122.2
1998	H10	115.4	111.7	109.6	107.3	107.6	105.9	105.1	105.0	105.8	102.0	99.8	99.8	106.3
1999	H11	99.2	99.3	100.0	94.1	97.2	96.6	99.1	99.2	101.3	100.2	101.0	101.0	99.0
2000	H12	103.0	104.3	106.5	106.8	106.9	110.5	108.9	107.4	108.8	110.3	111.5	114.2	108.3
2001	H13	112.8	114.2	112.7	112.7	110.0	110.3	106.6	107.3	105.1	102.6	101.8	100.9	108.1
2002	H14	99.8	98.5	100.6	99.8	104.0	100.4	101.3	102.9	104.1	105.4	105.9	105.6	102.4
2003	H15	108.0	107.6	108.6	110.5	111.0	108.6	108.4	110.1	110.2	111.3	112.6	114.5	110.1
2004	H16	116.6	115.2	114.8	116.1	114.7	118.4	117.7	115.8	119.1	117.2	117.5	115.4	116.5
2005	H17	118.6	118.4	118.0	118.0	120.9	120.4	120.3	121.1	120.8	122.0	122.8	122.3	120.3
2006	H18	125.6	124.3	124.4	124.8	125.3	125.2	124.7	125.5	124.2	125.5	126.3	123.7	125.2
2007	H19	122.8	122.8	119.3	121.8	122.8	123.6	121.8	125.7	120.5	124.0	122.9	124.2	122.7
2008	H20	123.1	123.3	122.9	123.8	122.9	120.1	120.7	117.5	118.1	111.9	107.6	95.2	117.3
2009	H21	89.2	83.7	85.1	82.1	83.1	86.1	86.0	87.7	88.7	91.5	92.0	93.3	87.4
2010	H22	97.6	95.9	98.8	99.7	99.2	98.7	100.3	101.2	102.4	100.1	103.7	102.6	100.0
2011	H23	104.4	104.5	92.7	93.6	100.4	102.7	102.3	100.6	102.8	105.7	105.4	106.0	101.8
2012	H24	104.7	106.0	106.5	107.5	108.0	106.5	104.5	105.2	103.0	102.4	101.9	102.9	104.9
2013	H25	103.5	103.7	106.3	107.2	108.5	108.0	109.8	112.0	112.4	112.7	113.3	113.5	109.2
2014	H26	115.6	115.7	118.0	114.1	112.8	114.0	114.0	110.8	114.6	114.9	116.8	115.2	114.7
2015	H27	120.1	117.4	115.2	116.1	116.1	115.6	115.1	115.2	114.5	118.7	117.1	114.5	116.3
2016	H28	113.9	113.2	113.0	112.2	112.8	110.6	112.6	112.1	111.1	111.2	112.2	112.6	112.3
2017	H29	117.2	117.8	116.0										

[前月差表]

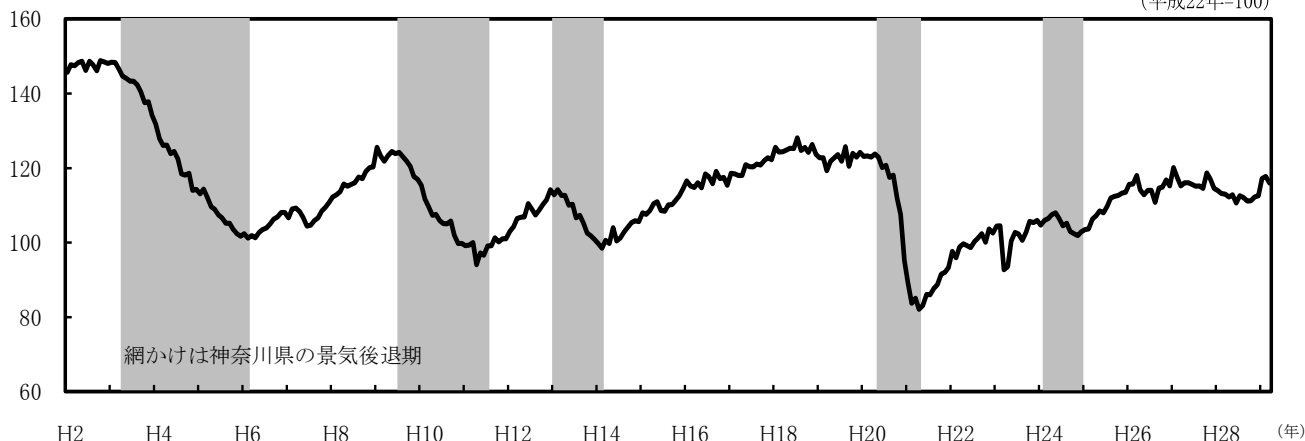
(ポイント)

西暦	和暦	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	累計
1990	H2	-1.8	2.0	-0.2	0.8	0.4	-2.5	2.5	-1.0	-1.6	2.7	-0.3	-0.4	0.6
1991	H3	0.3	-0.1	-1.8	-1.8	-0.6	-0.8	0.0	-1.0	-1.9	-2.9	0.3	-3.6	-13.9
1992	H4	-2.4	-3.9	-1.8	0.1	-2.3	0.6	-2.1	-4.0	-0.3	0.5	-4.6	0.3	-19.9
1993	H5	-1.2	1.3	-2.3	-2.5	-0.7	-1.5	-0.8	-1.4	0.0	-1.6	-1.2	-0.7	-12.6
1994	H6	0.7	-1.2	0.7	-0.6	1.4	0.8	0.4	1.1	1.3	0.6	1.2	0.0	6.4
1995	H7	-1.5	2.4	0.3	-1.0	-1.6	-2.3	0.3	1.2	0.7	1.9	0.9	1.4	2.7
1996	H8	1.4	0.6	0.9	2.0	-0.6	0.5	0.5	1.5	-0.4	1.9	1.0	0.2	9.5
1997	H9	5.3	-2.4	-1.4	1.6	1.1	-0.6	0.3	-1.2	-1.1	-1.4	-2.7	-0.8	-3.3
1998	H10	-1.6	-3.7	-2.1	-2.3	0.3	-1.7	-0.8	-0.1	0.8	-3.8	-2.2	0.0	-17.2
1999	H11	-0.6	0.1	0.7	-5.9	3.1	-0.6	2.5	0.1	2.1	-1.1	0.8	0.0	1.2
2000	H12	2.0	1.3	2.2	0.3	0.1	3.6	-1.6	-1.5	1.4	1.5	1.2	2.7	13.2
2001	H13	-1.4	1.4	-1.5	0.0	-2.7	0.3	-3.7	0.7	-2.2	-2.5	-0.8	-0.9	-13.3
2002	H14	-1.1	-1.3	2.1	-0.8	4.2	-3.6	0.9	1.6	1.2	1.3	0.5	-0.3	4.7
2003	H15	2.4	-0.4	1.0	1.9	0.5	-2.4	-0.2	1.7	0.1	1.1	1.3	1.9	8.9
2004	H16	2.1	-1.4	-0.4	1.3	-1.4	3.7	-0.7	-1.9	3.3	-1.9	0.3	-2.1	0.9
2005	H17	3.2	-0.2	-0.4	0.0	2.9	-0.5	-0.1	0.8	-0.3	1.2	0.8	-0.5	6.9
2006	H18	3.3	-1.3	0.1	0.4	0.5	-0.1	2.9	-3.4	0.8	-1.3	2.1	-2.6	1.4
2007	H19	-0.9	0.0	-3.5	2.5	1.0	0.8	-1.8	3.9	-5.2	3.5	-1.1	1.3	0.5
2008	H20	-1.1	0.2	-0.4	0.9	-0.9	-2.8	0.6	-3.2	0.6	-6.2	-4.3	-12.4	-29.0
2009	H21	-6.0	-5.5	1.4	-3.0	1.0	3.0	-0.1	1.7	1.0	2.8	0.5	1.3	-1.9
2010	H22	4.3	-1.7	2.9	0.9	-0.5	-0.5	1.6	0.9	1.2	-2.3	3.6	-1.1	9.3
2011	H23	1.8	0.1	-11.8	0.9	6.8	2.3	-0.4	-1.7	2.2	2.9	-0.3	0.6	3.4
2012	H24	-1.3	1.3	0.5	1.0	0.5	-1.5	-2.0	0.7	-2.2	-0.6	-0.5	1.0	-3.1
2013	H25	0.6	0.2	2.6	0.9	1.3	-0.5	1.8	2.2	0.4	0.3	0.6	0.2	10.6
2014	H26	2.1	0.1	2.3	-3.9	-1.3	1.2	0.0	-3.2	3.8	0.3	1.9	-1.6	1.7
2015	H27	4.9	-2.7	-2.2	0.9	0.0	-0.5	-0.5	0.1	-0.7	4.2	-1.6	-2.6	-0.7
2016	H28	-0.6	-0.7	-0.2	-0.8	0.6	-2.2	2.0	-0.5	-1.0	0.1	1.0	0.4	-1.9
2017	H29	2.7	0.6	-1.8										

注：マイナスの数値を網かけ表示としている。

[指数グラフ]

(平成22年=100)



H2 H4 H6 H8 H10 H12 H14 H16 H18 H20 H22 H24 H26 H28 (年)

8 長期時系列データ

KDI一致指数

[指数表]

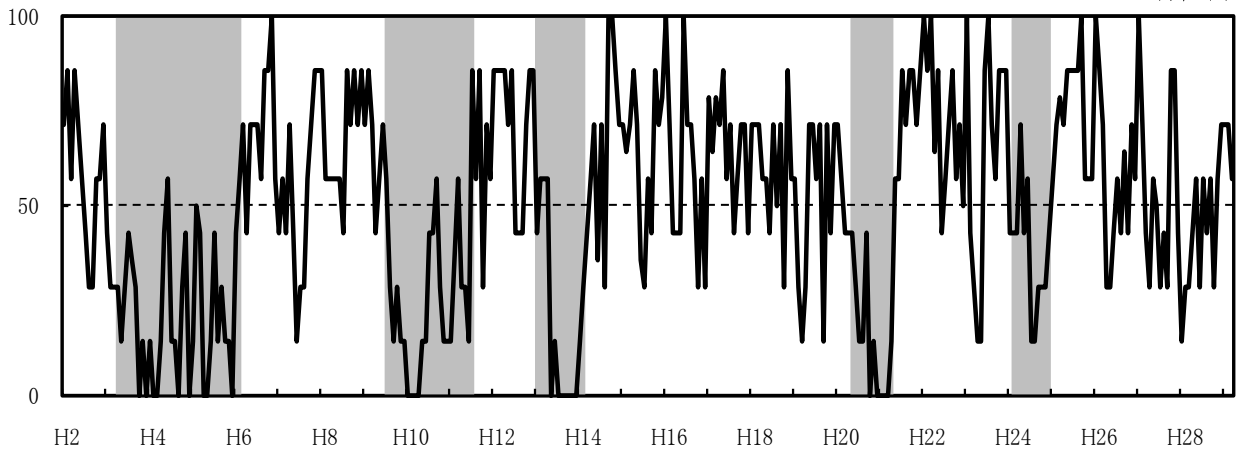
(単位:%)

西暦	和暦	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1980	S55	100.0	100.0	100.0	83.3	83.3	50.0	50.0	16.7	0.0	16.7	16.7	50.0
1981	S56	100.0	83.3	66.7	50.0	33.3	83.3	100.0	100.0	83.3	83.3	66.7	16.7
1982	S57	16.7	16.7	16.7	33.3	16.7	0.0	16.7	33.3	50.0	50.0	50.0	50.0
1983	S58	50.0	50.0	66.7	33.3	66.7	83.3	83.3	83.3	83.3	66.7	50.0	66.7
1984	S59	83.3	100.0	66.7	50.0	50.0	33.3	66.7	66.7	50.0	83.3	83.3	100.0
1985	S60	66.7	66.7	66.7	83.3	83.3	50.0	0.0	0.0	16.7	16.7	33.3	16.7
1986	S61	33.3	16.7	50.0	33.3	16.7	33.3	33.3	16.7	16.7	33.3	66.7	50.0
1987	S62	71.4	57.1	57.1	57.1	85.7	85.7	85.7	100.0	85.7	100.0	57.1	100.0
1988	S63	71.4	71.4	57.1	71.4	71.4	100.0	71.4	71.4	71.4	71.4	85.7	57.1
1989	H1	42.9	42.9	100.0	71.4	100.0	42.9	42.9	57.1	42.9	42.9	28.6	28.6
1990	H2	71.4	85.7	57.1	85.7	71.4	57.1	42.9	28.6	28.6	57.1	57.1	71.4
1991	H3	42.9	28.6	28.6	28.6	14.3	28.6	42.9	35.7	28.6	0.0	14.3	0.0
1992	H4	14.3	0.0	0.0	14.3	42.9	57.1	14.3	14.3	0.0	28.6	42.9	0.0
1993	H5	14.3	50.0	42.9	0.0	0.0	14.3	42.9	14.3	28.6	14.3	14.3	0.0
1994	H6	42.9	57.1	71.4	42.9	71.4	71.4	71.4	57.1	85.7	85.7	100.0	57.1
1995	H7	42.9	57.1	42.9	71.4	42.9	14.3	28.6	28.6	57.1	71.4	85.7	85.7
1996	H8	85.7	57.1	57.1	57.1	57.1	57.1	42.9	85.7	71.4	85.7	71.4	85.7
1997	H9	71.4	85.7	71.4	42.9	57.1	71.4	57.1	28.6	14.3	28.6	14.3	14.3
1998	H10	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	14.3	42.9	42.9	57.1	28.6	14.3	14.3
1999	H11	14.3	35.7	57.1	28.6	28.6	14.3	85.7	57.1	85.7	28.6	71.4	57.1
2000	H12	85.7	85.7	85.7	85.7	71.4	85.7	42.9	42.9	42.9	71.4	85.7	85.7
2001	H13	42.9	57.1	57.1	57.1	0.0	14.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2002	H14	14.3	28.6	42.9	57.1	71.4	35.7	71.4	28.6	100.0	100.0	85.7	71.4
2003	H15	71.4	64.3	71.4	85.7	71.4	35.7	28.6	57.1	42.9	85.7	71.4	78.6
2004	H16	100.0	71.4	42.9	42.9	42.9	100.0	71.4	71.4	57.1	28.6	57.1	28.6
2005	H17	78.6	64.3	78.6	71.4	85.7	57.1	71.4	42.9	57.1	71.4	71.4	42.9
2006	H18	71.4	71.4	71.4	57.1	57.1	42.9	71.4	50.0	71.4	28.6	85.7	57.1
2007	H19	57.1	28.6	14.3	28.6	71.4	71.4	57.1	71.4	14.3	71.4	42.9	71.4
2008	H20	71.4	57.1	42.9	42.9	42.9	28.6	14.3	14.3	42.9	0.0	14.3	0.0
2009	H21	0.0	0.0	0.0	14.3	57.1	57.1	85.7	71.4	85.7	85.7	71.4	85.7
2010	H22	100.0	85.7	100.0	64.3	85.7	42.9	57.1	71.4	85.7	57.1	71.4	50.0
2011	H23	100.0	42.9	28.6	14.3	14.3	85.7	100.0	71.4	57.1	85.7	85.7	85.7
2012	H24	42.9	42.9	42.9	71.4	42.9	57.1	14.3	14.3	28.6	28.6	28.6	42.9
2013	H25	57.1	71.4	78.6	71.4	85.7	85.7	85.7	85.7	100.0	57.1	57.1	57.1
2014	H26	100.0	85.7	71.4	28.6	28.6	42.9	57.1	42.9	64.3	42.9	71.4	57.1
2015	H27	100.0	71.4	42.9	28.6	57.1	50.0	28.6	42.9	28.6	85.7	85.7	42.9
2016	H28	14.3	28.6	28.6	42.9	57.1	28.6	57.1	42.9	57.1	28.6	57.1	71.4
2017	H29	71.4	71.4	57.1									

注：表中の網かけは50%未満を示している。

[指数グラフ]

(単位:%)



注：グラフ中の網かけは神奈川県景気後退期を示している。

神奈川県CI運行指数

[指数表]

(平成22年=100)

西暦	和暦	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
1990	H2	157.7	158.2	158.0	160.3	160.0	158.7	156.5	157.3	156.1	157.6	157.9	158.8	158.1
1991	H3	157.4	156.0	155.9	151.9	152.6	153.2	152.8	150.6	147.1	146.4	144.7	140.5	150.8
1992	H4	140.8	140.0	137.0	135.3	134.7	134.4	131.9	129.9	127.6	125.7	125.7	124.3	132.3
1993	H5	123.0	121.9	119.1	117.4	116.4	115.3	115.2	113.7	112.8	111.4	110.2	108.5	115.4
1994	H6	107.6	107.5	106.2	104.3	104.9	105.3	105.8	106.9	106.3	107.0	108.5	109.2	106.6
1995	H7	110.0	109.7	109.4	108.8	108.0	107.2	106.4	106.2	105.4	104.4	103.6	103.9	106.9
1996	H8	104.1	104.9	104.8	104.3	105.6	106.7	107.7	107.7	107.2	109.7	110.3	110.8	107.0
1997	H9	112.1	111.5	111.5	113.8	114.6	115.4	116.3	116.5	116.4	117.1	117.5	116.7	115.0
1998	H10	115.5	115.3	115.7	114.8	113.6	112.9	111.3	110.4	109.8	109.1	108.5	107.5	112.0
1999	H11	108.0	106.9	105.6	104.5	105.0	104.5	104.7	104.3	105.0	105.3	105.9	107.3	105.6
2000	H12	106.7	107.3	108.0	108.4	108.2	108.4	109.3	110.4	109.1	109.6	109.8	109.8	108.8
2001	H13	110.1	110.1	110.1	110.5	111.6	109.5	109.3	109.4	107.8	106.4	104.9	102.6	108.5
2002	H14	102.3	102.7	102.5	101.0	100.0	101.6	100.9	99.8	101.1	100.7	100.8	101.2	101.2
2003	H15	101.3	101.9	101.8	103.7	105.3	105.2	105.9	107.2	106.9	107.5	107.4	107.9	105.2
2004	H16	107.9	107.9	109.2	108.9	108.3	108.8	109.7	108.9	109.4	109.3	110.6	110.0	109.1
2005	H17	109.5	109.3	111.0	112.0	114.5	114.4	114.2	114.8	114.5	116.2	116.5	118.1	113.8
2006	H18	119.7	121.5	120.5	120.6	118.4	120.5	120.9	122.5	124.6	124.2	125.3	125.3	122.0
2007	H19	126.8	126.6	127.8	128.6	129.1	128.1	129.2	128.6	128.1	128.2	127.6	127.8	128.0
2008	H20	127.1	127.1	128.2	127.6	128.5	129.8	130.2	129.3	128.2	126.8	124.7	121.7	127.4
2009	H21	116.2	114.3	112.1	108.7	105.5	101.4	99.0	99.7	97.6	96.8	97.2	97.1	103.8
2010	H22	99.0	99.1	99.6	98.5	98.6	100.4	100.3	99.8	100.4	101.3	101.4	101.5	100.0
2011	H23	101.2	102.1	101.3	104.1	105.2	103.7	103.8	105.5	106.7	106.1	105.3	105.1	104.2
2012	H24	105.5	106.5	106.3	106.1	105.8	105.5	104.6	104.0	104.5	105.0	104.2	104.0	105.2
2013	H25	104.0	104.4	105.0	104.7	105.7	107.0	107.9	108.4	107.5	107.2	109.5	109.6	106.7
2014	H26	111.4	111.6	113.6	115.0	116.1	116.2	116.4	117.1	116.1	117.4	117.1	117.9	115.5
2015	H27	118.2	118.6	119.9	118.8	118.6	117.5	118.1	117.9	118.0	118.7	117.9	119.5	118.5
2016	H28	117.8	118.5	117.3	117.7	116.9	117.6	118.2	118.2	117.6	117.2	118.7	118.2	117.8
2017	H29	117.4	117.3	116.8	118.9	120.0								

[前月差表]

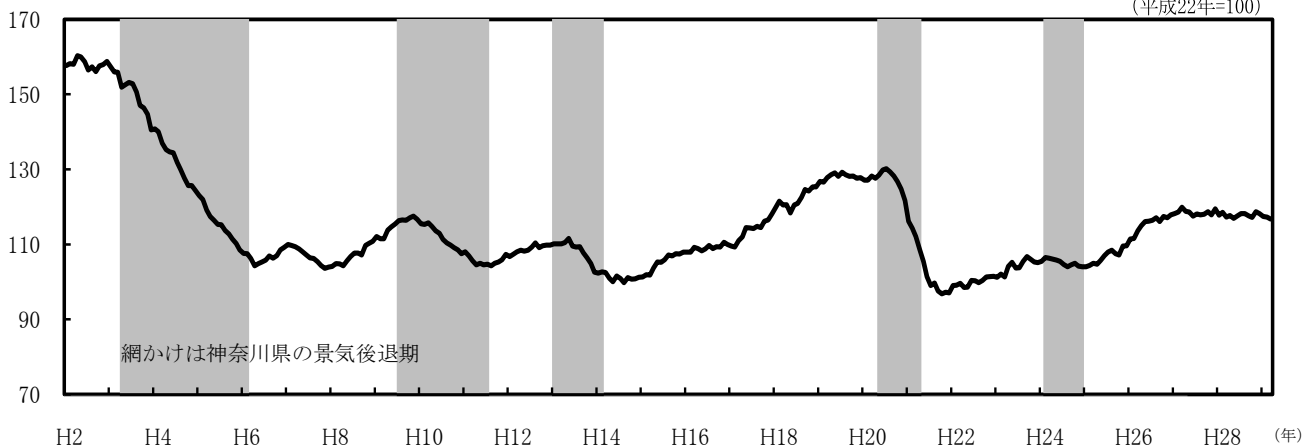
(ポイント)

西暦	和暦	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	累計
1990	H2	3.0	0.5	-0.2	2.3	-0.3	-1.3	-2.2	0.8	-1.2	1.5	0.3	0.9	4.1
1991	H3	-1.4	-1.4	-0.1	-4.0	0.7	0.6	-0.4	-2.2	-3.5	-0.7	-1.7	-4.2	-18.3
1992	H4	0.3	-0.8	-3.0	-1.7	-0.6	-0.3	-2.5	-2.0	-2.3	-1.9	0.0	-1.4	-16.2
1993	H5	-1.3	-1.1	-2.8	-1.7	-1.0	-1.1	-0.1	-1.5	-0.9	-1.4	-1.2	-1.7	-15.8
1994	H6	-0.9	-0.1	-1.3	-1.9	0.6	0.4	0.5	1.1	-0.6	0.7	1.5	0.7	0.7
1995	H7	0.8	-0.3	-0.3	-0.6	-0.8	-0.8	-0.8	-0.2	-0.8	-1.0	-0.8	0.3	-5.3
1996	H8	0.2	0.8	-0.1	-0.5	1.3	1.1	1.0	0.0	-0.5	2.5	0.6	0.5	6.9
1997	H9	1.3	-0.6	0.0	2.3	0.8	0.8	0.9	0.2	-0.1	0.7	0.4	-0.8	5.9
1998	H10	-1.2	-0.2	0.4	-0.9	-1.2	-0.7	-1.6	-0.9	-0.6	-0.7	-0.6	-1.0	-9.2
1999	H11	0.5	-1.1	-1.3	-1.1	0.5	-0.5	0.2	-0.4	0.7	0.3	0.6	1.4	-0.2
2000	H12	-0.6	0.6	0.7	0.4	-0.2	0.2	0.9	1.1	-1.3	0.5	0.2	0.0	2.5
2001	H13	0.3	0.0	0.0	0.4	1.1	-2.1	-0.2	0.1	-1.6	-1.4	-1.5	-2.3	-7.2
2002	H14	-0.3	0.4	-0.2	-1.5	-1.0	1.6	-0.7	-1.1	1.3	-0.4	0.1	0.4	-1.4
2003	H15	0.1	0.6	-0.1	1.9	1.6	-0.1	0.7	1.3	-0.3	0.6	-0.1	0.5	6.7
2004	H16	0.0	0.0	1.3	-0.3	-0.6	0.5	0.9	-0.8	0.5	-0.1	1.3	-0.6	2.1
2005	H17	-0.5	-0.2	1.7	1.0	2.5	-0.1	-0.2	0.6	-0.3	1.7	0.3	1.6	8.1
2006	H18	1.6	1.8	-1.0	0.1	-2.2	2.1	0.4	1.6	2.1	-0.4	1.1	0.0	7.2
2007	H19	1.5	-0.2	1.2	0.8	0.5	-1.0	1.1	-0.6	-0.5	0.1	-0.6	0.2	2.5
2008	H20	-0.7	0.0	1.1	-0.6	0.9	1.3	0.4	-0.9	-1.1	-1.4	-2.1	-3.0	-6.1
2009	H21	-5.5	-1.9	-2.2	-3.4	-3.2	-4.1	-2.4	0.7	-2.1	-0.8	0.4	-0.1	-24.6
2010	H22	1.9	0.1	0.5	-1.1	0.1	1.8	-0.1	-0.5	0.6	0.9	0.1	0.1	4.4
2011	H23	-0.3	0.9	-0.8	2.8	1.1	-1.5	0.1	1.7	1.2	-0.6	-0.8	-0.2	3.6
2012	H24	0.4	1.0	-0.2	-0.2	-0.3	-0.3	-0.9	-0.6	0.5	0.5	-0.8	-0.2	-1.1
2013	H25	0.0	0.4	0.6	-0.3	1.0	1.3	0.9	0.5	-0.9	-0.3	2.3	0.1	5.6
2014	H26	1.8	0.2	2.0	1.4	1.1	0.1	0.2	0.7	-1.0	1.3	-0.3	0.8	8.3
2015	H27	0.3	0.4	1.3	-1.1	-0.2	-1.1	0.6	-0.2	0.1	0.7	-0.8	1.6	1.6
2016	H28	-1.7	0.7	-1.2	0.4	-0.8	0.7	0.6	0.0	-0.6	-0.4	1.5	-0.5	-1.3
2017	H29	-2.1	-0.1	-0.5										

注：マイナスの数値を網かけ表示としている。

[指数グラフ]

(平成22年=100)



KDI 遅行指数

[指数表]

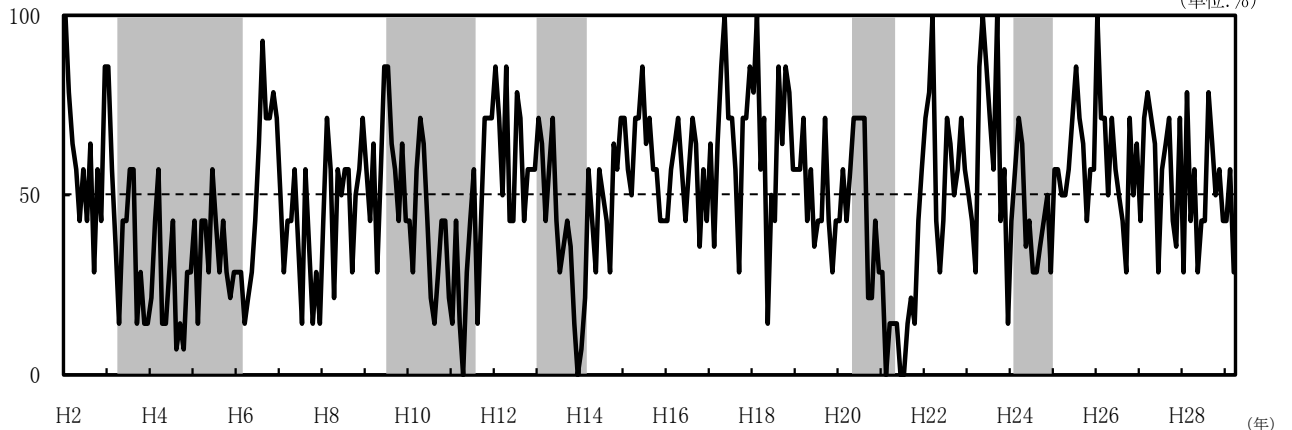
(単位:%)

西暦	和暦	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1980	S55	80.0	60.0	80.0	80.0	80.0	100.0	80.0	80.0	40.0	50.0	70.0	60.0
1981	S56	40.0	20.0	40.0	60.0	40.0	80.0	80.0	50.0	40.0	20.0	40.0	20.0
1982	S57	0.0	30.0	20.0	60.0	40.0	40.0	60.0	60.0	60.0	20.0	40.0	40.0
1983	S58	40.0	20.0	20.0	0.0	0.0	20.0	40.0	60.0	50.0	40.0	60.0	80.0
1984	S59	100.0	80.0	60.0	33.3	50.0	66.7	66.7	83.3	66.7	66.7	83.3	83.3
1985	S60	66.7	66.7	83.3	100.0	91.7	91.7	58.3	66.7	16.7	0.0	16.7	16.7
1986	S61	71.4	57.1	42.9	7.1	28.6	42.9	50.0	14.3	14.3	21.4	42.9	21.4
1987	S62	28.6	50.0	42.9	42.9	35.7	57.1	85.7	50.0	57.1	71.4	50.0	42.9
1988	S63	64.3	85.7	85.7	71.4	50.0	78.6	100.0	100.0	100.0	85.7	71.4	71.4
1989	H1	71.4	42.9	71.4	85.7	85.7	100.0	85.7	64.3	50.0	42.9	71.4	85.7
1990	H2	100.0	78.6	64.3	57.1	42.9	57.1	42.9	64.3	28.6	57.1	42.9	85.7
1991	H3	85.7	57.1	35.7	14.3	42.9	42.9	57.1	57.1	14.3	28.6	14.3	14.3
1992	H4	21.4	42.9	57.1	14.3	14.3	28.6	42.9	7.1	14.3	7.1	28.6	28.6
1993	H5	42.9	14.3	42.9	42.9	28.6	57.1	42.9	28.6	42.9	28.6	21.4	28.6
1994	H6	28.6	28.6	14.3	21.4	28.6	42.9	64.3	92.9	71.4	71.4	78.6	71.4
1995	H7	50.0	28.6	42.9	42.9	57.1	35.7	14.3	57.1	35.7	14.3	28.6	14.3
1996	H8	42.9	71.4	57.1	21.4	57.1	50.0	57.1	57.1	28.6	50.0	57.1	71.4
1997	H9	57.1	42.9	64.3	28.6	57.1	85.7	85.7	64.3	57.1	42.9	64.3	42.9
1998	H10	42.9	28.6	57.1	71.4	64.3	42.9	21.4	14.3	28.6	42.9	42.9	21.4
1999	H11	14.3	42.9	14.3	0.0	28.6	42.9	57.1	14.3	42.9	71.4	71.4	71.4
2000	H12	85.7	71.4	50.0	85.7	42.9	42.9	78.6	71.4	42.9	57.1	57.1	57.1
2001	H13	71.4	64.3	42.9	57.1	71.4	42.9	28.6	35.7	42.9	35.7	14.3	0.0
2002	H14	7.1	21.4	57.1	42.9	28.6	57.1	50.0	42.9	28.6	64.3	57.1	71.4
2003	H15	71.4	57.1	50.0	71.4	71.4	85.7	64.3	71.4	57.1	57.1	42.9	42.9
2004	H16	42.9	57.1	64.3	71.4	57.1	42.9	57.1	71.4	64.3	35.7	57.1	42.9
2005	H17	64.3	35.7	64.3	85.7	100.0	71.4	71.4	57.1	28.6	71.4	71.4	85.7
2006	H18	78.6	100.0	57.1	71.4	14.3	50.0	42.9	85.7	64.3	85.7	78.6	57.1
2007	H19	57.1	57.1	71.4	42.9	57.1	35.7	42.9	42.9	71.4	42.9	28.6	42.9
2008	H20	42.9	57.1	42.9	57.1	71.4	71.4	71.4	71.4	21.4	21.4	42.9	28.6
2009	H21	28.6	0.0	14.3	14.3	14.3	0.0	0.0	14.3	21.4	14.3	42.9	57.1
2010	H22	71.4	78.6	100.0	42.9	28.6	42.9	71.4	64.3	50.0	57.1	71.4	57.1
2011	H23	50.0	42.9	28.6	85.7	100.0	85.7	71.4	57.1	100.0	42.9	57.1	14.3
2012	H24	42.9	57.1	71.4	64.3	35.7	42.9	28.6	28.6	35.7	42.9	50.0	28.6
2013	H25	57.1	57.1	50.0	50.0	57.1	71.4	85.7	71.4	64.3	42.9	57.1	57.1
2014	H26	100.0	71.4	71.4	50.0	71.4	57.1	50.0	42.9	28.6	71.4	50.0	64.3
2015	H27	42.9	71.4	78.6	71.4	64.3	28.6	57.1	64.3	71.4	42.9	35.7	71.4
2016	H28	28.6	78.6	42.9	57.1	28.6	42.9	42.9	78.6	64.3	50.0	57.1	42.9
2017	H29	42.9	57.1	28.6									

注：表中の網かけは50%未満を示している。

[指数グラフ]

(単位:%)



注：グラフ中の網かけは神奈川県景気後退期を示している。

採用系列一覧

	系列名	季節調整方法等	作成機関	資料出所
先行系列	L1 県最終需要財在庫率指数(逆)	X-12-ARIMA	県統計センター	工業生産指数月報
	L2 県生産財在庫率指数(逆)	X-12-ARIMA	県統計センター	工業生産指数月報
	L3 県新規求人数(除く学卒)	X-12-ARIMA	神奈川県労働局職業安定部	労働市場速報
	L4 県乗用車新車新規登録・届出台数 ^{注2}	X-12-ARIMA ^{注1}	神奈川県自動車販売店協会 (一社)全国軽自動車協会連合会	車種別新車登録台数 軽四輪車県別新車販売台数
	L5 消費者態度指数(関東)	実数	内閣府経済社会総合研究所	消費動向調査
	L6 県企業倒産件数(逆)	実数	㈱東京商工リサーチ	神奈川県・企業倒産状況
	L7 日経商品指数(42種)	実数	㈱日本経済新聞社	日本経済新聞
一致系列	C1 県生産指数(製造工業)	X-12-ARIMA	県統計センター	工業生産指数月報
	C2 県生産財出荷指数	X-12-ARIMA	県統計センター	工業生産指数月報
	C3 県投資財出荷指数	X-12-ARIMA	県統計センター	工業生産指数月報
	C4 県有効求人数(除く学卒)	X-12-ARIMA	神奈川県労働局職業安定部	労働市場速報
	C5 県雇用保険初回受給者数(逆)	X-12-ARIMA ^{注1}	神奈川県労働局職業安定部	労働市場速報
	C6 県所定外労働時間指数(調査産業計)	X-12-ARIMA ^{注1}	県統計センター	神奈川県毎月勤労統計調査 地方調査結果報告
	C7 横浜港等輸出入通関実績 ^{注3}	X-12-ARIMA ^{注1}	横浜税関	横浜税関管内貿易速報
遅行系列	Lg1 県在庫指数(製造工業)	X-12-ARIMA	県統計センター	工業生産指数月報
	Lg2 県普通営業倉庫保管残高	X-12-ARIMA ^{注1}	神奈川県倉庫協会	作成機関資料
	Lg3 県常用雇用指数(調査産業計)	前年同月比	県統計センター	神奈川県毎月勤労統計調査 地方調査結果報告
	Lg4 県有効求職者数(除く学卒)(逆)	X-12-ARIMA	神奈川県労働局職業安定部	労働市場速報
	Lg5 家計消費支出(関東大都市圏) ^{注4}	前年同月比	総務省統計局	家計調査結果 (二人以上の世帯)
	Lg6 消費者物価指数(横浜市・除く生鮮食品)	前年同月比	総務省統計局	消費者物価指数
	Lg7 県内銀行貸出約定平均金利	前年同月比	日本銀行横浜支店	貸出約定平均金利

注1：神奈川県景気動向指数を作成する際に、独自に季節調整を行っている。

注2：普通車、小型車及び軽四輪車（軽自動車）の合計

注3：横浜港、川崎港及び横須賀港の貿易額（輸出入額）合計、円ベース

注4：勤労者世帯

(逆)：逆サイクル

・逆サイクルについては⇒p. 8 [参考]参照

採用系列の選定方法について

神奈川県景気動向指数は、複数の指標の動きを統合して作成しますが、その作成方法は、内閣府の景気動向指数に準拠しており、採用系列については神奈川県で独自に選定しています。

神奈川県景気動向指数は神奈川C IとK D Iの2種類がありますが、採用系列は共通の系列としています。

神奈川県景気動向指数の採用系列は、生産、雇用、消費など様々な経済分野から、県域値のある月次経済統計を中心として神奈川県の景気循環への対応性がよい指標を選定し採用しています。

なお、採用系列を選定する際には神奈川県景気動向指数検討委員会の意見を参考にしています。

- ・ 神奈川県景気動向指数検討委員会は⇒p. 47参照
- ・ 全国の景気動向指数の採用系列との関係は⇒p. 12, p. 24参照

採用系列の改定（入替え）

採用系列は、前述のとおり、神奈川県の景気循環への対応性を勘案し選定していますが、長期間経過すると、経済構造の変化により、その対応性が悪くなることがあります。

そのため、景気が一循環（谷→山→谷）し、神奈川県景気基準日付を確定する時点で、その採用系列が現在の景気の動きを十分に反映しているかどうか点検を行っています。そして、神奈川県景気動向指数検討委員会の検討のうえで、必要であれば採用系列の入替えを行います。

これまで、過去5回、採用系列の入替え・変更を行っており、最近では平成28年9月に県新設住宅着工床面積及び県大口電力使用量を除外する等し、先行系列が7系列、一致系列が7系列、遅行系列が7系列の合計21系列となっています。

- ・ 採用系列の見直しの状況は⇒p. 48参照

参考：X-12-ARIMAについて

X-12-ARIMAはアメリカ商務省センサス局で開発され1996年に公表された季節調整法のプログラムです。これは、それまで主流であったX-11を改良したものと位置づけられており、移動平均型季節調整法として世界中で利用されています。プログラムはセンサス局のホームページから誰でも入手し使用することができます。

このプログラムは、収集した統計データの実数値の複数年分（例えば10年12か月分）をもとに、季節変動を推計し、各年月の季節調整係数（12か月分+将来の予測係数）が算出されるというものです。そのうえで次の算式で季節調整値を計算します。

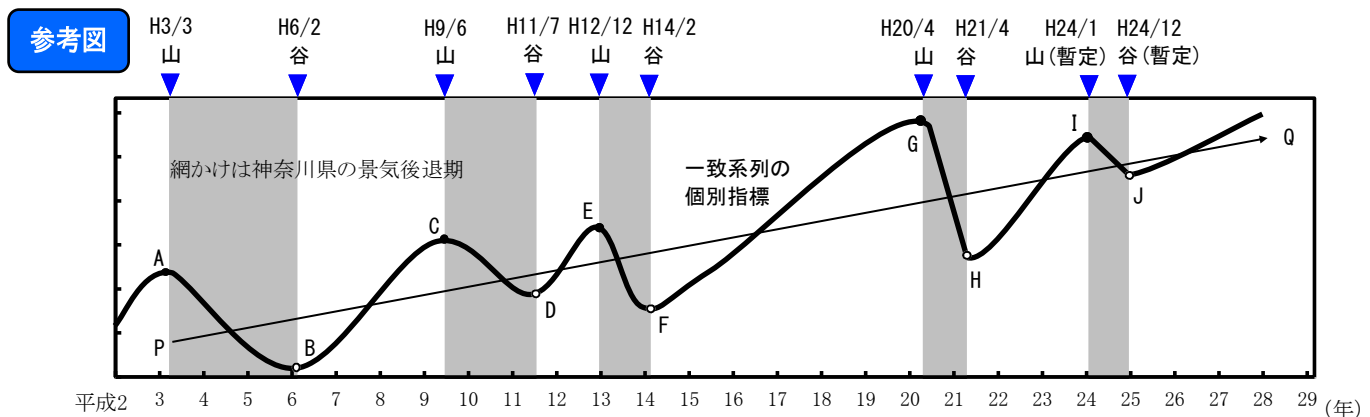
$$\text{季節調整値} = \text{実数値} \div \text{季節調整係数}$$

季節調整値の精度を上げるためには、最新のデータを含めてプログラムを利用する必要があり、神奈川県景気動向指数では年に1回、季節調整係数を再計算しています。このことを季節調整替えと呼んでいます。

この結果、季節調整値を過去にさかのぼって改訂し、あわせて、先行、一致及び遅行の各指数を遡及して改訂しています。



- ここでは27ページ以降の個別系列の推移をみるためのポイントをまとめています。



個別系列の変動要素

個別系列をみる際の参考として、その変動の代表的なものに次のような分類があります。

- ・ 季節変動 → p. 8 [季節調整とは]参照
- ・ 景気変動
- ・ 趨勢的変動 (長期的な傾向、トレンド)
- ・ 不規則変動

このうち趨勢 (すうせい) 的変動とは、その系列の長期的な傾向のことで、トレンドともいいます。景気変動を主因として上下動しながらも長期的には上昇に向かう、下降するあるいは横ばいであるといった動きをいいます。

この動きの背景には社会構造の変化や制度的な変化などがあり、より長期的には人口構造や資源配分の変化などが影響します。

不規則変動としては、例えばたばこの値上げに対する駆け込み需要とその後の反動減や、短期イベントの前後に生じる消費の変動が挙げられます。

しかし、消費税率の変更に伴う駆け込み需要とその後の買い控え、あるいは国際博覧会やオリンピックなどの大規模行事による投資や消費の増大とその後の減少などは、景況を左右する変動ともいえ、不規則変動と景気変動の違いは一概にいえません。

長期的な推移をみる

個別系列の長期的な推移 (長期時系列) をグラフで見ると、系列の動きと景気変動の関係がよくわかります。また、その指標の長期の傾向 (トレンド) がみてとれます。

上記の参考図では、平成2年1月から平成29年3月まで約27年間の指標の動きと、過去10回の景気の山谷を表しました。ただし系列の動きは説明のため

の架空のものです。また、景気後退期は網かけで表示しています。景気後退期は景気の山の翌月から景気の谷の月までです。

参考図でいうと、個別系列は、点A→B→C→D→E→F→G→H→I→Jと進み、景気変動による増減を繰り返す動きを示しています。

景気変動を視認する

参考図で示した曲線は一致系列の個別系列の動きを例示しています。点A, C, E, G, Iは景気の山に対応し、点B, D, F, H, Jは景気の谷に対応しています。

概念的には、一致系列の場合、点A, C, E, G, Iは景気の山と同じ時点に表れ、点B, D, F, H, Jが景気の谷と同じ時点に表れます。先行系列に採用した系列は、景気の山よりもやや早くに点A, C, E, G, Iが表れ、景気の谷よりも早く点B, D, F, H, Jが表れると考えられます。同様に遅行系列に採用した系列は、景気の山よりも遅れて点A, C, E, G, Iが表れ、景気の谷よりも遅れて点B, D, F, H, Jが表れると考えられます。

長期の傾向 (トレンド) を視認する

長期時系列のグラフをみると、景気変動のほかに、その系列の長期的な傾向 (トレンド) がわかります。

参考図でいうと、AよりもCが高く、CよりもEが、EよりもGが、高くなっています。また、BよりもDが高く、FよりもHが、HよりもJが高くなっています。このことは、この系列が景気変動による増減を繰り返しながら長期的には上昇傾向にあることを示しています。

個別系列の動きに対して、曲線AB, IJの中位を通る線分PQを描くと、その傾向がわかりやすくなります。

経済分野別個別系列の分類

- 経済分野ごとに個別系列をまとめました。各系列は相互に影響を受けるため、この分類は厳密なものではありませんが、系列の示す動きを理解するには有用です。

〔神奈川県景気動向指数〕 (全21系列)

経済分野	先行系列 (7)	一致系列 (7)	遅行系列 (7)
生産(産業) ・ 在庫	県最終需要財在庫率指数(逆) 県生産財在庫率指数(逆)	県生産指数(製造工業) 県生産財出荷指数 横浜港等輸出入通関実績	県在庫指数(製造工業) 県普通営業倉庫保管残高
企業経営	県企業倒産件数(逆)		
労働	県新規求人数(除く学卒)	県有効求人数(除く学卒) 県雇用保険初回受給者数(逆) 県所定外労働時間指数(調査産業計)	県常用雇用指数(調査産業計)(前) 県有効求職者数(除く学卒)(逆)
消費	県乗用車新車新規登録・届出台数 消費者態度指数(関東)		家計消費支出(勤労者世帯 ・関東大都市圏)(前)
投資		県投資財出荷指数	
物価	日経商品指数(42種)		消費者物価指数(横浜市 ・生鮮食品除く)(前)
金利			県内銀行貸出約定平均金利(前)

注：平成29年7月31日現在

〔全国の景気動向指数〕 (全29系列)

経済分野	先行系列 (11)	一致系列 (9)	遅行系列 (9)
生産 ・ 在庫	最終需要財在庫率指数(逆) 鉱工業用生産財在庫率指数(逆)	生産指数(鉱工業) 鉱工業用生産財出荷指数	第3次産業活動指数 (対事業所サービス業) 最終需要材在庫指数
企業経営	中小企業売上げ見通しDI	営業利益(全産業)	法人税収入
労働・所得	新規求人数(除学卒)	所定外労働時間指数(調査産業計) 有効求人倍率(除学卒)	常用雇用指数(調査産業計)(前) 完全失業率(逆)
賃金			きまって支給する給与 (製造業、名目)
消費	消費者態度指数	商業販売額(小売業)(前) 商業販売額(卸売業)(前) 耐久消費財出荷指数	家計消費支出 (勤労者世帯、名目)(前)
投資	投資環境指数(製造業) 実質機械受注(製造業) 新設住宅着工床面積	投資財出荷指数(除輸送機械)	実質法人企業設備投資(全産業)
物価	日経商品指数(42種総合)	この分類は内閣府が公表している全国の景気動向指数採用系列一覧をもとに神奈川県統計センターが独自に作成したものです。	消費者物価指数 (生鮮食品を除く総合)(前)
金利	マネーストック(M2)(前)		
その他	東証株価指数		

(逆)：逆サイクル (前)：前年同月比

・逆サイクルについては⇒p. 8 [参考]参照

注：平成29年7月31日現在

具体的なグラフの見方(27ページの県生産指数を例として)

27ページ以降では、神奈川県景気動向指数に採用している21の個別系列の推移を紹介しています。その際、すべての系列に下記の図1と図2のグラフを掲載しています。ここでは個別系列のうち県生産指数のグラフを例として、グラフの見方を説明します。なお、図1及び図2に利用している数値は実際のもので、

図1は県生産指数の長期的な推移グラフで、平成2年1月から29年3月までの動きがわかります。「県」は神奈川県の値を、「全国」は内閣府

の景気動向指数に利用されている値です。県の値は、各月の値(細線)と12か月移動平均(太線)のグラフを重ねて表示しています。全国の値は12か月移動平均のみを表示しています。

図2は同じ県生産指数の26年度から28年度までの各月の値をグラフにしたもので、最近の短期的な推移がわかります。

留意事項

- 全国の景気動向指数の系列に採用されていない指標は、全国のグラフを掲載していません。

図1

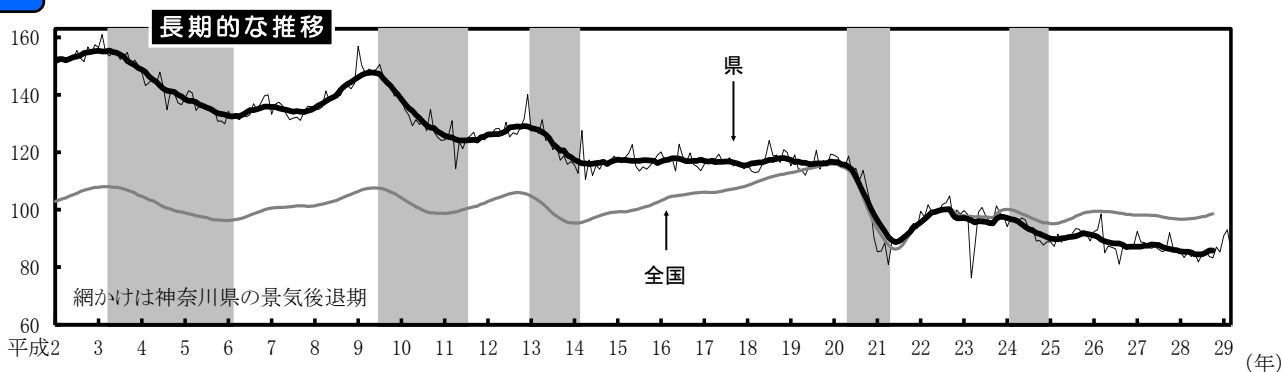
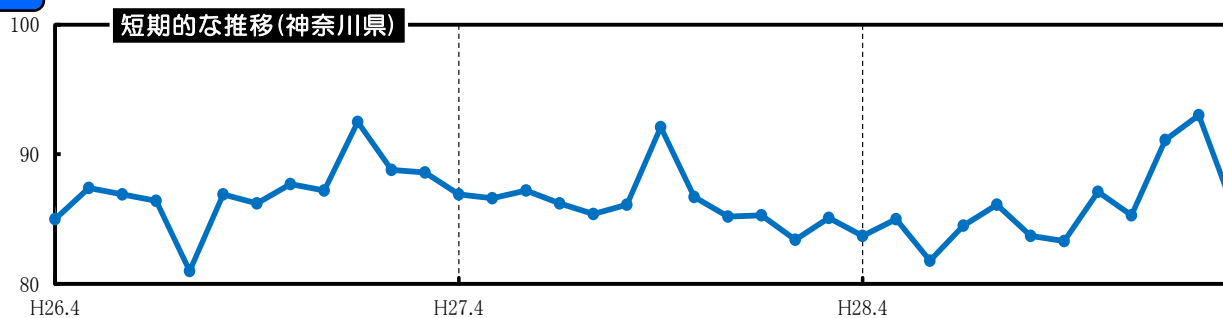


図2



- ・長期的な推移のグラフは、県は指数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示、全国は12か月移動平均のみ表示
- ・全国値は鉱工業で、内閣府が公表する景気動向指数の個別系列の数値(平成29年5月分速報値)をもとに作成

12か月移動平均

12か月移動平均は、平均値を算出する月の前6か月、当該月、及び先5か月の12か月分を単純に平均した値です。

移動平均値をグラフにすると、各月ごとの変動が緩和されたなめらかなグラフとなり、系列の大きな動きをつかむのに適しています。

また12か月移動平均はブライ・ボッシュン法による個別系列の山や谷の設定方法の手順の一つに利用されており、12か月移動平均のグラフでみえ

る山や谷の付近は、実際の景気転換点に含まれているものがあります。

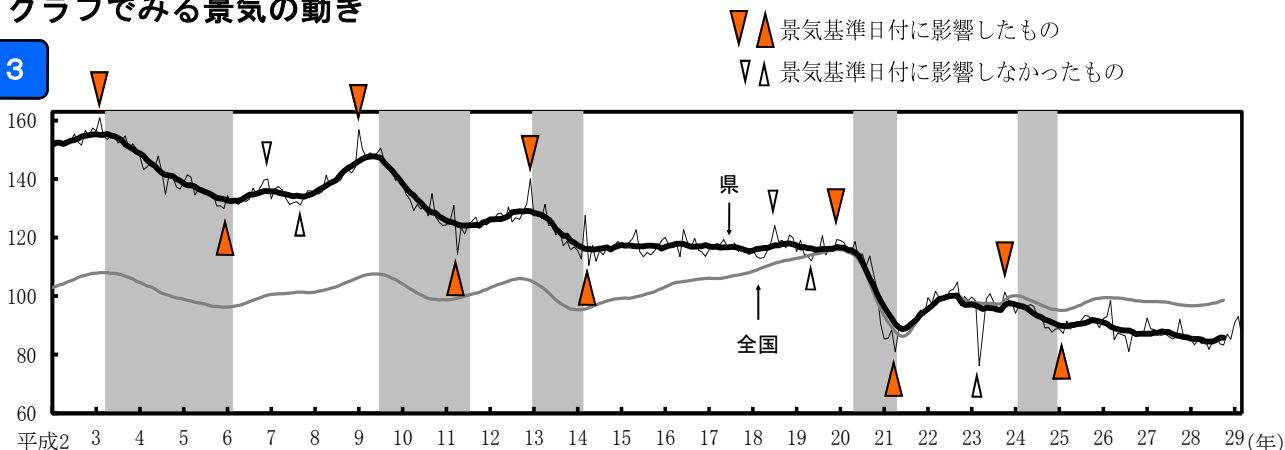
- ・ブライ・ボッシュン法は⇒p. 45参照

12か月移動平均

$$= \left(\begin{array}{l} \text{当月より前の6か月分合計} \\ + \text{当月の値} \\ + \text{当月より先の5か月分合計} \end{array} \right) \div 12$$

グラフでみる景気の動き

図3



指数の動きと景気の動きをみる

図3は、図1の県の動きに、個別系列が示す山谷を▲印と△印で追加したものです。

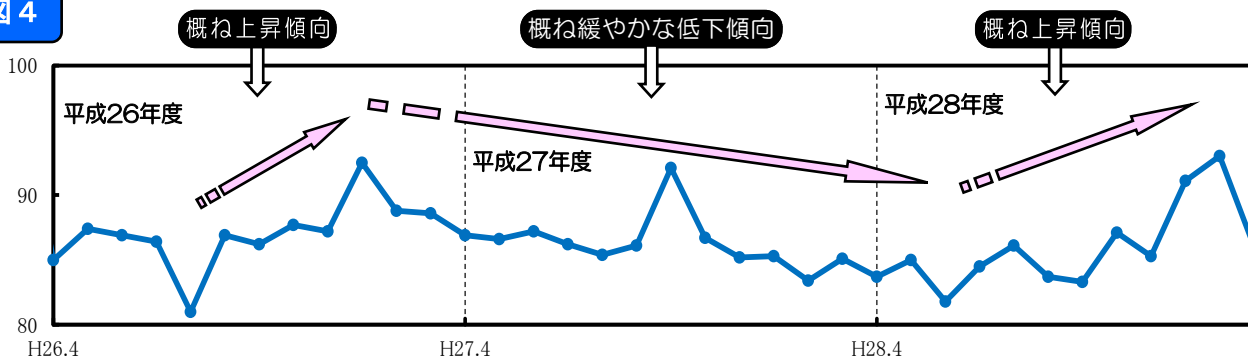
個別系列が示す山と谷はブライ・ボッシュン法によって設定していますが、その結果は12か月移動平均線の山谷と大差がありません。そのため、個別系列が示す山谷は、グラフのみ見た目からでも大まかな判別ができます。ただし、個別系列の山谷がすべて景気転換点になるわけではないため、その山谷は景気基準日付に影響したものと影響しなかったものが生じます。このグラフから県の生産指数は、景気変動による増減を繰り返しながら、長期的には低下傾向にあるといえます。

グラフから特徴をみる

平成14年2月の景気の谷以降の県生産指数の動きには、全国の動きのような右上がりの伸びがみられません。

20年9月のリーマン・ショックの影響で、翌月の10月から急激に低下した後、21年4月を底に上昇していました。22年後半から弱い動きとなり、24年中程になると低下傾向となった後、25年は上昇傾向が続きました。消費税率の引き上げに伴う駆け込み需要の反動もあり、26年度以降は概ね低下傾向が続いています。

図4



最近の動向をみる

最近の動向をさらに詳しくみるためには、図4に示した短期的な推移のグラフ(図2と同じものです)が適しています。

県生産指数は、26年度は消費税率引上げに伴う駆け込み需要の反動から4月に大きく低下した後も低下傾向にありましたが、9月には上昇に転じ、27年1月まで緩やかな上昇傾向が続きました。しかし、2月以降は低下傾向となりました。

27年度は、10月は大きく上昇しましたが、概ね緩

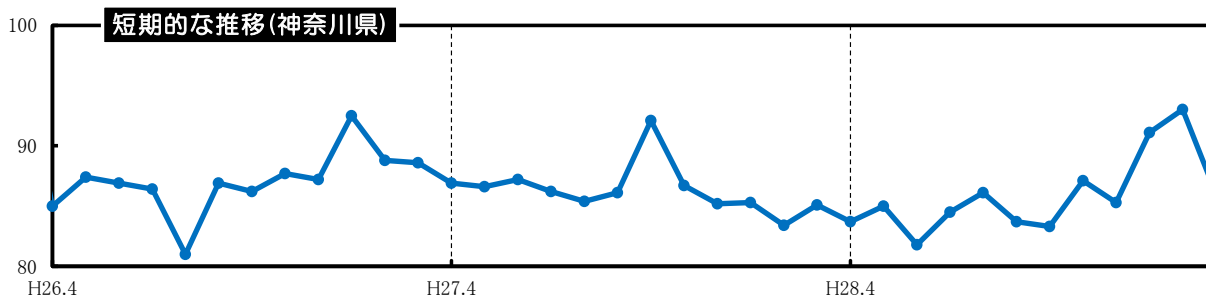
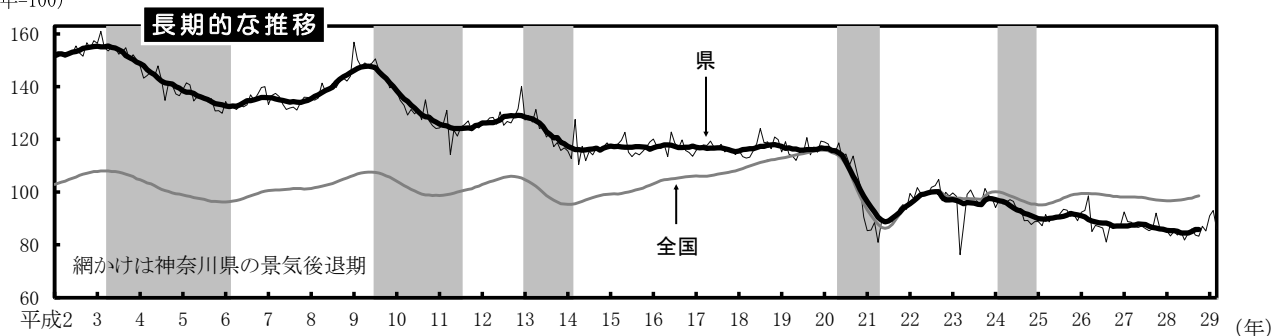
やかな低下傾向であったといえます。

28年度は、7月に上昇に転じて以降、低下と上昇を繰り返していますが、上昇傾向であったといえます。

他の個別系列についても、これまでの景気変動から現在の様子までを追って見ていくことにより、今後注目すべき点などがみえてきます。

C1 県生産指数(製造工業) 季節調整値 平成22年基準 (H22年=100)

(H22年=100)



- ・長期的な推移のグラフは、県は指数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示、全国は12か月移動平均のみ表示
- ・全国値は鉱工業で、内閣府が公表する景気動向指数の個別系列の数値(平成29年5月分速報値)をもとに作成

県生産指数(製造工業)

- 県統計センターが公表する工業生産指数月報のうち、製造工業全体の生産指数(季節調整値)を神奈川県景気動向指数で利用しています。
- 生産指数は、県内製造業の工場など事業所を対象とした調査により、品目ごとの生産量を指数化したものです。生産量が増える(減る)と指数は増加(減少)します。
- 指数のもととなるウェイトは、原則として平成22年工業統計の付加価値額が用いられており、調査品目数は279です。
- ウェイトの高い業種は、輸送機械、化学、はん用・生産用・業務用機械、食料品・飲料、石油・石炭製品、情報通信機械工業の順となっており、この6業種で全体の約76%を占めています。
- 製造業は県内総生産の約16.3%^注を占めており、他産業への波及効果も大きいことから、その動きは景気指標として中心的なものとなっています。

注：「平成26年度神奈川県県民経済計算」による。

推移

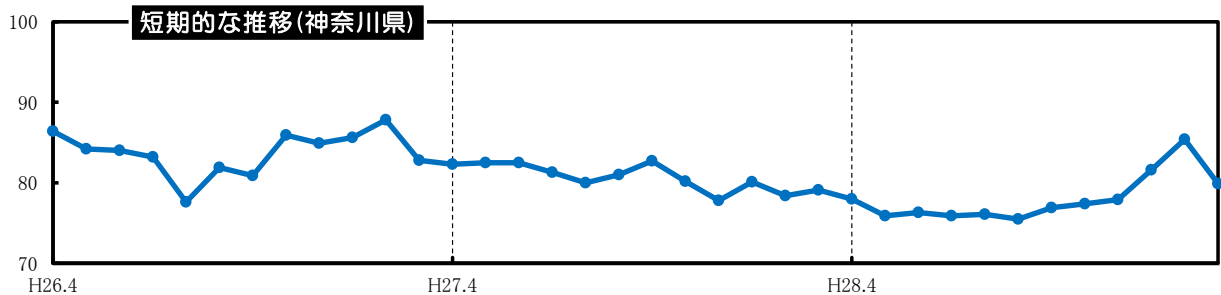
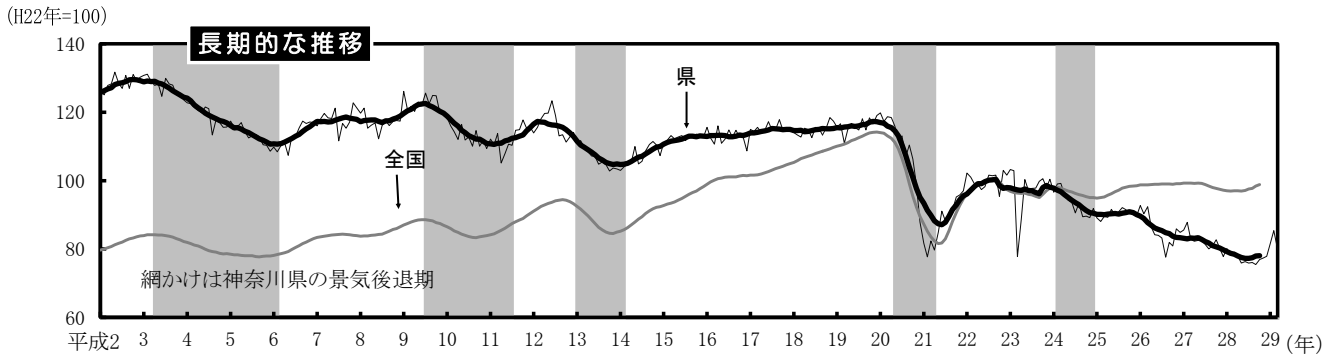
- 県の生産指数は、平成14年以降の全国の鉱工業生産指数のような伸長がみられず、低下傾向が続いています。
- 26年度は消費税率引上げに伴う駆け込み需要の反動から4月に大きく低下した後も低下傾向にありましたが、9月には上昇に転じ、27年1月まで緩やかな上昇傾向が続きました。しかし、2月以降は低下傾向となりました。
- 27年度は、10月は大きく上昇しましたが、概ね緩やかな低下傾向であったといえます。
- 28年度は、7月に上昇に転じて以降、低下と上昇を繰り返していますが、上昇傾向であったといえます。

留意事項

- 製造工業全体でみた場合は、再び製造業へ投入される中間財(生産財)が含まれています。
- ある製品がより高付加価値なものへ転化しても、数量ベースでは捉えられません。
- 県の生産指数と全国の鉱工業生産指数はウェイトが異なります。
- 県の工業生産指数月報は、速報の後、翌月の月報で速報の確報値を公表します。また毎年6月頃に前年分(1~12月分)を補正したうえで確定値となります。

11 個別系列の推移(一致系列)

C2 県生産財出荷指数 季節調整値 平成22年基準 (H22年=100)



・長期的な推移のグラフは、県は指数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示、全国は12か月移動平均のみ表示
 ・全国値は内閣府が公表する景気動向指数の個別系列の数値(平成29年5月分速報値)をもとに作成

県生産財出荷指数

- 県生産指数と同様に、工業生産指数月報のうち、生産財の出荷指数(季節調整値)を神奈川県景気動向指数で利用しています。
- 出荷指数とは、工場から出荷した製品の数量を指数化したものです。
- 生産財とは、原材料、燃料、部品、容器、消耗品、工具など、企業の生産活動に再投入される製品を指し、下図のとおり製造工業の財分類による財別でみると、ウェイトの約5割が生産財となっています。

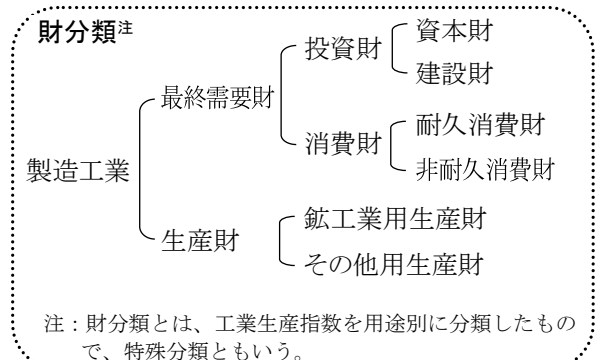
神奈川県工業生産指数の財別格付けの定義

製造工業の財分類	ウェイト 10000分比	定義
最終需要財	4893.3	鉱工業又は他の産業に原材料等として投入されない最終製品で、建設財を含み、企業消費財を除く
投資財	2764.5	資本財と建設財の合計
資本財	2395.3	家計以外で購入される製品で、製造設備など原則として想定耐用年数が1年以上で比較的購入価格の高いもの
建設財	369.2	建築工事用や土木工事に用いる資材及び建築物に対する内装品
消費財	2128.8	家計で購入される製品(耐久消費財と非耐久消費財の合計)
耐久消費財	448.1	乗用車、冷暖房器具など、原則として想定耐用年数が1年以上で比較的購入価格の高いもの
非耐久消費財	1680.7	家事用消耗品、服、靴、飲食品など、原則として想定耐用年数が1年未満又は比較的購入価格の低いもの
生産財	5106.7	鉱工業及び他の産業に原材料等として投入される製品で、企業消費財を含み、建設財を除く
鉱工業用生産財		鉱工業の生産工程に再投入される、原材料、燃料、部品、消耗品など
その他用生産財		非鉱工業用の原材料、燃料、容器、消耗品及び企業消費財

・神奈川県「平成27年工業生産指数年報」より作成
 ・ウェイトは出荷指数のもの

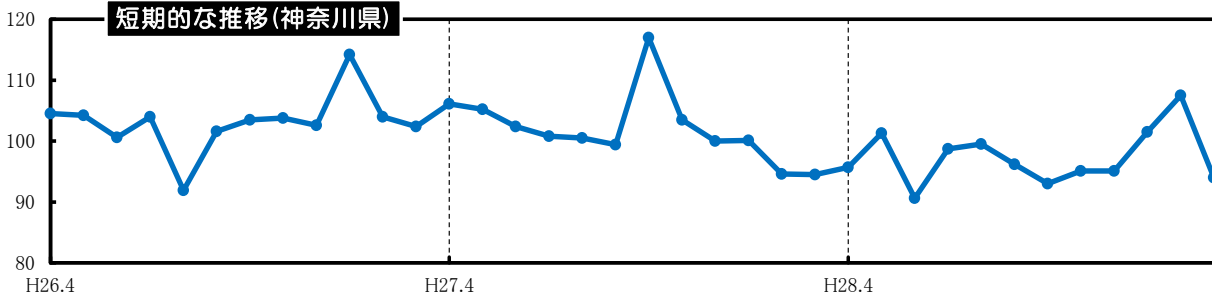
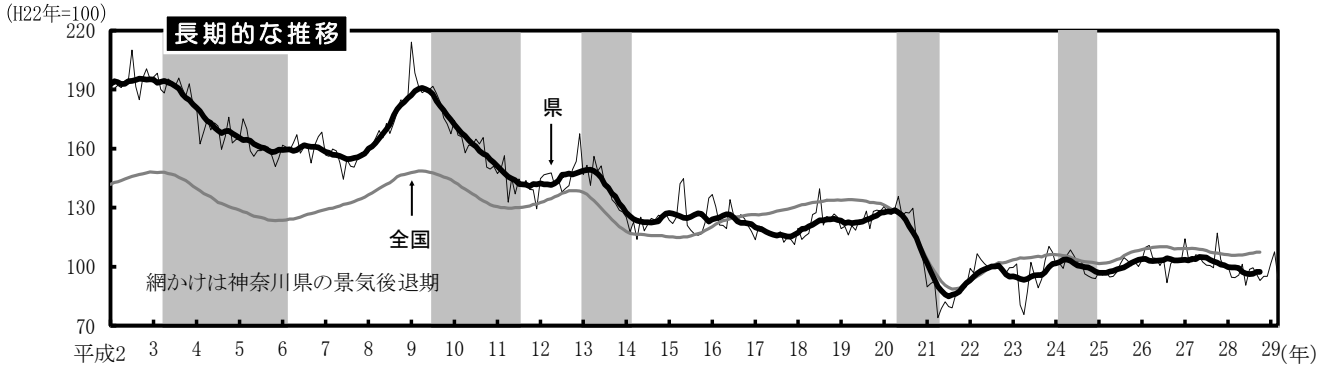
推移

- 長期的には生産指数と同様に緩やかな低下傾向となっています。
- 生産財出荷指数は平成14年2月の景気の谷以降は緩やかに上昇していましたが、リーマン・ショックが発生した20年秋頃から急激に低下しましたが、21年2月を底に上昇傾向となり、22年度は緩やかに上昇していましたが、26年度は8月まで低下が続きましたが、9月に上昇に転じ、27年2月まで上昇傾向が続きました。
- 27年度は、単月でのばらつきはあるものの、緩やかな低下傾向であったといえます。
- 28年度は、9月まで横ばいが続きましたが、10月からは上昇傾向となっています。



注：財分類とは、工業生産指数を用途別に分類したもので、特殊分類ともいう。

C3 県投資財出荷指数 季節調整値 平成22年基準 (H22年=100)



・長期的な推移のグラフは、県は指数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示、全国は12か月移動平均のみ表示
 ・全国値は内閣府が公表する景気動向指数の個別系列の数値(平成29年5月分速報値)をもとに作成

県投資財出荷指数

- 県生産指数と同様に、工業生産指数月報のうち、投資財の出荷指数(季節調整値)を神奈川県景気動向指数で利用しています。
- 出荷指数とは、工場から出荷した製品の数量を指数化したものです。
- 投資財とは、その品目が主に企業の資本形成に利用されるものを指し、製造機械やその付属品などの資本財と、建設用・土木用資材などの建設財からなります。下図のとおりウェイトの約9割が資本財となっています。(資本財ウェイト÷投資財

ウェイト=2395.3÷2764.5≒0.866)

- よって投資財出荷指数は、生産した財の出荷動向だけではなく、企業の設備投資動向を売り手(供給側)からみたものともいえます。

推移

- 長期的には、低下傾向からほぼ横ばいとなっています。
- 投資財出荷指数は、リーマン・ショックの影響により、20年10月から急激に低下しましたが、21年4月を底に上昇傾向となりました。東日本大震災が発生した23年3月は一旦落ち込んだものの、5月から24年6月まで上昇傾向が続きました。
- 26年度は、単月では振れがみられるものの、概ね横ばいの動きとなりました。
- その後、27年10月は大きく上昇しましたが、28年10月まで概ね緩やかな低下傾向を示しています。

神奈川県工業生産指数の財別格付けの定義

製造工業の財分類	ウェイト 10000分比	定義
最終需要財	4893.3	鉱工業又は他の産業に原材料等として投入されない最終製品で、建設財を含み、企業消費財を除く
投資財	2764.5	資本財と建設財の合計
資本財	2395.3	家計以外で購入される製品で、製造設備など原則として想定耐用年数が1年以上で比較的購入価格の高いもの
建設財	369.2	建築工用や土木工用の資材及び建築物に対する内装品
消費財	2128.8	家計で購入される製品(耐久消費財と非耐久消費財の合計)
耐久消費財	448.1	乗用車、冷暖房器具など、原則として想定耐用年数が1年以上で比較的購入価格の高いもの
非耐久消費財	1680.7	家事用消耗品、服、靴、飲食品など、原則として想定耐用年数が1年未満又は比較的購入価格の低いもの
生産財	5106.7	鉱工業及び他の産業に原材料等として投入される製品で、企業消費財を含み、建設財を除く
鉱工業用生産財		鉱工業の生産工程に再投入される、原材料、燃料、部品、消耗品など
その他用生産財		非鉱工業用の原材料、燃料、容器、消耗品及び企業消費財

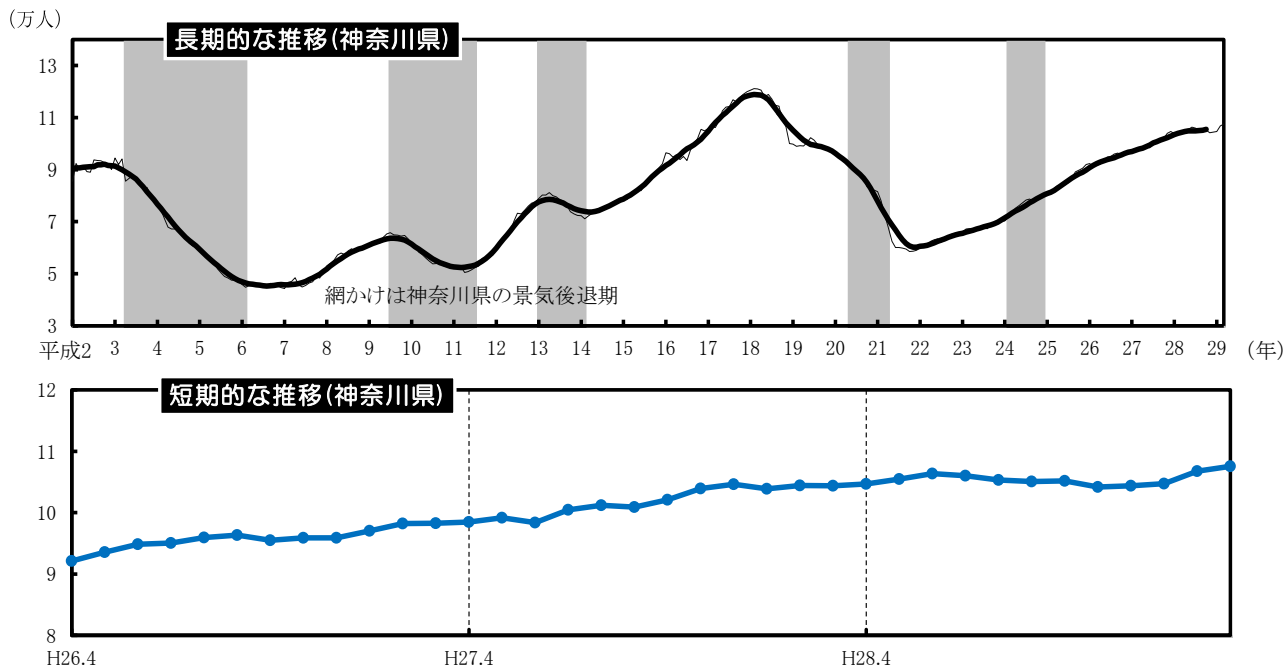
・神奈川県「平成27年工業生産指数年報」より作成
 ・ウェイトは出荷指数のもの

留意事項

- 大型機械などの受注生産品には、受注から生産、出荷、稼働までのタイムラグがあります。
- 出荷先が県外や国外向けのものも含まれています。

11 個別系列の推移(一致系列)

G4 県有効求人数(除く学卒) 季節調整値



・長期的な推移のグラフは、有効求人数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示

県有効求人数(除く学卒)

- 県有効求人数とは、神奈川県労働局の業務統計である神奈川県労働市場月報にて公表される有効求人数(季節調整値)のことをいい、神奈川県景気動向指数では「新規学卒者を除きパートタイムを含む」値を利用しています。
- これは学校卒業予定者の採用分(いわゆる新卒採用)を除くほか、雇用期間や就業形態について、常用労働に限らず季節労働やパートタイムなどすべての期間や形態を含む値という意味です。
- ここでいう有効求人数は、「月間有効求人数」のことを指し、月間有効求人数とは、前月から繰り越された求人票の有効期限が翌月以降にまたがっている未充足の求人数と、当月の新規求人数の合計数をいいます。
- 企業は、その業績により雇用水準を変化させるため、景気拡張期には求人が多くなり、景気後退期には求人が少なくなります。

留意事項

- 求人数、求職者数ともに神奈川県労働局管内受付件数による集計です(住所地や従業地での区分による集計ではありません。)

推移

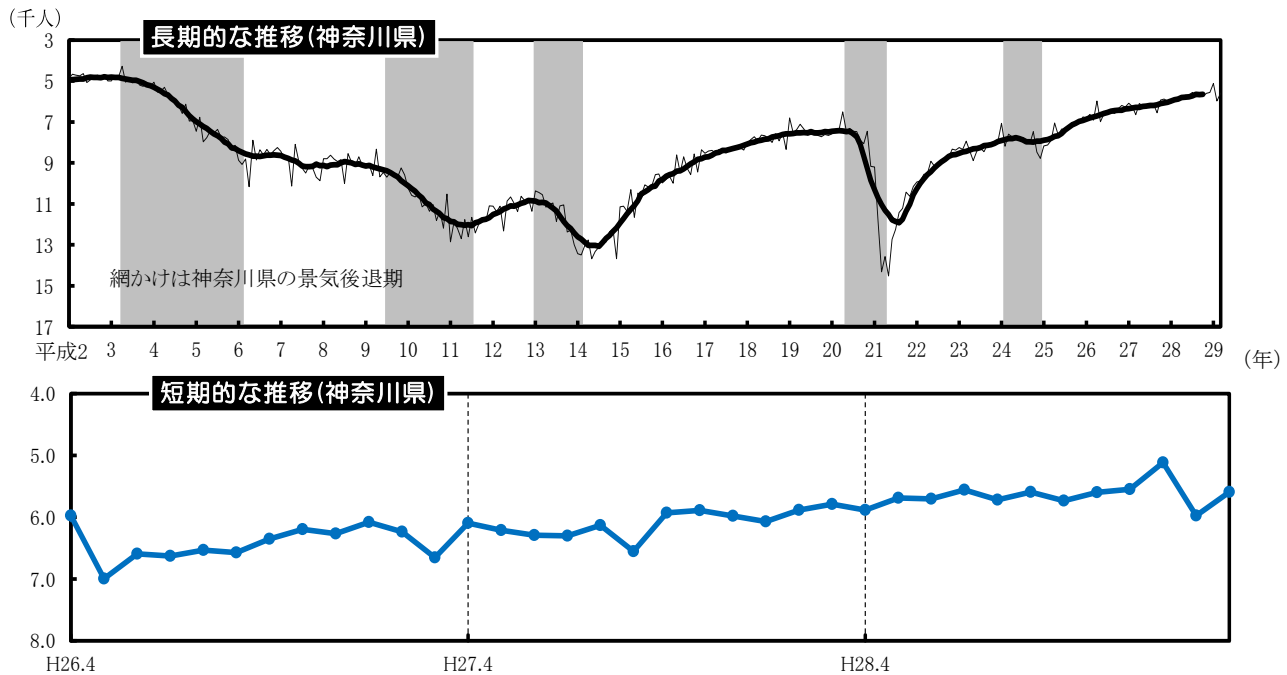
- この指標の長期的な推移グラフをみると、景気変動による増減を繰り返している様子がよくわかります。しかし、直近の景気循環にはずれが生じています。
- 直近のピークは平成18年2月で、その後は減少傾向となり、19年頃はいったん横ばい傾向となったものの、その後は20年9月のリーマン・ショックの影響もあり、21年6月まで大きく減少しました。
- その後は、21年10月を底に28年度まで上昇傾向が続いています。

用語	意味
新規求人数	期間中に新たに受付した求人数(採用予定人員)
月間有効求人数	前月から繰り越された有効求人数+当月の新規求人数
新規求職申込件数	期間中に新たに受付した求職申し込みの件数
月間有効求職者数	前月から繰り越された有効求職者数+当月の新規求職申込件数

・神奈川県労働局「労働市場年報」より作成

$$\text{有効求人倍率} = \frac{\text{月間有効求人数}}{\text{月間有効求職者数}}$$

$$\text{新規求人倍率} = \frac{\text{新規求人数}}{\text{新規求職申込件数}}$$

C5 県雇用保険初回受給者数(逆サイクル) 季節調整値


- ・逆サイクルのため縦軸の目盛を上下逆にしてている
- ・長期的な推移のグラフは、雇用保険初回受給者数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示

県雇用保険初回受給者数

- 雇用保険初回受給者数は、失業率を代替する雇用指標です。
- 雇用保険は主に失業時に給付を受けるものとなっていますが、このうち一般被保険者にかかる求職者給付の基本手当（いわゆる通常の失業給付）を受けた人数について、神奈川県景気動向指数で独自に季節調整を行ったうえで利用しています。
- 初回受給者数とは雇用保険受給期間内において1回目の支給を受けた人数のことです。この値は失業率を代替すると考えられますが、例えば3月末に退職した場合、給付の開始は5月頃となります。また自己都合退職の場合は、3か月間の給付制限期間があり、初回給付まではさらにタイムラグが生じます。
- 雇用保険初回受給者数は、企業の生産活動を背景とする労働需要に応じて、景気拡張期は減少し、景気後退期には増加する傾向があります。このように、景気の動きに対して反対に動く指標を、神奈川県景気動向指数では逆サイクルと呼んでいます。
- なお、失業率を示す統計としては総務省統計局の労働力調査があり、その一つに完全失業率の都道

府県別結果（モデル推計値、四半期平均）が参考値として公表されています。

推移

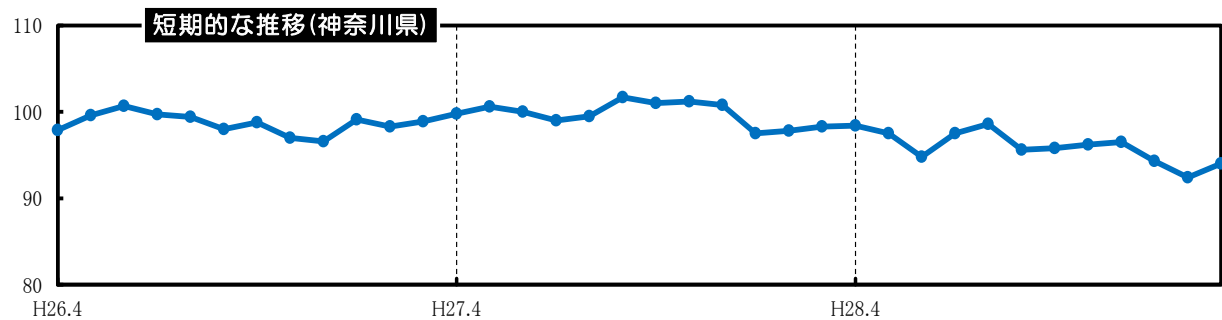
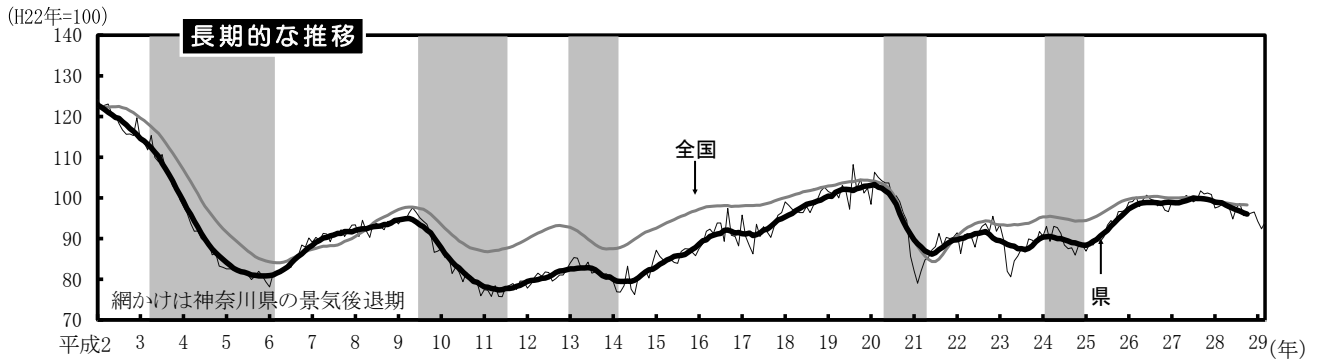
- 推移のグラフでは、縦軸を逆目盛にしています。（上に行くほど値が小さい）
- 長期的な推移では、景気動向に応じて増減を繰り返している様子がよくわかります。
- この指標は平成14年以降、一貫して改善傾向を示した後、19年度始めから20年11月頃まで横ばいで推移していました。20年12月から急激に悪化しましたが、21年5月を底に回復傾向にあり、23年度も引き続き緩やかに回復していました。
- 24年度に入ると、一時的に緩やかな悪化傾向となりましたが、その後、28年度まで緩やかな上昇傾向が続いています。
- 短期的な推移では、26年度以降緩やかな上昇傾向が続いています。

留意事項

- 記載した雇用保険の制度内容については、説明のため簡略化しています。
- 県内の雇用保険初回受給者数（実数値）は、神奈川県労働局発行の労働市場月報などに掲載されています。

11 個別系列の推移(一致系列)

C6 県所定外労働時間指数(調査産業計) 季節調整値 平成27年基準 事業所規模30人以上



・長期的な推移のグラフは、県は指数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示、全国は12か月移動平均のみ表示
 ・全国値は内閣府が公表する景気動向指数の個別系列の数値(平成29年5月分速報値)より作成

県所定外労働時間指数

- 所定外労働時間指数とは、早出、残業、休日出勤などのいわゆる残業時間数について、平成27年を基準年として指数化したものです。
- 正月や連休などによる増減を季節変動として除去すると、景気変動に対応して増減する様子がよくわかります。
- 季節調整は神奈川県景気動向指数で独自に行っています。
- 神奈川県景気動向指数では、以前、「製造業」の所定外労働時間指数を先行系列で利用していましたが、25年1月分公表時に、対象範囲の広い「調査産業計」とし、一致系列に変更しました。
- 景気が好転し経済活動が活発になると、企業はそれまでよりも労働力が必要となりますが、雇用水準を変化させる前に、時間外労働で対応します。所定外労働時間指数は、景気拡張期には上昇し、逆に景気後退期になると低下します。

推移

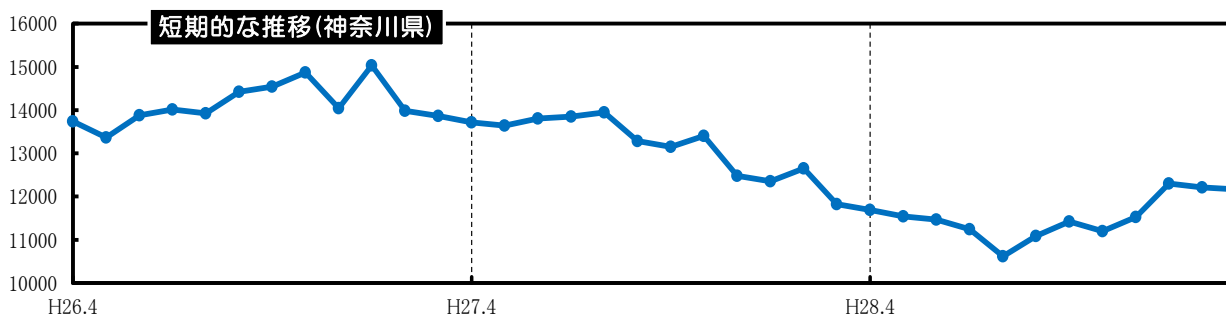
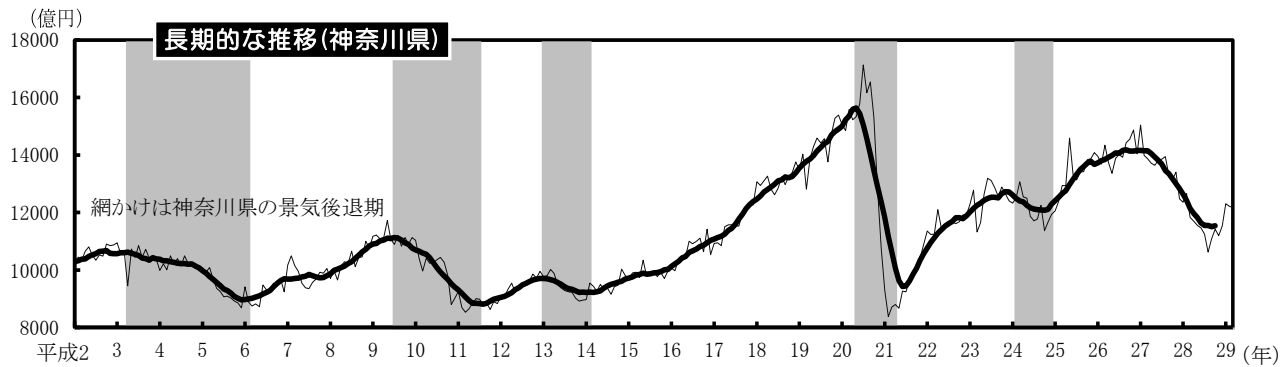
- 長期的な推移では、景気動向に応じて増減を繰り返している様子がよくわかります。
- 平成14年2月を谷とする景気拡張期では、16年中頃から17年中頃にかけて弱い動きとなった時期を除き、ほぼ一貫して改善傾向を示していました。
- 20年9月のリーマン・ショックの影響で、20年10月から急激に悪化した後、21年2月を底に回復傾向にありましたが、22年11月をピークに低下を始め、東日本大震災の影響により23年4月は大きく落ち込みました。
- しかし、23年5月には上昇傾向となり、24年度に入って一旦低下傾向に転じたものの、25年になると再び上昇傾向となりました。
- 短期的な推移では、26年度から27年12月まで概ね横ばいの状態が続きましたが、その後、28年度は緩やかな低下傾向となっています。

用語	意味
総実労働時間数	所定内労働時間数と所定外労働時間数の合計
所定内労働時間数	事業所の就業規則で定められた正規の始業時刻と終業時刻との間の実労働時間数
所定外労働時間数	早出、残業、臨時の呼出、休日出勤などの実労働時間数

・厚生労働省「毎月勤労統計調査年報」より作成

留意事項

- この指数の元となる毎月勤労調査では、定期的に調査対象事業所の入替えを行っていることから、調査結果に時系列的連続性を持たせるため、新旧調査結果のギャップを過去に遡って修正しています。

C7 横浜港等輸出入通関実績※ 季節調整値 ※ 輸出額+輸入額


- ・長期的な推移のグラフは、横浜港等輸出入通関実績の各月値と12か月移動平均を重ねて表示
- ・横浜港、川崎港及び横須賀港の輸出額と輸入額の合計

横浜港等輸出入通関実績

- 横浜港等とは、横浜港、川崎港、横須賀港を指します。この3港は関税法上という「開港」にあたり、貨物の輸出及び輸入並びに外国貿易船の入港及び出港が認められています。
- 神奈川県景気動向指数では3港の円ベースの輸出額と輸入額を独自に季節調整を行ったものを合算して利用しています。よって、輸出入通関実績は、「輸出-輸入」で示した貿易収支ではなく、貨物の取扱規模を示すものです。
- 円ベースの評価には、税関長の公示する為替レート(毎週変更)が用いられ、為替レート変動の影響を受けます。
- 3港の構成比^{注1}は、輸出額が横浜港82.7%、川崎港15.1%、横須賀港2.2%となっており、輸入額は横浜港68.1%、川崎港31.1%、横須賀港0.8%となっています。
- 全国港別貿易額順位表(確定)^{注2}によると、輸出入合計額の順位は成田空港、東京港、名古屋港、横浜港、関西空港の順となっています。川崎港は10位、横須賀港は49位です。

注1:「横浜税関管内貿易概況(平成28年分)【確定値】」による。

注2:名古屋税関資料「平成28年分全国港別貿易額順位表(確定)」による。

推移

- 横浜港等輸出入通関実績は、景気拡張期に増加し、後退期に減少する傾向が明瞭です。
- 平成23年3月の東日本大震災後、LNGや非鉄金属の輸入が急増した影響もあり、23年度は22年度に比べ高い水準が続きました。
- 24年度前半は、減少傾向となりましたが、11月以降は輸入額が貿易額を押し上げたこともあり、増加傾向に転じ、27年1月まで続きました。
- 27年2月から28年8月まで概ね低下傾向が続いた後、緩やかに上昇しています。

平成28年の横浜港の状況

- 28年の横浜港の輸出額^{注3}は、前年比で8.6%減少しました。地域別では、横浜港の輸出額の5割を超えるアジア向けが同8.5%減少したほか、アメリカ合衆国向けが同4.0%減、EU向けが同2.9%減と、主要な各地域・国向けで減少しました。
- なお、28年の横浜港の主要輸出品目は自動車、自動車の部分品、原動機などで、主要輸入品目は非鉄金属、衣類・同付属品、液化天然ガスなどとなっています。

注3:「横浜港貿易概況(平成28年分)【確定値】」による。

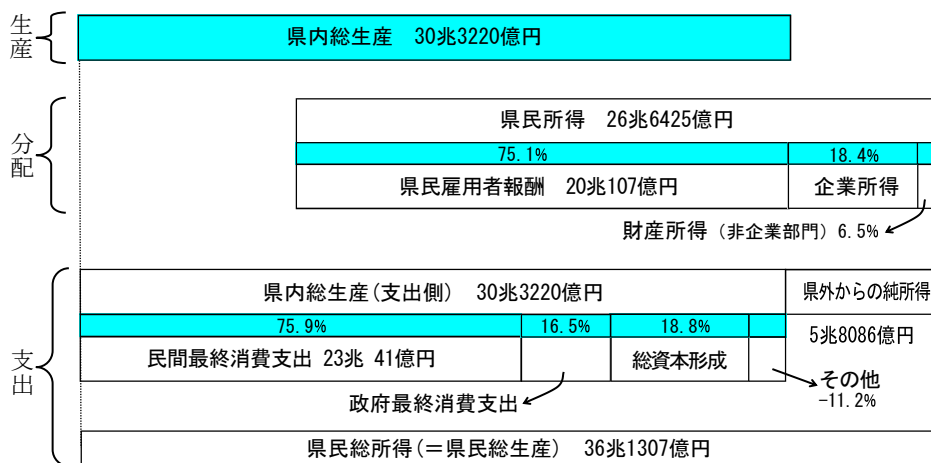
11 個別系列の推移(一致系列)

(平成26年度神奈川県県民経済計算より作成)

参考：神奈川県の経済規模

- 県民経済計算では、経済活動の規模などがわかります。
- 下の関係図では、生産活動を[生産]、その結果である所得分配を[分配]、財・サービスの需要構成を[支出]で表しています。
- 平成26年度の県内総生産は30兆3220億円で、対全国シェアは6.19%です。
- 県民所得26兆6425億円のうち、県民雇用者報酬(主に労働者の賃金)が75.1%、企業所得は18.4%を占めています。
- 支出の構成項目では、県内総生産のうち民間最終消費支出(主に家計の消費支出)が75.9%、総資本形成(企業の設備投資など)が18.8%を占めています。
- 神奈川県は、主に県外就労者の所得を示す[県外からの純所得]が高く、県民総所得(=県民総生産)は36兆1307億円になります。

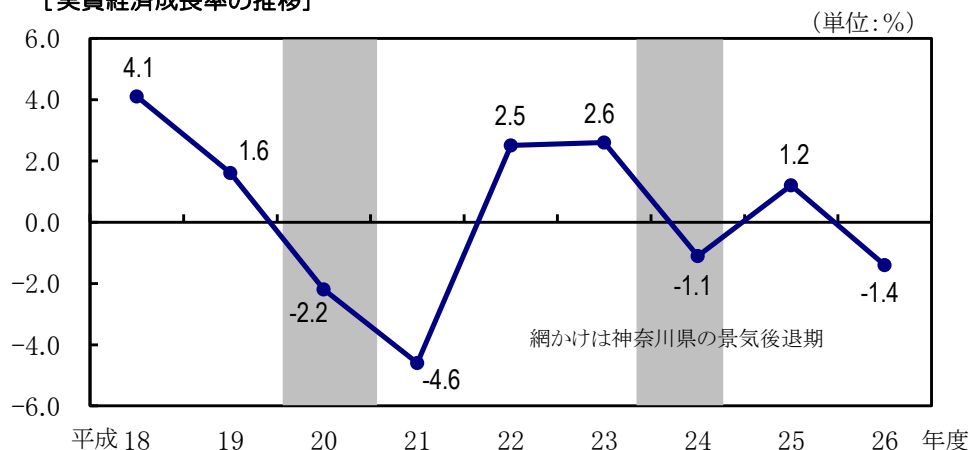
【生産面、分配面、支出面の関係】(名目値)



- 平成26年度の実質経済成長率^準は-1.4%と2年ぶりのマイナスとなりました。近年の経済成長率は、景気後退期になるとマイナスとなる傾向があります。

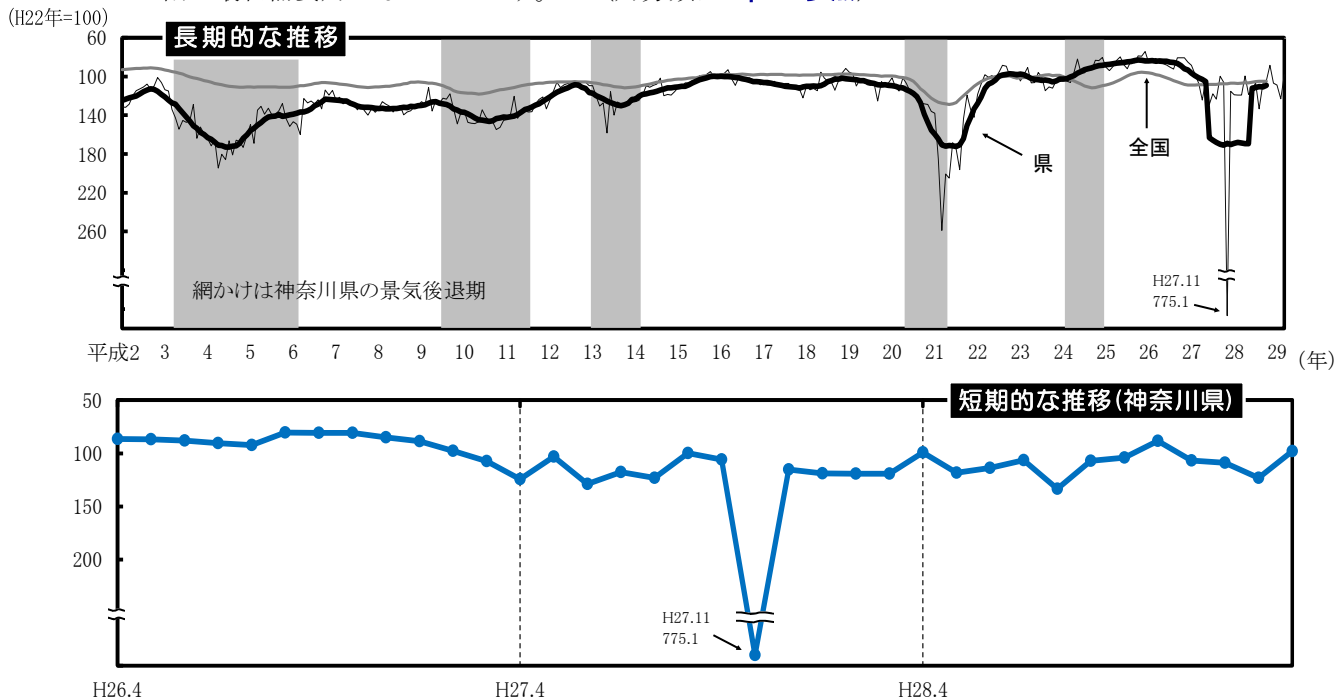
注：実質経済成長率とは、物価変動の影響が除かれた実質県内総生産の対前年度増減率のことで、経済規模の実質的な変化を表します。

【実質経済成長率の推移】



L1 県最終需要財在庫率指数(逆サイクル) 季節調整値 平成22年基準 (H22年=100)

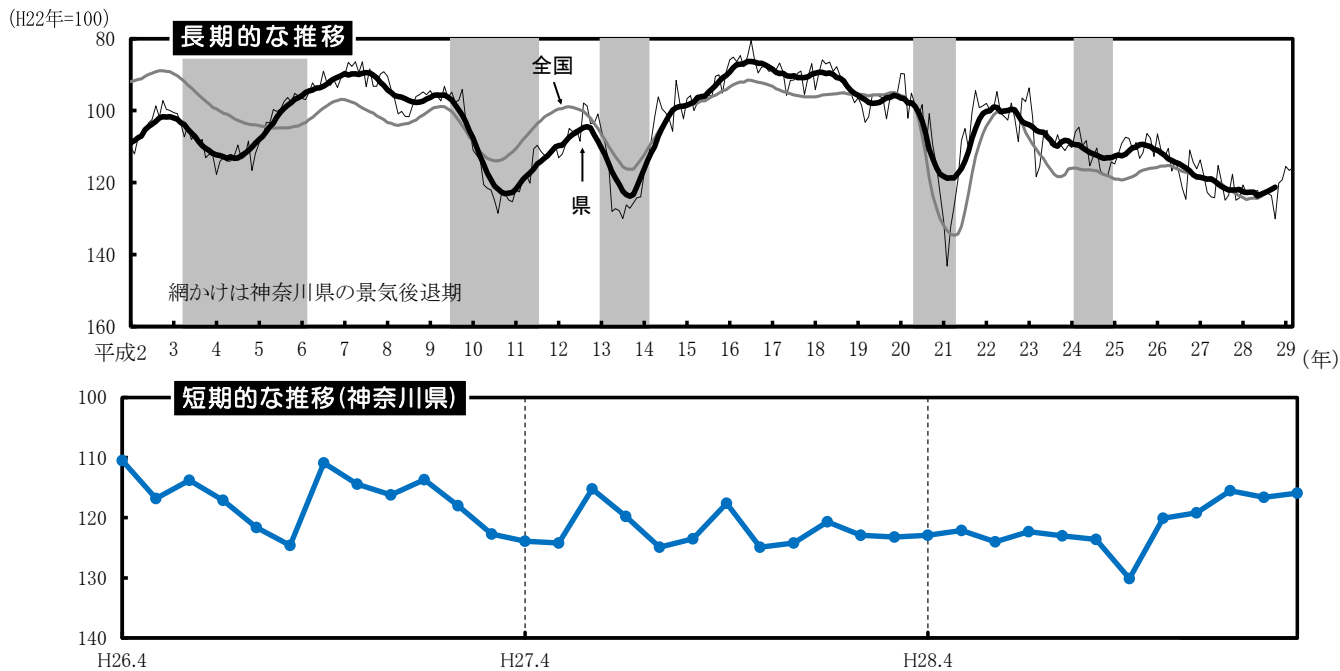
最終需要財とは、最終需要に向けられる製品を指し、神奈川県在庫率指数は、ウェイトの約4割が最終需要財となっています。(財分類は⇒p. 28参照)



・逆サイクルのため縦軸の目盛を上下逆にしてしている ・長期的な推移のグラフは、県は指数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示、全国は12か月移動平均のみ表示 ・全国値は内閣府が公表する景気動向指数の個別系列の数値(平成29年5月分速報値)より作成

L2 県生産財在庫率指数(逆サイクル) 季節調整値 平成22年基準 (H22年=100)

生産財とは、生産活動に再投入される製品を指し、神奈川県在庫率指数は、ウェイトの約6割が生産財となっています。(財分類は⇒p. 28参照)



・逆サイクルのため縦軸の目盛を上下逆にしてしている ・長期的な推移のグラフは、県は指数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示、全国は12か月移動平均のみ表示 ・全国値は内閣府が公表する景気動向指数の個別系列の数値(平成29年5月分速報値)より作成

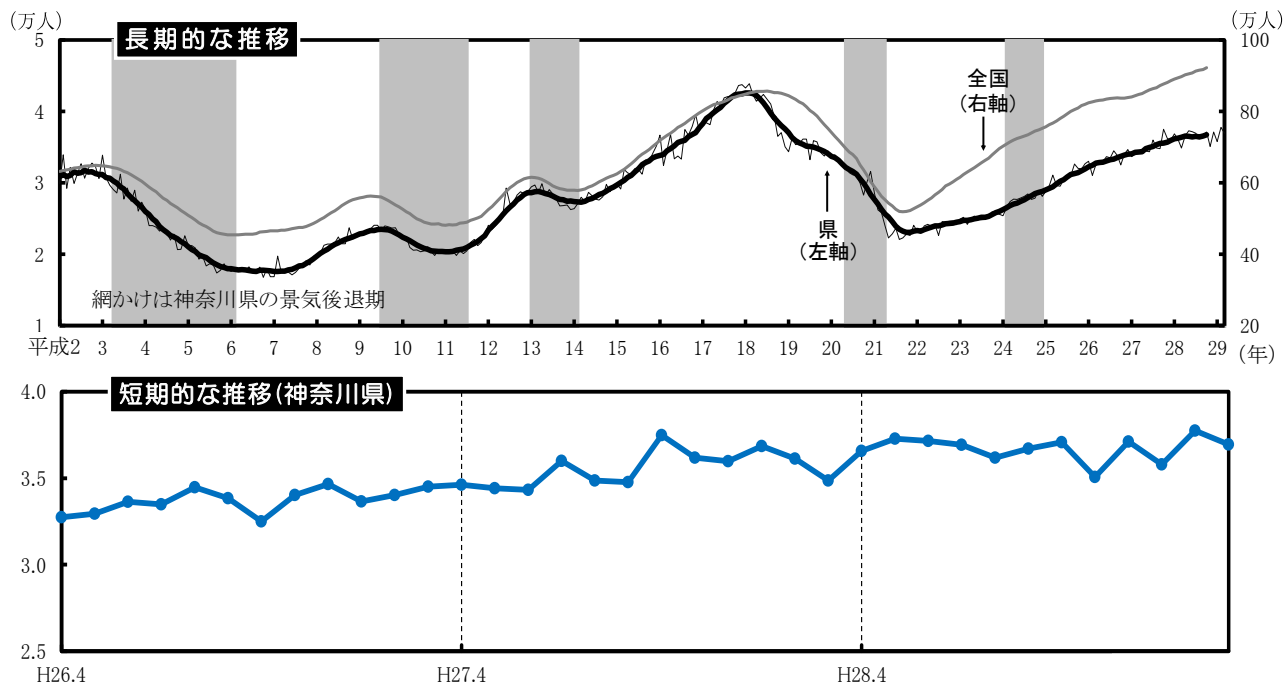
＜在庫率＝在庫数量÷出荷数量＞

在庫増(減)、出荷減(増)で在庫率指数は上昇(下降)します。在庫の増加は売れ残りの場合と計画による場合とがあり、前者の場合は出荷も減少し在庫率指数が上昇する傾向があります。

12 個別系列の推移(先行系列)

L3 県新規求人数(除く学卒) 季節調整値

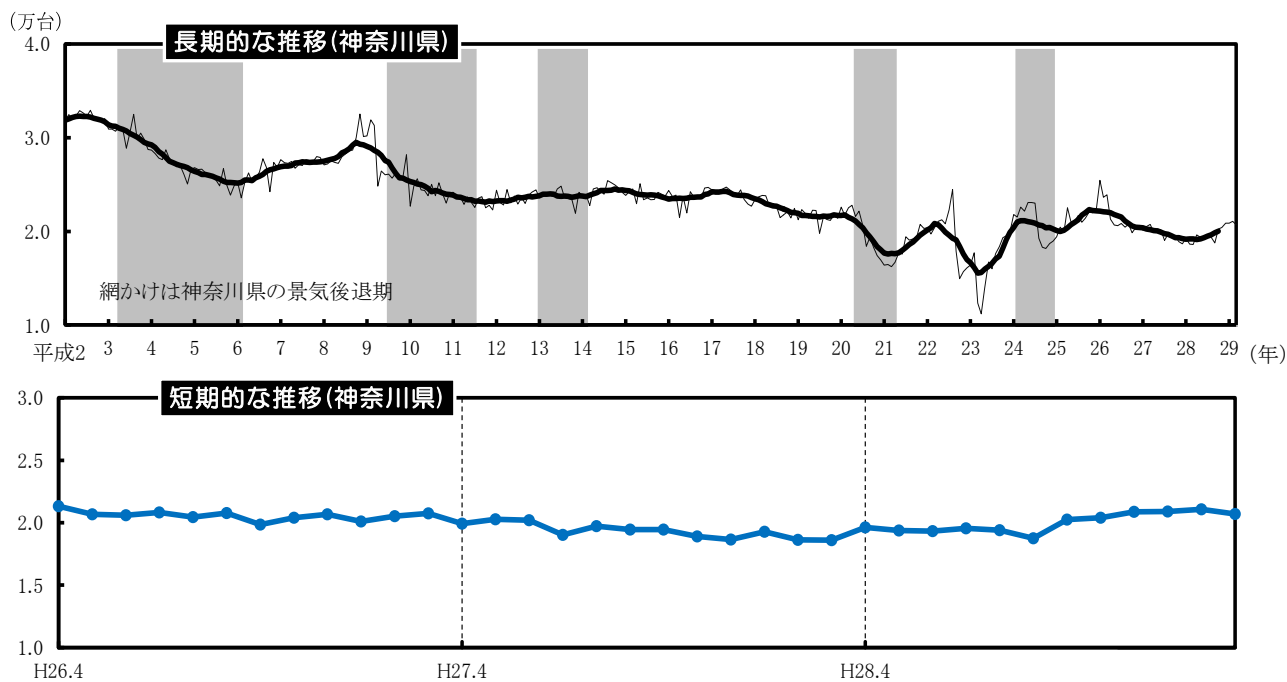
期間中に県内の公共職業安定所が新たに受け付けた求人数(採用予定人員)です。神奈川県景気動向指数では「新規学卒を除きパートタイムを含む」値を利用しています。



- ・長期的な推移のグラフは、県は新規求人数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示、全国は12か月移動平均のみ表示
- ・全国値は内閣府が公表する景気動向指数の個別系列の数値(平成29年5月分速報値)より作成

L4 県乗用車新車新規登録・届出台数 季節調整値

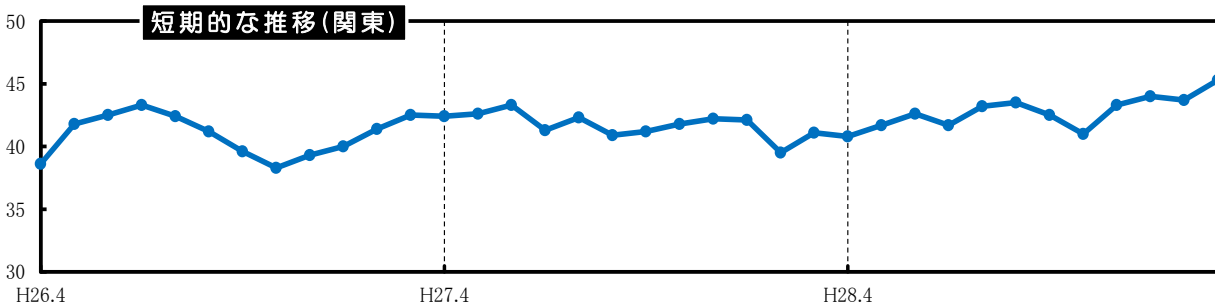
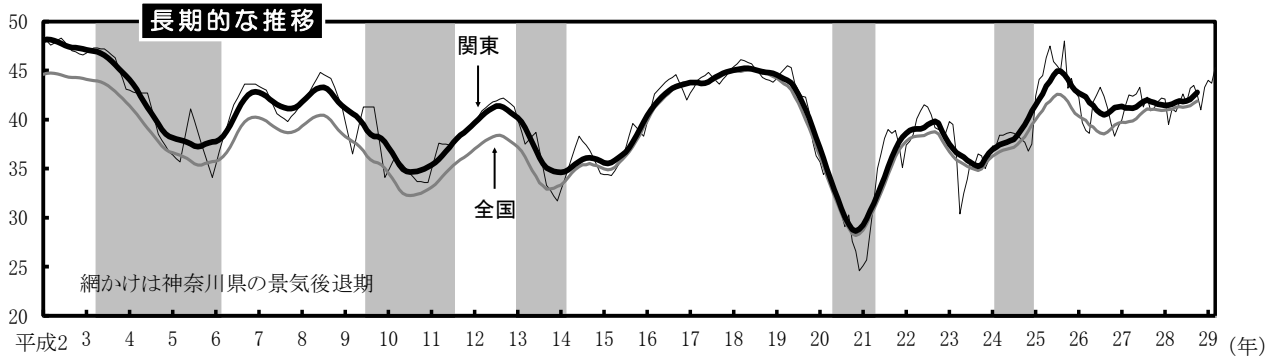
普通車、小型車の新車新規登録台数及び軽自動車の新規届出台数の乗用車のみを合計したもので、家計の消費動向をみる指標の一つです。神奈川県景気動向指数で独自に季節調整を行い利用しています。



- ・乗用車は登録ナンバーベースによる区分
- ・横浜、川崎、相模、湘南ナンバーでの新規登録・届出合計
- ・長期的な推移のグラフは、乗用車新車新規登録・届出台数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示

L5 消費者態度指数（関東） 実数値

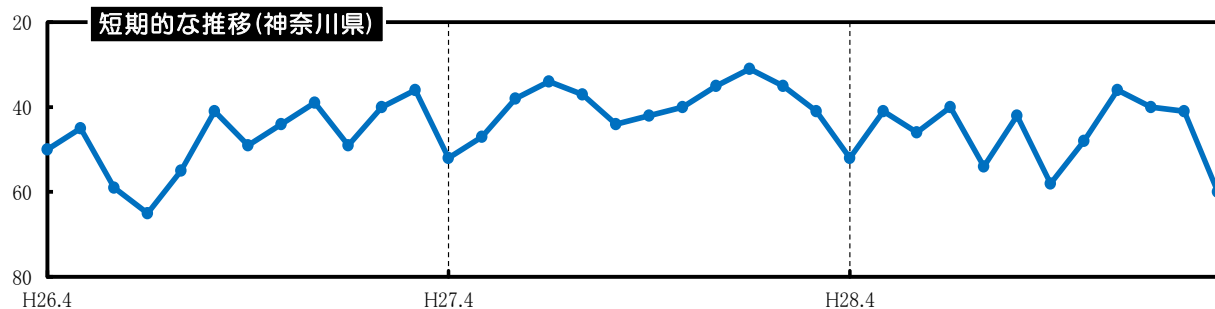
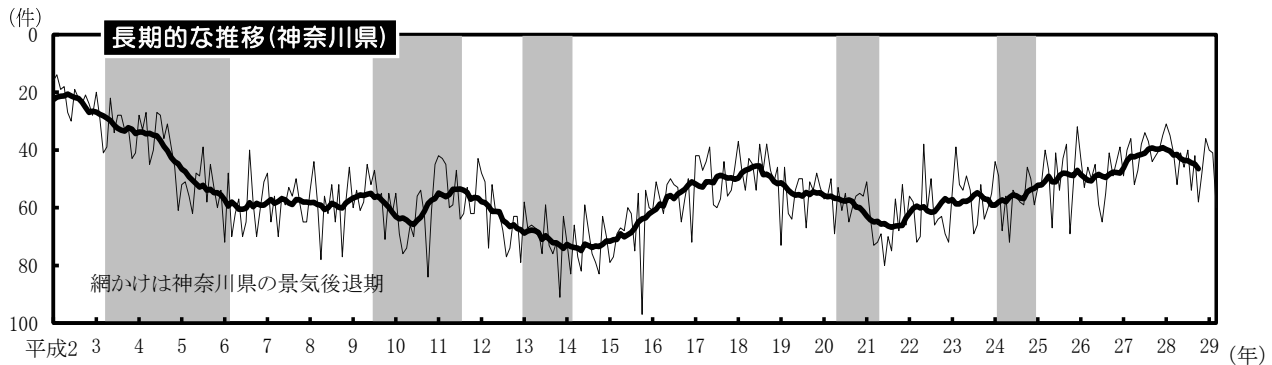
消費者の意識について、「暮らし向き」、「収入の増え方」、「雇用環境」及び「耐久消費財の買い時判断」の4項目に関し、今後半年間の見通しを調査した結果を指数化したものです。



- ・長期的な推移のグラフは、消費者態度指数（関東）は各月値と12か月移動平均を重ねて表示、全国は12か月移動平均のみ表示
- ・全国値は、原数値で、内閣府が公表する景気動向指数の個別系列の数値(平成29年5月分速報値)より作成

L6 県企業倒産件数（逆サイクル） 実数値

企業倒産件数は、季節的な要因が少ないと考えられるため、季節調整は行わずに公表された実数値をそのまま利用しています。件数は負債総額が1千万円以上の倒産を集計したものです。

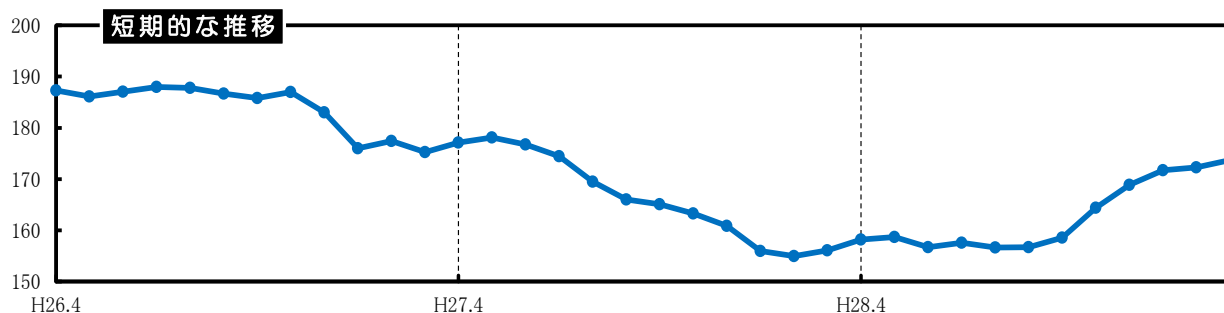
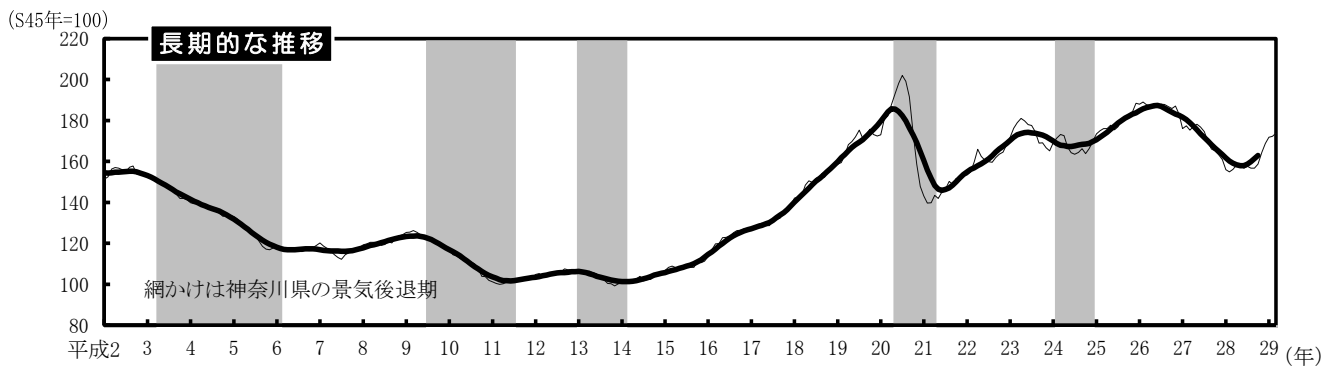


- ・逆サイクルのため縦軸の目盛を上下逆になっている
- ・長期的な推移のグラフは、企業倒産件数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示

12 個別系列の推移(先行系列)

L7 日経商品指数(42種) 実数値 (S45年=100)

(株)日本経済新聞社が、景気動向に敏感な値動きを示す主要商品(繊維、鋼材、非鉄金属、木材、化学、石油、紙、食品等)の企業間取引価格を、昭和45年を100として指数化しています。

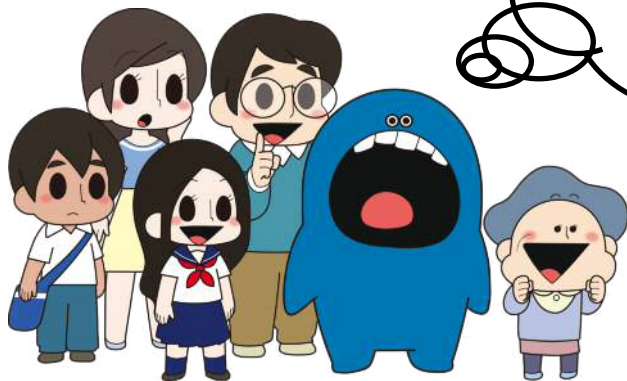


- ・長期的な推移のグラフは、日経商品指数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示
- ・日経商品指数の品目ごとのウェイトは均等

神奈川県統計センターでは、
いろいろな統計データを
ホームページ上で提供しています。

神奈川県統計センター

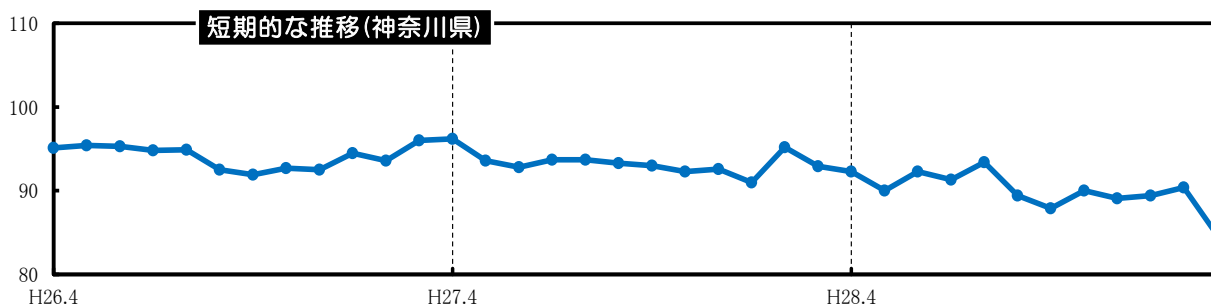
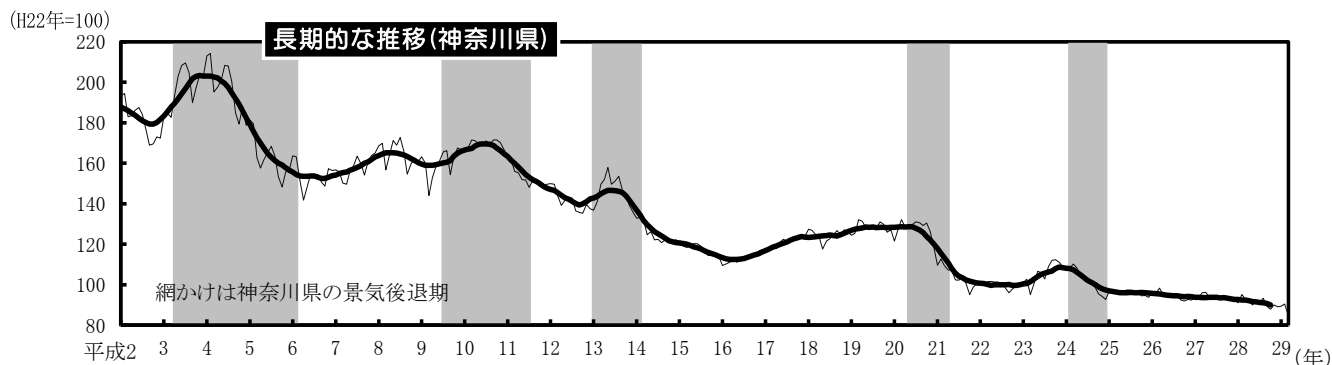
検索



神奈川県オリジナルキャラクター かなかなかぞく

Lg1 県在庫指数(製造工業) 季節調整値 平成22年基準(H22年=100)

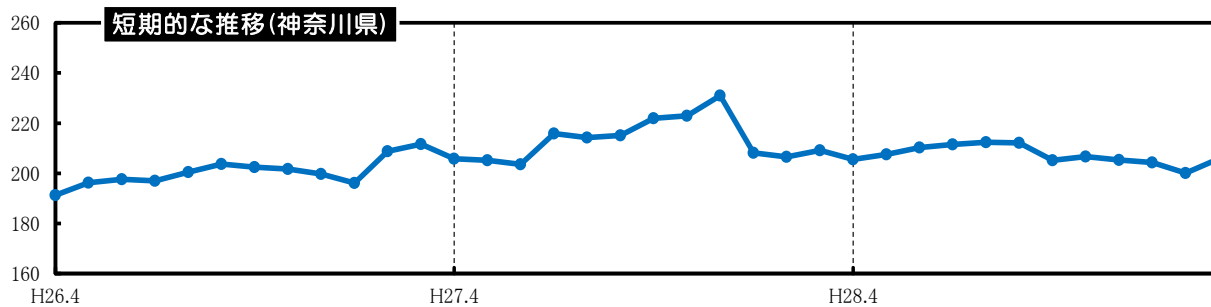
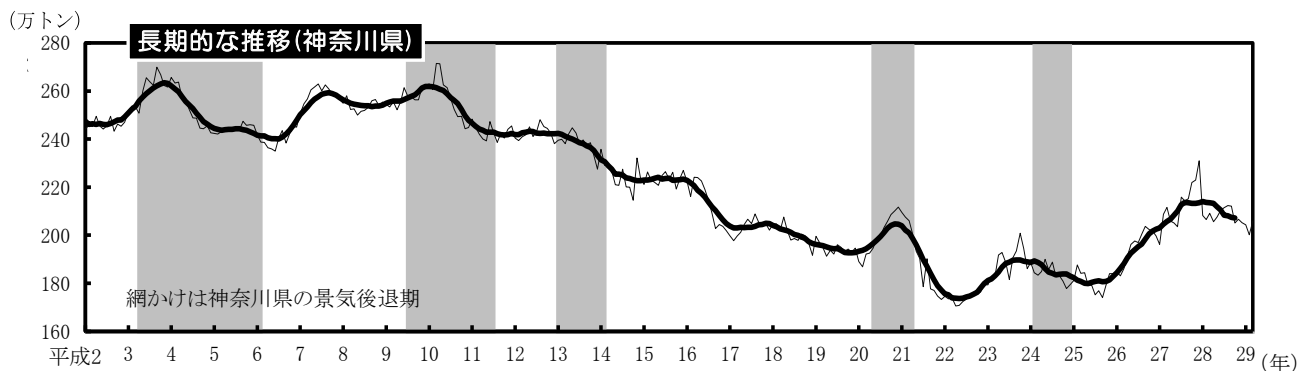
製造業全体の在庫数量を指数化したもので、在庫増は、生産増にあわせた積み増しによるものと、販売不振による在庫増があります。在庫がピークになったときには、すでに景気が後退を始めている場合が多いとされます。



・長期的な推移のグラフは、指数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示

Lg2 県普通営業倉庫保管残高 季節調整値

倉庫業の登録業者が管理運営する県内の普通倉庫の月末保管残高を、神奈川県景気動向指数で独自に季節調整を行い利用しています。

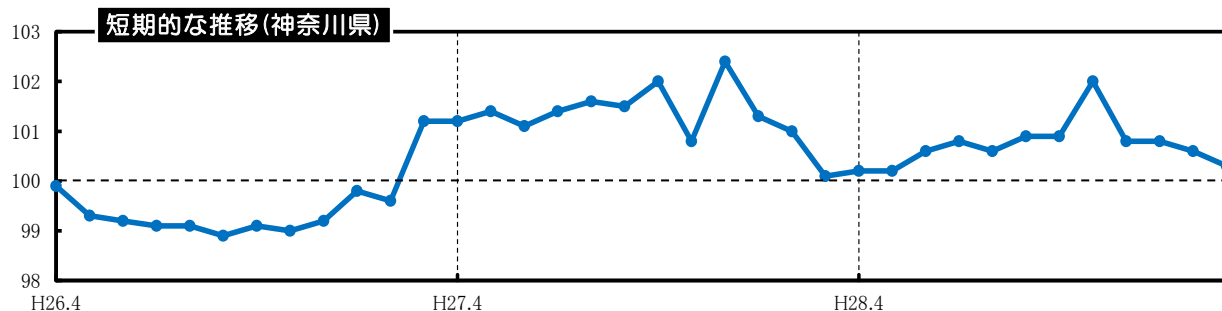
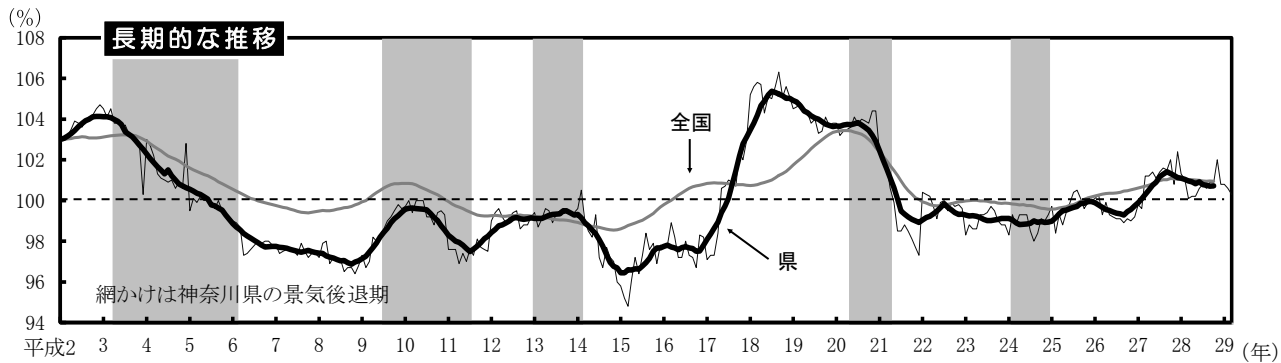


・長期的な推移のグラフは、普通営業倉庫保管残高の各月値と12か月移動平均を重ねて表示

13 個別系列の推移(遅行系列)

Lg3 県常用雇用指数（調査産業計） 平成27年基準 前年同月比

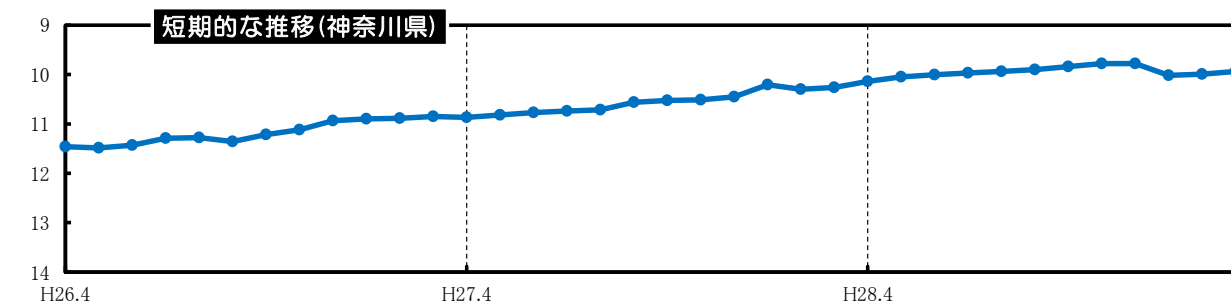
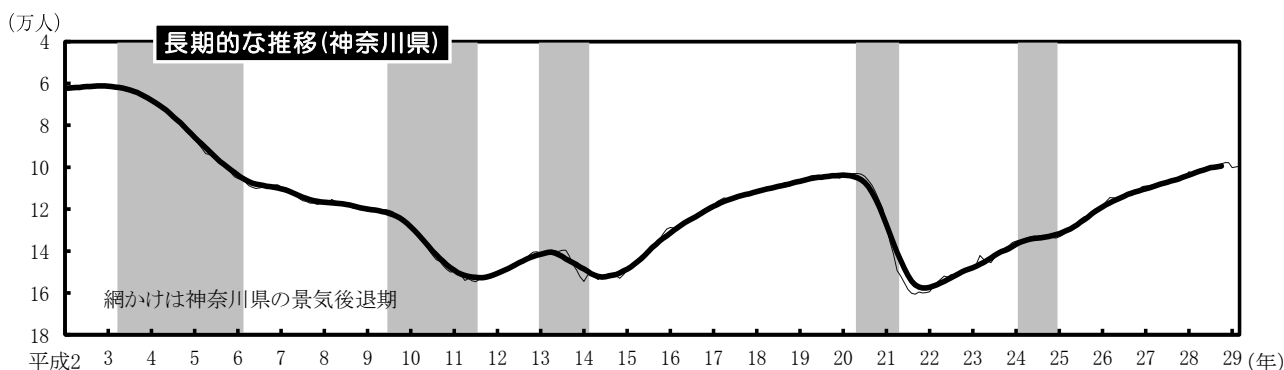
各月末時点の常用労働者数を指数化したものです。常用労働者とはパートタイム労働者も含んでいます。神奈川県景気動向指数では、指数の前年同月比を利用しています。



- ・長期的な推移のグラフは、県は前年同月比の各月値と12か月移動平均を重ねて表示、全国は12か月移動平均のみ表示
- ・前年同月比＝当該月の指数÷前年同月の指数×100（当該月と前年同月が同じ値の場合、100.0%になる）
- ・全国値は、内閣府が公表する景気動向指数の個別系列の数値(平成29年5月分速報値)より作成

Lg4 県有効求職者数（除く学卒）（逆サイクル） 季節調整値

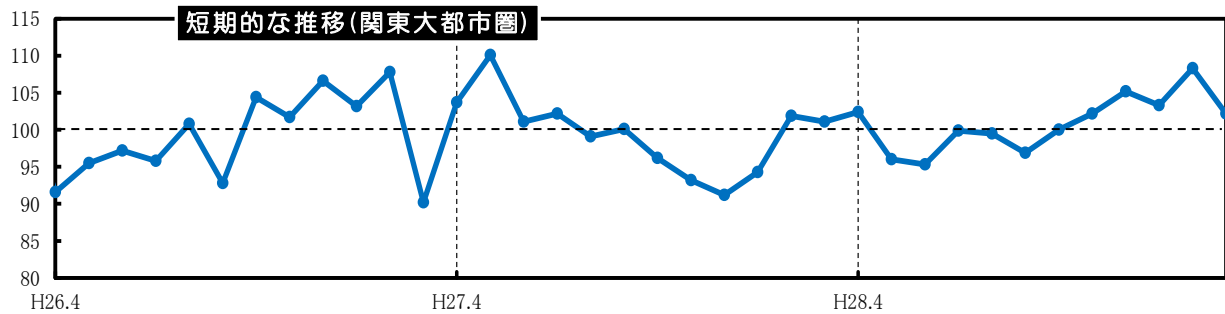
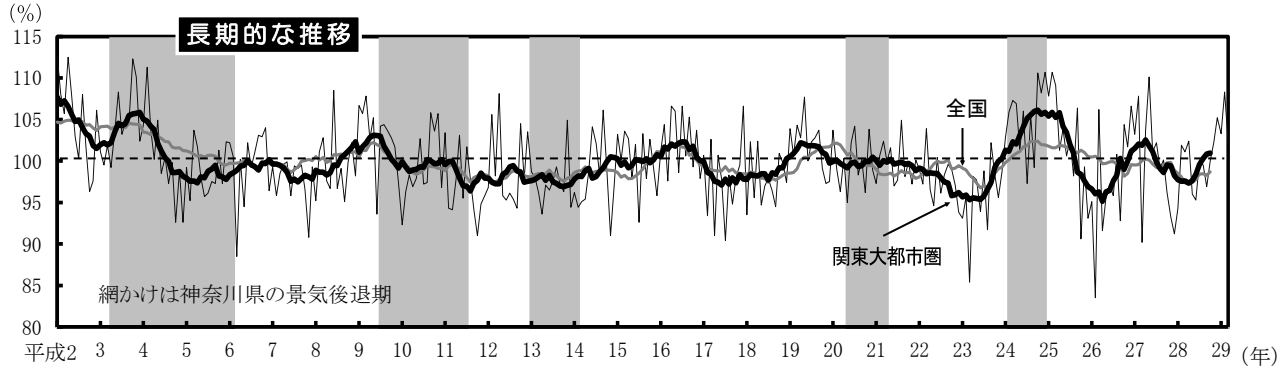
期間中に県内の公共職業安定所が新たに受け付けた求職申込み件数と、前月から繰越された有効求職者（有効期限が翌月以降にまたがっている就職未決定の求職者）の合計数です。神奈川県景気動向指数では「新規学卒を除きパートタイムを含む」値を利用しています。



- ・逆サイクルのため縦軸の目盛を上下逆になっている
- ・長期的な推移のグラフは、県有効求職者数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示

Lg5 家計消費支出(勤労者世帯・関東大都市圏) 前年同月比

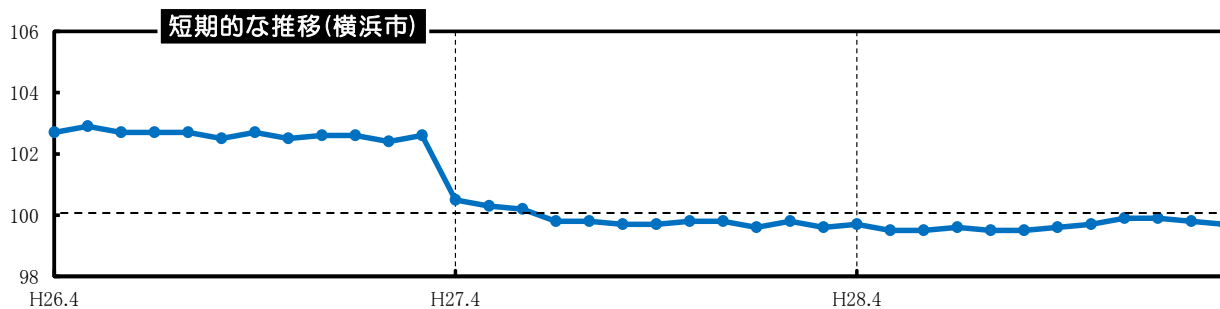
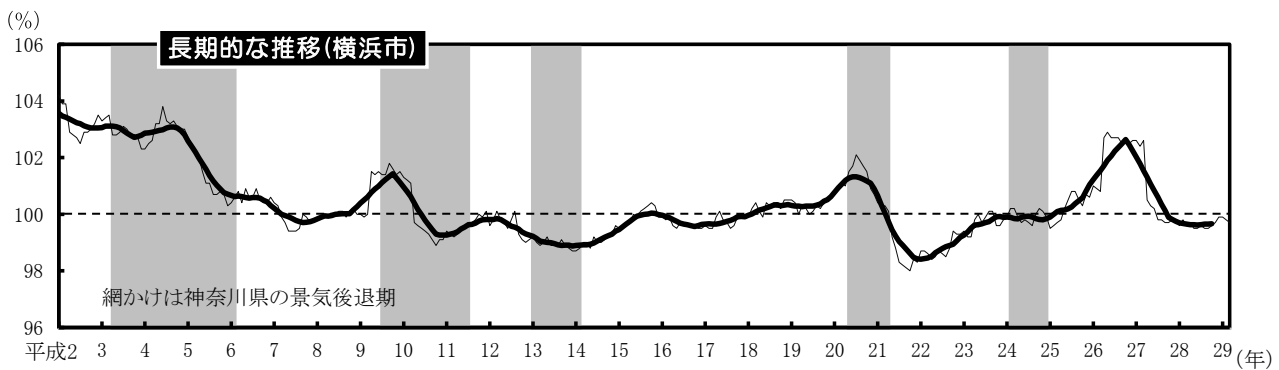
神奈川県景気動向指数では、二人以上の世帯、関東大都市圏、勤労者世帯の1世帯当たり1か月の名目消費支出額の前年同月比を用いています。



- ・前年同月比=当該月の指数÷前年同月の指数×100(当該月と前年同月が同じ値の場合、100.0%になる)
- ・長期的な推移のグラフは、関東大都市圏は家計消費支出の各月値と12か月移動平均を重ねて表示、全国は12か月移動平均のみ表示
- ・全国値は内閣府が公表する景気動向指数の個別系列の数値(平成29年5月分速報値)より作成

Lg6 消費者物価指数(生鮮食品を除く総合・横浜市) 平成27年基準 前年同月比

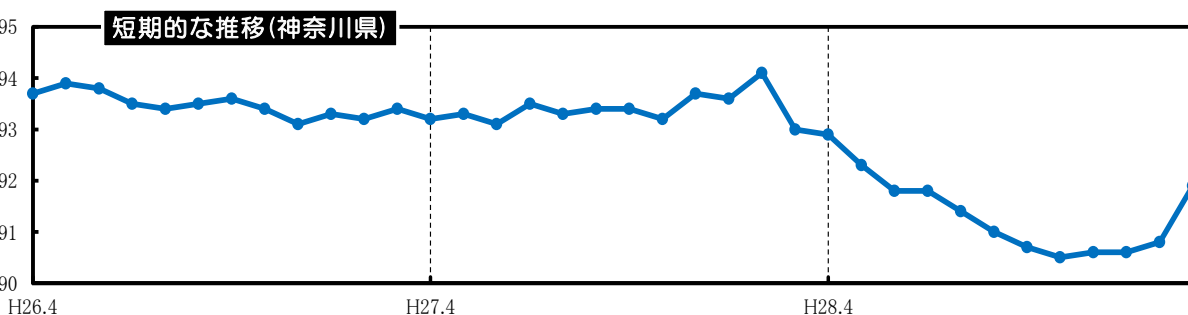
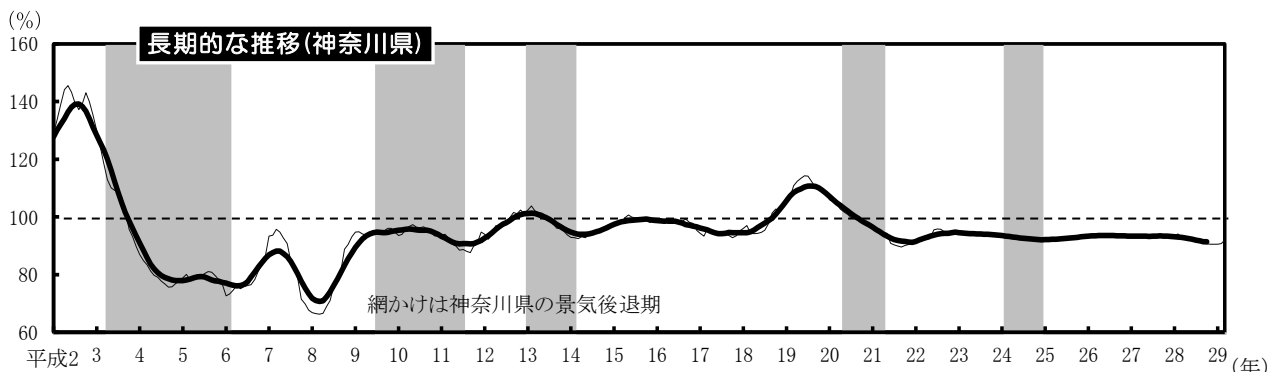
消費者物価指数は、消費者が購入する商品(財やサービス)の価格の動きを総合した物価の変化を表します。神奈川県景気動向指数では、生鮮食品を除く総合指数の前年同月比を利用しています。



- ・前年同月比=当該月の指数÷前年同月の指数×100(当該月と前年同月が同じ値の場合、100.0%になる)
- ・長期的な推移のグラフは、指数の各月値と12か月移動平均を重ねて表示

Lg7 県内銀行貸出約定平均金利 前年同月比

貸出約定平均金利(ストックベース)は、金融機関が過去に貸出を行った際に約定した金利を各月末の貸出残高で加重平均したものです。このうち神奈川県景気動向指数では短期金利と長期金利を総合した金利の前年同月比を用いています。



- ・前年同月比=当該月の指数÷前年同月の指数×100 (当該月と前年同月が同じ値の場合、100.0%になる)
- ・長期的な推移のグラフは、前年同月比の各月値の各月値と12か月移動平均を重ねて表示

[日本銀行の金融市場調節方針]

- ・平成18年3月：「量的緩和」を解除
- ・平成25年4月：「量的・質的金融緩和」の導入
- ・平成28年1月：「マイナス金利付き量的・質的金融緩和」導入
- ・平成22年10月：実質的「ゼロ金利政策」を採用
- ・平成26年10月：「量的・質的金融緩和」の拡大
- ・平成28年9月：「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」導入

[先行系列]

指標名 年月	L1 県最終需要財 在庫率指数 (逆) 季節調整値 H22年=100	L2 県生産財在庫 率指数(逆) 季節調整値 H22年=100	L3 県新規求人人数 (除く学卒) 季節調整値 人	L4 県乗用車新車 新規登録・届出 台数※2 季節調整値※1 台	L5 消費者態度指 数(関東) 実数値	L6 県企業倒産件 数(逆) 実数値 件	L7 日経商品指数 (42種) 実数値 S45年=100
	H27. 4	124.4	123.9	34,626	19,934	42.4	52
5	103.2	124.2	34,421	20,268	42.6	47	178.137
6	129.0	115.2	34,332	20,202	43.3	38	176.769
7	117.8	119.8	36,002	19,025	41.3	34	174.461
8	123.2	124.9	34,858	19,732	42.3	37	169.466
9	99.8	123.5	34,771	19,457	40.9	44	166.020
10	106.0	117.6	37,490	19,440	41.2	42	165.098
11	775.1	124.9	36,185	18,894	41.8	40	163.272
12	115.4	124.2	35,987	18,666	42.2	35	160.852
H28. 1	118.9	120.7	36,855	19,272	42.1	31	155.948
2	119.2	122.9	36,129	18,625	39.5	35	154.942
3	119.2	123.2	34,861	18,598	41.1	41	156.095
4	99.3	122.9	36,579	19,619	40.8	52	158.194
5	118.4	122.1	37,278	19,370	41.7	41	158.665
6	113.8	124.0	37,163	19,337	42.6	46	156.704
7	106.4	122.3	36,937	19,540	41.7	40	157.572
8	133.4	123.0	36,180	19,405	43.2	54	156.636
9	107.1	123.6	36,708	18,764	43.5	42	156.713
10	104.0	130.1	37,088	20,254	42.5	58	158.586
11	88.3	120.1	35,072	20,405	41.0	48	164.413
12	106.9	119.2	37,128	20,882	43.3	36	168.833
H29. 1	108.9	115.5	35,794	20,894	44.0	40	171.743
2	123.1	116.6	37,752	21,068	43.7	41	172.284
3	98.1	115.9	36,956	20,712	45.3	60	173.696

[一致系列]

指標名 年月	C1 県生産指数(製 造工業) 季節調整値 H22年=100	C2 県生産財出荷 指数 季節調整値 H22年=100	C3 県投資財出荷 指数 季節調整値 H22年=100	C4 県有効求人人数 (除く学卒) 季節調整値 人	C5 県雇用保険初 回受給者数 (逆) 季節調整値※1 人	C6 県所定外労働 時間指数(調査 産業計) 季節調整値※1 H22年=100	C7 横浜港等輸出 入通関実績※3 季節調整値※1 百万円
	H27. 4	86.9	82.3	106.1	98,449	6,097	99.8
5	86.6	82.5	105.2	99,160	6,214	100.6	1,364,365
6	87.2	82.5	102.4	98,391	6,290	100.0	1,380,297
7	86.2	81.3	100.8	100,435	6,302	99.0	1,385,141
8	85.4	80.0	100.5	101,217	6,130	99.5	1,394,672
9	86.1	81.0	99.4	100,916	6,553	101.7	1,328,555
10	92.1	82.7	117.0	102,075	5,932	101.0	1,314,620
11	86.7	80.2	103.5	103,949	5,889	101.2	1,340,649
12	85.2	77.8	100.0	104,631	5,978	100.8	1,247,690
H28. 1	85.3	80.1	100.1	103,898	6,070	97.5	1,235,434
2	83.4	78.4	94.6	104,424	5,886	97.8	1,265,335
3	85.1	79.1	94.5	104,354	5,789	98.3	1,182,501
4	83.7	78.0	95.7	104,676	5,883	98.4	1,168,920
5	85.0	75.9	101.3	105,476	5,690	97.5	1,154,378
6	81.8	76.3	90.6	106,384	5,703	94.8	1,146,543
7	84.5	75.9	98.7	105,990	5,559	97.5	1,124,618
8	86.1	76.1	99.5	105,299	5,717	98.6	1,061,618
9	83.7	75.5	96.2	105,057	5,592	95.6	1,108,326
10	83.3	76.9	93.0	105,162	5,736	95.8	1,142,004
11	87.1	77.4	95.1	104,171	5,600	96.2	1,119,539
12	85.3	77.9	95.1	104,378	5,549	96.5	1,152,425
H29. 1	91.1	81.6	101.5	104,711	5,114	94.3	1,230,246
2	93.0	85.4	107.5	106,761	5,974	92.4	1,221,165
3	86.0	79.9	94.0	107,575	5,591	94.0	1,216,933

14 個別系列の数値

〔遅行系列〕

指標名 年月	Lg1 県在庫指数(製造工業)	Lg2 県普通営業倉庫保管残高	Lg3 県常用雇用指数(調査産業計)	Lg4 県有効求職者数(除く学卒)(逆)	Lg5 家計消費支出(関東大都市圏)※4	Lg6 消費者物価指数(横浜市・除く生鮮食品)	Lg7 県内銀行貸出約定平均金利
	季節調整値 H22年=100	季節調整値※1 トン	前年同月比 %	季節調整値 人	前年同月比 %	前年同月比 %	前年同月比 %
H27. 4	96.2	2,058,459	101.2	108,683	103.7	100.5	93.2
5	93.6	2,051,513	101.4	108,180	110.1	100.3	93.3
6	92.8	2,035,532	101.1	107,682	101.1	100.2	93.1
7	93.7	2,158,743	101.4	107,383	102.2	99.8	93.5
8	93.7	2,142,733	101.6	107,149	99.1	99.8	93.3
9	93.3	2,151,344	101.5	105,655	100.1	99.7	93.4
10	93.0	2,218,746	102.0	105,278	96.2	99.7	93.4
11	92.3	2,229,138	100.8	105,147	93.2	99.8	93.2
12	92.6	2,309,957	102.4	104,518	91.2	99.8	93.7
H28. 1	91.0	2,081,496	101.3	102,096	94.3	99.6	93.6
2	95.2	2,065,078	101.0	103,009	101.9	99.8	94.1
3	92.9	2,091,133	100.1	102,651	101.1	99.6	93.0
4	92.3	2,055,775	100.2	101,376	102.4	99.7	92.9
5	90.0	2,075,042	100.2	100,477	96.0	99.5	92.3
6	92.3	2,102,393	100.6	100,077	95.3	99.5	91.8
7	91.3	2,114,562	100.8	99,683	99.9	99.6	91.8
8	93.4	2,124,003	100.6	99,372	99.5	99.5	91.4
9	89.4	2,120,734	100.9	99,025	96.9	99.5	91.0
10	87.9	2,051,377	100.9	98,420	100.0	99.6	90.7
11	90.0	2,066,584	102.0	97,794	102.2	99.7	90.5
12	89.1	2,052,820	100.8	97,800	105.2	99.9	90.6
H29. 1	89.4	2,042,835	100.8	100,179	103.3	99.9	90.6
2	90.4	2,001,367	100.6	99,945	108.3	99.8	90.8
3	84.7	2,058,521	100.3	99,367	102.2	99.7	91.9

※1：神奈川県景気動向指数を作成する際に、独自に季節調整を行っている。

※2：普通車、小型車及び軽自動車の合計

※3：横浜港、川崎港及び横須賀港の貿易額（輸出入額）合計、円ベース

※4：勤労者世帯

(逆)：逆サイクル

・季節調整方法は⇒p. 22[参考]参照

・逆サイクルは⇒p. 8[参考]参照

ヒストリカルD I

ヒストリカルD Iは、個別の系列ごとに景気の山と谷を設定し（特殊循環日付といいます）、谷から山にいたる期間はすべてプラス、山から谷にいたる期間はすべてマイナスとして、次の算式により計算します。

$$\text{ヒストリカルD I} = \text{拡張(プラス)系列数} \div \text{採用系列数} \times 100(\%)$$

個々の系列における月々の不規則な動きをならして変化方向を決めているため、ヒストリカルD Iは比較的滑らかなものとなり、景気の基調的な動きを反映したものとなります。

一致指数の採用系列から作成したヒストリカルD Iが50%ラインを下回る直前の月が景気の山、上回る直前の月が景気の谷に対応し、景気転換点の判断の基礎となります。

神奈川県の場合、個別系列ごとの景気の山または谷の設定にあたっては、ブライ・ボッシュン法を利用しています。

ブライ・ボッシュン法(Bry-Boschan法)

この手法は、個別の系列ごとに景気の山または谷を設定する方法として、一定のルールを条件化したもので、全米経済研究所(NBER)で開発されました。

ブライ・ボッシュン法は、対象とする個別系列に12か月移動平均をはじめ数種類の移動平均を適用します。各移動平均の結果に対し経験則にもとづく一定の条件からそれぞれ転換点（山や谷となる月）を推定し、最後は転換点を1か所に絞り込みます。主な条件は次のとおりです。

1. 転換点は、その前後5か月の値のどれよりも大きい(小さい)こと。
2. 推定した転換点がデータの開始及び終了時点から6か月以上離れていること。
3. 山と山(谷と谷)が15か月以上離れていること。
4. 山と谷、谷と山が5か月以上離れていること。
5. 両端に近い山または谷については、その山や谷が端点より高い(低い)こと。

景気基準日付の設定

- ヒストリカルD Iによると、平成24年1月の翌月から50%を下回り、その後、24年12月の翌月から50%を上回っています。
- 神奈川県景気動向指数検討委員会における検討結果も踏まえ、景気の山を平成24年1月に、平成24年12月を景気の谷に暫定的に設定しました。⇒p.47参照
- 今回設定した景気の山及び谷は暫定的なものであり、今後、神奈川県景気動向指数を構成する個別系列の改訂等を踏まえ、改めて検証を行い確定します。

[ヒストリカルD I表]

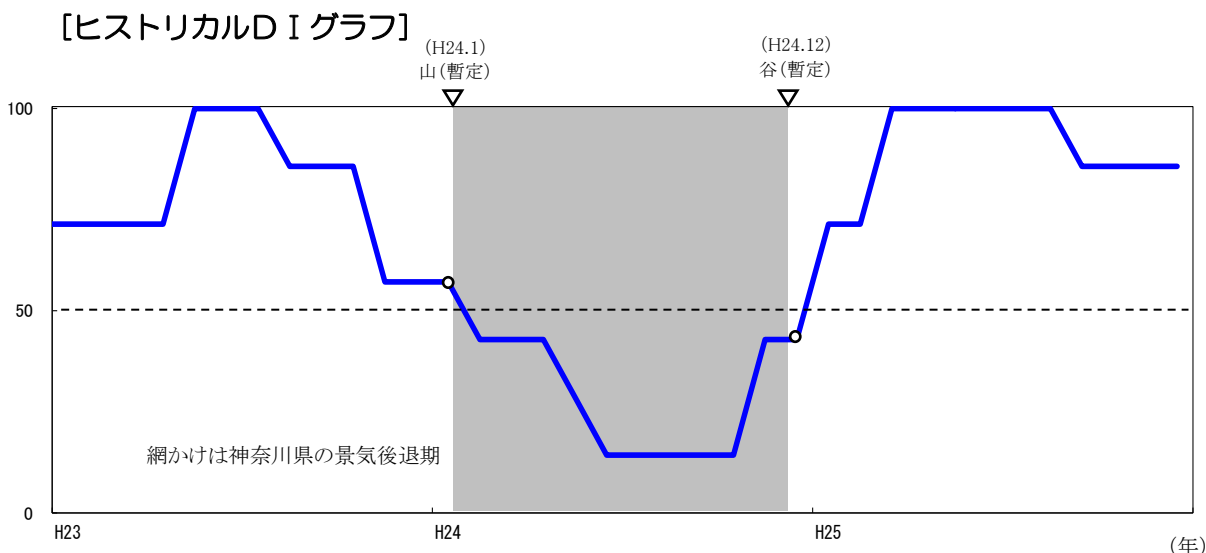
	平成23(2011)年												平成24(2012)年												平成25(2013)年																	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12						
県生産指数(製造工業)	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
県生産財出荷指数	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-
県投資財出荷指数	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
県有効求人数(除く学卒)	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
県雇用保険初回受給者数	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
県所定外労働時間指数(※)	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
横浜港等輸出入通関実績	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
拡張指標の数 a	5	5	5	5	7	7	7	6	6	6	4	4	4	3	3	3	2	1	1	1	1	1	3	3	5	5	7	7	7	7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	6		
採用指標の数 b	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
ヒストリカルDI(%) a÷b	71.4	71.4	71.4	71.4	100.0	100.0	100.0	85.7	85.7	85.7	57.1	57.1	57.1	42.9	42.9	42.9	28.6	14.3	14.3	14.3	14.3	14.3	42.9	42.9	71.4	71.4	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	85.7	85.7	85.7	85.7	85.7	85.7			

※「調査産業計」 注：神奈川県景気動向指数平成28年2月分(28年4月公表)の一致系列データをもとに作成している。

ヒストリカルD Iの推移

- ヒストリカルD Iは、平成21年5月以降、継続して50%を上回っていましたが、23年11月から24年1月まで57.1%となった後、24年2月に50%を割り込みました。
- 50%を割り込んだ後は、24年6月から10月まで5か月間14.3%が続きました。これを底に、25年1

月に71.4%と50%を上回った後は、継続して50%を上回りました。



[神奈川県景気基準日付]

(再掲 13ページと同じ)

景気基準日付 (年月)			期 間			参考 国の循環と の対応	参考 国の全循環 との差
谷	山	谷	拡張	後退	全循環		
	S55. 6	S58. 2		32か月			
S58. 2	S60. 6	S61. 12	28か月	18か月	46か月	第10循環	1か月長い
S61. 12	H 3. 3	H 6. 2	51か月	35か月	86か月	第11循環	3か月長い
H 6. 2	H 9. 6	H11. 7	40か月	25か月	65か月	第12循環	2か月長い
H11. 7	H12. 12	H14. 2	17か月	14か月	31か月	第13循環	5か月短い
H14. 2	H20. 4	H21. 4	74か月	12か月	86か月	第14循環	0か月(同じ)
H21. 4	H24. 1 暫定	H24. 12 暫定	33か月	11か月	44か月	第15循環	0か月(同じ)
第10～15各循環の平均月数			40.5か月	19.2か月	59.7か月		

後退期間について

国の第15循環に対応する神奈川の景気の後退期間は、平成24年1月を景気の山とし、平成24年12月を景気の谷とする11か月となりました。

過去の神奈川の後退期間は最長で35か月、最短で12か月、平均で22.7か月ですので、今回の後退期間はこれまでで一番短かったこととなります。

神奈川県景気動向指数検討委員会

神奈川県景気動向指数検討委員会(以下、委員会といいます)は学識経験者等で構成し、神奈川県景気動向指数に係る採用系列の見直し及び過去の景気転換点の設定について専門的立場からの意見を求め検証することを目的として設置されています。(平成9年6月26日設置)

委員会開催状況

- 委員会は、景気基準日付を設定するための統計データがそろった段階で随時開催されるため、開催周期は不定期です。
- また、景気が一循環(谷→山→谷)する毎に、景気循環への対応性が悪くなった採用系列について、よりよい指標がある場合に入替えをするかどうかを検討しています。

[委員会開催状況一覧]

	開催日	内 容	
第1回	H 9. 7. 25	公表準備 K D I の作成(採用系列)について	
第2回	H 9. 9. 11	公表準備 景気基準日付の設定、K D I の公表形式について	
		(平成10年2月、平成9年11月分よりK D I 公表開始)	
第3回	H10. 10. 27	景気基準日付の設定	平成9年8月を景気の山と暫定
第4回	H12. 10. 17	景気基準日付の設定	平成11年7月を景気の谷と暫定
第5回	H13. 11. 21	採用系列の見直し 景気基準日付の設定	平成9年6月を景気の山と確定 平成11年7月を景気の谷と確定
第6回	H14. 7. 16	景気基準日付の設定	平成13年3月を景気の山と暫定
第7回	H15. 11. 18	景気基準日付の設定	平成12年12月を景気の山と確定 平成14年3月を景気の谷と暫定
第8回	H16. 11. 16	採用系列の見直し 景気基準日付の設定	平成14年2月を景気の谷と確定
第9回	H21. 6. 3	景気基準日付の設定	平成19年11月を景気の山と暫定
第10回	H22. 11. 19	景気基準日付の設定	平成21年4月を景気の谷と暫定
第11回	H25. 2. 14	景気基準日付の設定 採用系列の見直し 神奈川C I 中心の公表形態へ移行	平成20年4月を景気の山と確定 平成21年4月を景気の谷と確定
第12回	H26. 11. 28	景気基準日付の設定 採用系列の変更	平成24年1月を景気の山と暫定 平成24年12月を景気の谷と暫定
第13回	H28. 6. 15	景気基準日付の設定 採用系列の見直し	

採用系列見直しの状況

- 第1回の委員会にて、公表開始時の採用系列を決定しました。
- 第5・8・11・12・13回委員会で見直し等を行い、新系列にて平成13年10月分、平成16年10月分、平成25年1月分、平成27年1月分、平成28年7月分よりそれぞれ公表しています。

[採用系列の変遷]

☆：追加した系列。 ◎：変更した系列。 ▲：除外した系列。

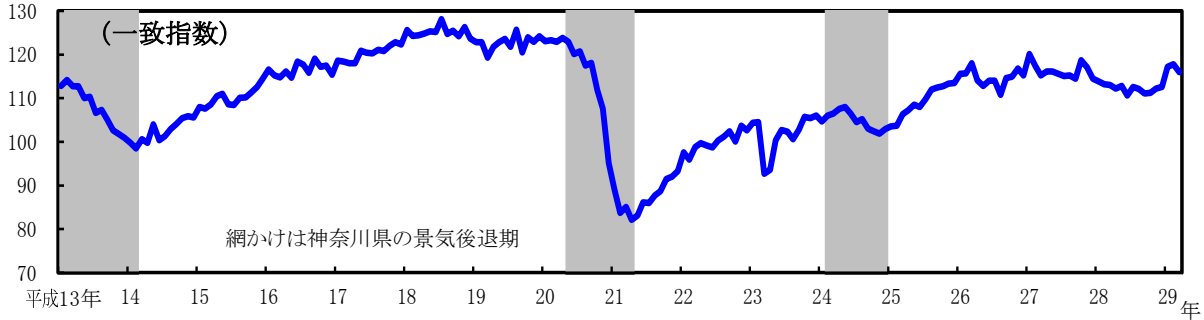
	系列名	第1回	第5回	第8回	第11回	第12回	第13回
先行系列	L1: 県最終需要財在庫率指数	○	○	○	○	○	○
	L2: 県生産財在庫率指数				☆	○	○
	L3: 県新規求人数 (除く学卒)	○	○	○	○	○	○
	県所定外労働時間指数 (製造業)	一致系列より	☆	○	▲	一致系列へ (調査産業計に変更)	
	県新設住宅着工床面積	○	○	○	○	○	▲
	県乗用車新車新規登録台数 ^{注1}	○	○				
	L4: 県乗用車新車新規登録・届出台数 ^{注2}			変更◎	○	○	○
	消費者態度指数 (関東)				☆	○	
	L5: 消費者態度指数 (関東) (原系列)						変更◎
	建築着工床面積 (工・商・サービス業計)	○	▲	一致系列へ			
	L6: 県企業倒産件数	○	○	○	○	○	○
	日経商品指数 (17種) (前年同月比)	○	○	○			
	L7: 日経商品指数 (42種) (実数値)				変更◎	○	○
	一致系列	C1: 県生産指数 (製造工業)	○	○	○	○	○
C2: 県生産財出荷指数					☆	○	○
県大口電力使用量		○	○	○	○	○	▲
県首都高神奈川線通行台数 (大型)				○	▲		
C3: 県投資財出荷指数		○	○	○	○	○	○
県有効求人倍率 (除く学卒)		○	○	○			
C4: 県有効求人数 (除く学卒)					変更◎	○	○
県雇用保険受給者数実人員		○					
C5: 県雇用保険初回受給者数			変更◎	○	○	○	○
建築着工床面積 (工・商・サービス業計)		先行系列より	☆	▲			
県所定外労働時間指数 (製造業)		○	▲	先行系列へ			
C6: 県所定外労働時間指数 (調査産業計)				先行系列より	☆	○	○
県大型小売店統計百貨店販売額		○	○	▲			
C7: 横浜港等輸出入通関実績		○	○	○	○	○	○
遅行系列	Lg1: 県在庫指数 (製造工業)	○	○	○	○	○	○
	県最終需要財在庫指数	○	▲				
	Lg2: 県普通営業倉庫保管残高		☆	○	○	○	○
	県常用雇用指数 (製造業) (季節調整値)	○					
	県常用雇用指数 (調査産業計) (季節調整値)		変更◎				
	Lg3: 県常用雇用指数 (調査産業計) (前年同月比)			変更◎	○	○	○
	Lg4: 県有効求職者数 (除く学卒)				☆	○	○
	家計消費支出 (関東大都市圏) ^{注3} (季節調整値)	○	○	○			
	Lg5: 家計消費支出 (関東大都市圏) ^{注3} (前年同月比)				変更◎	○	○
	県消費者物価指数 (季節調整値) ^{注4}	○	○	○			
	県消費者物価指数 (前年同月比) ^{注4}				変更◎		
	消費者物価指数 (横浜市) (前年同月比) ^{注4}					変更◎	
	Lg6: 消費者物価指数 (横浜市) (前年同月比) ^{注5}						変更◎
	県内銀行貸出約定平均金利 (実数値)	○	○				
Lg7: 県内銀行貸出約定平均金利 (前年同月比)			変更◎	○	○	○	
県法人事業税調定額	○	○	▲				

注1：普通車、小型車の合計 注2：普通車、小型車及び軽自動車の合計 注3：勤労者世帯 注4：帰属家賃を除く総合
注5：生鮮食品を除く総合

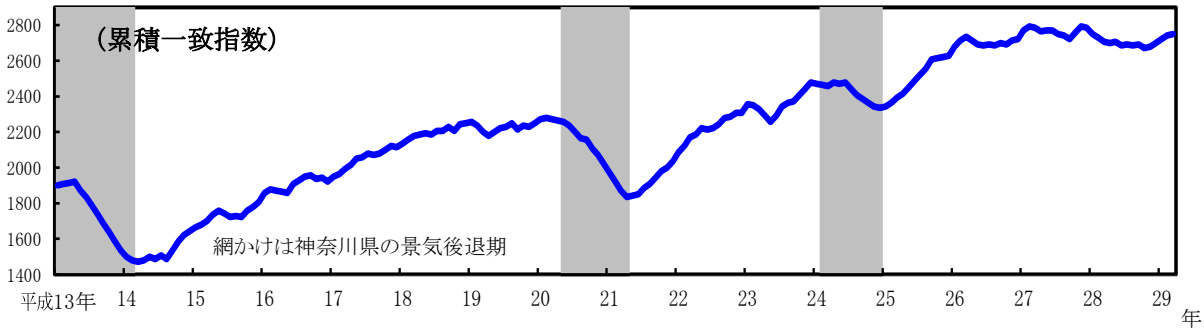
- 景気動向を反映しやすい対企業アンケート調査(ビジネスサーベイ)など、県内分が公表されている景気指標と神奈川C I及びK D Iの動きを比較しました。

【神奈川C I】 (神奈川県統計センター)

(平成22年=100)

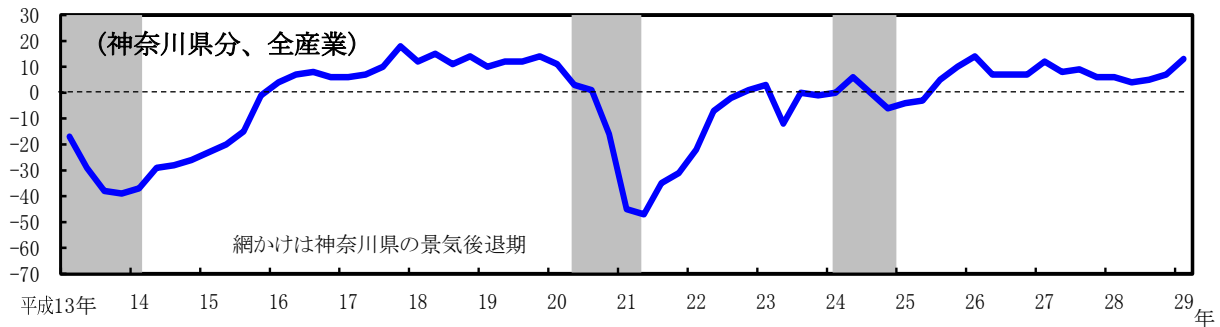


【K D I】 (神奈川県統計センター)



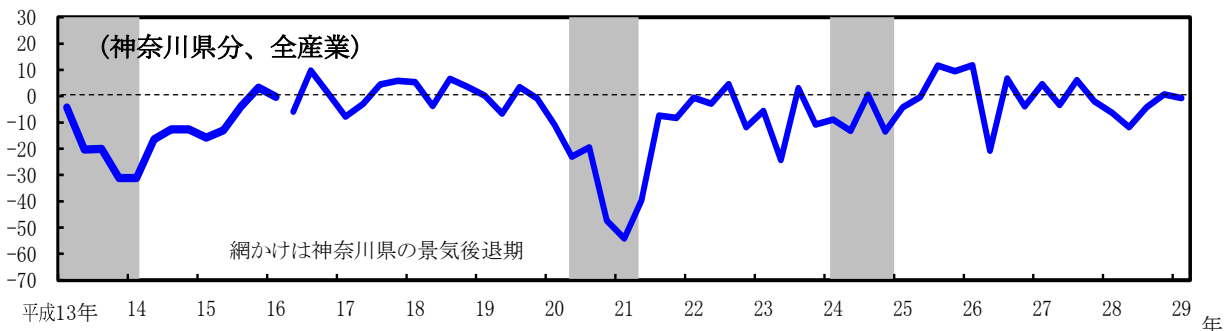
【日銀短観 業況判断D I】 (日本銀行横浜支店)

(「良い」-「悪い」 単位:%ポイント)



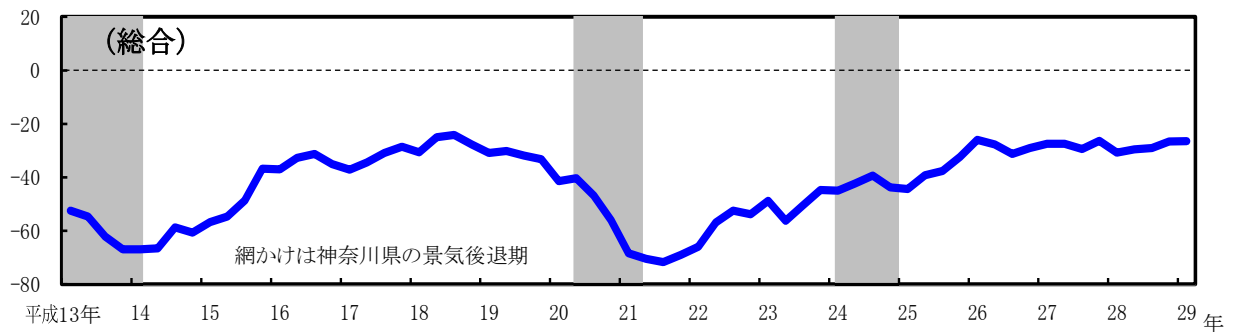
【法人企業景気予測調査 景況判断BS I】 (財務省関東財務局横浜財務事務所)

(「上昇」-「下降」 単位:%ポイント)

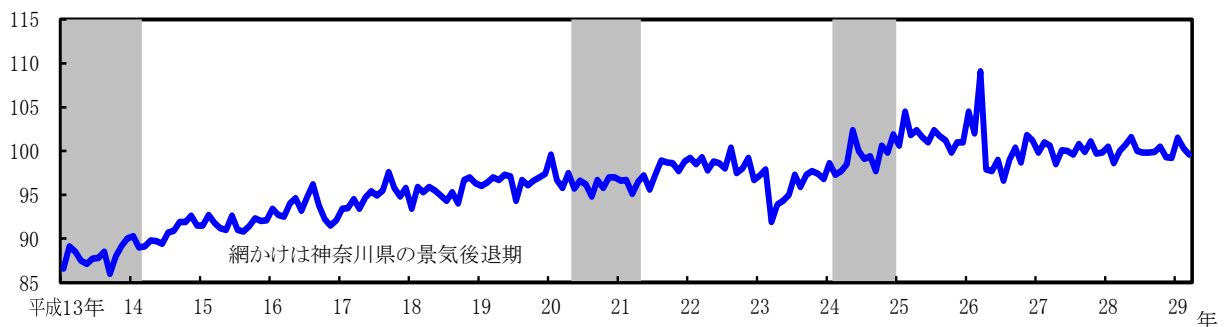


注：平成16年第1四半期以前は「財務省景気予測調査」の数値を利用しており、接続しません。

【中小企業景気動向調査結果 業況判断D I】 (公益財団法人神奈川県産業振興センター) (「良い」-「悪い」 単位:%ポイント)



【神奈川消費総合指数】 (株式会社浜銀総合研究所) (平成27年=100)



日銀短観 業況判断D I

日本銀行が四半期ごとに実施している企業短期経済観測調査を一般に日銀短観といいます。業況判断は調査項目の一つであり、各企業または各事業所単位で、収益を中心とした業況についての全般的な判断を「良い」「さほど良くない」「悪い」のいずれかで回答します。これを集計し「良い」と回答した企業の構成比(%)から「悪い」の構成比(%)を差し引いたものが業況判断D I (%ポイント)となります。3か月先についても判断するなど景気予測に利用できるほか速報性も高いため、景気判断のための代表的な指標となっています。

法人企業景気予測調査 景況判断BS I

法人企業景気予測調査は財務省と内閣府が四半期ごとに実施している調査です。景況判断は、直前の四半期と比べた各社の景況について、「上昇」「不変」「下降」「不明」のいずれかで回答します。景況判断BS Iは「上昇」と回答した企業の構成比から「下降」の構成比を差し引いて求めます。

中小企業景気動向調査結果 業況判断D I

この調査は、公益財団法人神奈川県産業振興センターが県内の中小企業を対象として四半期ごとに実施しています。業況については、各社の業績状況をどのように判断するかについて、「良い」「普通」「悪い」のいずれかで回答され、「良い」と答えた企業の構成比から「悪い」の構成比を差し引くことで、業況判断D Iを算出しています。

神奈川消費総合指数

神奈川消費総合指数は株式会社浜銀総合研究所が県内の消費動向を総合的に把握することを目的として作成し月次で公表している指数です。家計調査の1世帯当たりの消費支出額に県内世帯数を乗じたものをベースとしたうえ、サービス関連消費なども含まれており、県内消費総額の水準を示しています。指数は物価変動の影響を除いた季節調整値となっており、2015年基準です。

[神奈川県]

	神奈川県金融経済概況 注 (日本銀行横浜支店)		神奈川県の経済情勢報告 (関東財務局横浜財務事務所)	
	公表日		公表日	
平成 28 年	1月		1月27日	持ち直しが続いている(1月判断)
	2月	2月12日 緩やかに回復している		
	3月	3月9日 緩やかに回復している		
	4月	4月20日 回復の動きが一服している	4月27日	一部に弱さがみられるものの、持ち直しが続いている(4月判断)
	5月	5月18日 回復の動きが一服している		
	6月	6月10日 回復の動きが一服している		
	7月	7月22日 回復の動きが一服している		
	8月		8月2日	ここきて足踏みがみられるものの、緩やかに持ち直している(7月判断)
	9月	9月9日 回復の動きが一服している		
	10月	10月14日 回復の動きが一服している	10月25日	一部に足踏みがみられるものの、緩やかに持ち直している(10月判断)
	11月	11月11日 回復の動きがみられつつある		
	12月			
平成 29 年	1月	1月13日 回復の動きがみられている	1月25日	緩やかに持ち直している(1月判断)
	2月	2月10日 回復の動きがみられている		
	3月	3月10日 回復の動きがみられている		

注：神奈川県金融経済概況は、文頭の「神奈川の景気は、」を省略しています。

[全 国]

	月例経済報告 注1 (内閣府)			経済・物価情勢の展望 注2 (日本銀行)	
	公表日			公表日	
平成 28 年	1月	1月20日	このところ一部に弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている	1月30日	輸出・生産面に新興国経済の減速の影響がみられるものの、緩やかな回復を続けている
	2月	2月25日	このところ一部に弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている		
	3月	3月23日	このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている		
	4月	4月21日	このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている	4月29日	新興国経済の減速の影響などから輸出・生産面に鈍さがみられるものの、基調としては緩やかな回復を続けている
	5月	5月23日	このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている		
	6月	6月17日	このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている		
	7月	7月25日	このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている	7月29日	新興国経済の減速の影響などから輸出・生産面に鈍さがみられるものの、基調としては緩やかな回復を続けている
	8月	8月24日	このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている		
	9月	9月16日	このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている		
	10月	10月25日	このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている		
	11月	11月25日	このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている	11月1日	新興国経済の減速の影響などから輸出・生産面に鈍さがみられるものの、基調としては緩やかな回復を続けている
	12月	12月21日	一部に改善の遅れもみられるが、緩やかな回復基調が続いている		
平成 29 年	1月	1月23日	一部に改善の遅れもみられるが、緩やかな回復基調が続いている	1月31日	緩やかな回復基調を続けている
	2月	2月23日	一部に改善の遅れもみられるが、緩やかな回復基調が続いている		
	3月	3月23日	一部に改善の遅れもみられるが、緩やかな回復基調が続いている		

注1：月例経済報告は、文頭の「景気は、」を省略しています。


注2：経済・物価情勢の展望は、文頭の「わが国の景気は、」を省略しています。

[神奈川県景気動向指数のホームページ]

神奈川県ホームページ

- > 電子県庁・県政運営
- > 県域・県勢情報・県勢
 - > 総合統計・家計調査・物価調査
 - > 神奈川県景気動向指数

神奈川県景気動向指数	検索
------------	----



[問合せ先]

年度報記載の数値や内容につきましては、下記へお問い合わせください。

担 当：神奈川県統計センター 企画分析課
住 所：〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
電 話：045-312-1121(代表) 内線2520～2522
ファックス：045-313-7210

平成28(2016)年度
神奈川県景気動向指数年度報

平成29年11月発行

編集・発行 神奈川県統計センター

